
シークレットゲーム ~ subversive elements ~

プクプク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム〜subversive elements〜

【Nコード】

N9208X

【作者名】

プクプク

【あらすじ】

出口の封鎖された建物へと連れてこられた13人のプレイヤー。彼らが参加させられるのは、己の生死を懸けたゲーム。ルールを守り、限られた時間内に首輪の解除条件を満たさなければ、首輪の作動によって殺される。生き残るためには、PDAに書かれた常識では考えられないことを成し遂げなければならない。命懸けのゲームが今、その血に塗れた幕を開けた・・・

第1話 少年と少女（前書き）

この小説はシークレットゲーム（キラークイーン）の二次創作小説であり、『シークレットゲーム』KILL or DIE』をエピソード1としたときのエピソード2にあたります。

登場人物はエピソード1と変わりませんが、細かい設定は変わったりしています。

互いが互いのネタバレを含んでおりますので、どちらから読んでもらっても、片方しか読まなくても大丈夫．．．なように書きたいと思います。

もちろん私個人としては両方読んでもらいたいですが。

原作とは一部のルールや首輪の解除条件が違いますので、ご了承ください。

ご都合主義や主人公補正があったりしますが、そちらも黙認していただければと思います。

以上のことが大丈夫だという方は、どうぞこのまま本文へお進みください。楽しんでいただければ幸いです。

第1話 少年と少女

『それではみなさん、よいお年を〜!』

年末恒例の紅組と白組に分かれて競い合う歌番組が終わりを告げる。

「いよいよ今年も終わりねえ」

母さんがしみじみと呟く。

「そうだな、今年もいろいろあったが、明日からは新年だ。3人も、気持ちを一新して新年を迎えよう」

父さんがオレと兄貴の肩を軽く叩きながらそう言う。

「そうだけ兄貴、いつまでも修学旅行の時のことを引きずってんなよ」

本来修学旅行に行っていたはずの間、兄貴はどこか知らない建物に幽閉されて、殺し合いみたいなゲームに参加させられたらしい。そんなことがあり得るのかと思ったが、兄貴がそこで撮ってきた写真から、オレはそれを信じざるを得なかった。

「・・・そうだね」

「ん？ 彰、あきひ修学旅行で何かやらかしたのか？」

「いや、そうじゃないよ、父さん。ただもうちょっと楽しみたかった」

たなっただけ」

オレはそのことを警察や両親に相談しようと言ったが、兄貴は両親に心配を掛けたくはないからと言って、そのことをオレ以外には言わなかった。オレには心配させてもいいのかよ、とか思ったが、兄貴曰く、オレにも気を付けておいてほしいから、だそうだ。

ちなみに、オレたちは本当の両親とは既に死に別れている。その後しばらく孤児院で暮らしていたが、4年前に今の両親に引き取られた。

「はははっ。そうか、まだまだ遊び足りなかったか」

「でも、受験が終わってからね。そうしたら、またみんなで出かけましょう」

「そうそう。受験が終わったら、パーツとお祝いをやってやろうじゃないか。彰の合格祝いと、2人の学校卒業記念にな！」

「いや、父さん、まだ僕は合格したわけじゃないから」

「大丈夫さ、彰ならな。これが齋しうなら心配だが」

「あ！ 父さん、俺を馬鹿にすんじゃないぞ！ これでもテストで100点取ったことがあるんだからな！」

「おお、そうか！ 齋もやればできる子だったんだな。いつも外で駆け回っているイメージがあるから、ついつい遊んでばかりなのかと思ったぞ」

「そんなわけないだろ！ オレは文武両道なんだ！」

「そうか、なら、うちの子は二人とも優秀だな」

「あつたり前だ！」

「まあまあ、2人ともじゃれあうのはそれくらいにしていって、もう年が明けるわよ」

時刻は既に23時59分を過ぎていた。

「そうだな、初水を汲む準備をしなければ」

父さんはそう言っていていそいそとシンクへ向かう。オレは兄貴と母さんと一緒に、テレビの前で年が明けるのを待った。

そして、時計の針が深夜の零時を指すと同時に、テレビから明けましておめでとこの声が聞こえる。

「彰、斎、明けましておめでとこ」

「うん、母さん、明けましておめでとこ」

「明けましておめでとこ！」

その後は家の近くの神社に初詣に行って、深夜2時ごろに寝て、朝起きておせち料理を食べ、一日中テレビの前でだらだらと過ごした。次の日も同じように、朝には昨日のおせちの残りを食べ、兄貴は勉強するために部屋に戻ったが、オレは再びテレビを占領して一日を終えた。

だが、幸せな日々はそこまでだった。その日の深夜、家が火事になった。決してオレや兄貴、ましてや、父さんや母さんのせいではない。誰かに放火されたのだ。それも、わざわざ両親の寝室の真横に結果、両親はオレと兄貴の目の前で命を落とし、オレたちだけが生き残った。

また、オレたちだけが生き残ってしまった。

．．．

オレの夢はそこで終わった。理由は簡単、オレが目覚めたからだ。

「ん．．．、ふあ．．．」

体をほぐすために、軽く伸びをする。

たまに、こんな風に昔のことを夢に見ることがある。その度に、オレはそこからのことも思い出す。

その後、どこかから現れた身元引受人に、兄貴は進学を諦めさせられ、就職することになった。当時、その人の目を盗んで、兄貴はオレにその人が以前の組織の関係者だということを伝えた。きっと、

放火も組織の仕業だったのだろう。だが、身元引受人を組織側に押さえられた以上、オレたちにできることは何もなかった。

オレは一人暮らしをすることになり、兄貴は組織で働く、つまり、ゲームに組織側の人間として参加させられることとなった。

オレの地獄の日々はそこから始まった。

不定期に、オレのもとに兄貴が人を殺すところを撮った写真が送られてくるのだ。オレは躍起になって組織の尻尾を掴もうと足掻いたが、ただの無駄骨だった。しばらくしてその写真も送られてこなくなり、オレは進学を許されていたため、志望校を目指して勉強した。

そして、オレは志望校に見事合格することができ、今ここにいます。

「……って、ここは……?」

てっきりいつもの如く、授業中に居眠りでもしていたのかと思っただけが、そうではなかった。

かといって、家にいるわけでもない。

ここは、以前に見せてもらった兄貴が撮ってきたゲームが行われた場所に酷似していた。

全面がコンクリートの壁に、同じくコンクリートできていて敷物の一切ない床。埃っぽいわけではないが、薄汚いベッド。

それに……

「・・・やっぱりか」

首には首輪が、机の上にはPDAが、それぞれ兄貴の写真通りあった。

とりあえず、オレは唯一の手がかりであるPDAを手に取ってみる。画面には、クラブの4が大きく表示されていた。その下にボタンがあったので、それを押してみると、画面が切り替わり、『ルール』、『機能』、『解除条件』という文字が表示された。

「・・・上から順に見ていくか」

まずはルールの文字に触れる。すると、画面に合わせて4つのルールが表示された。

<ルール1>

参加者には特別な首輪が付けられている。

それぞれのPDAに書かれた条件を満たした状態で、首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外すことができる。

条件を満たさない状況でPDAを読み込ませると首輪が作動し、15秒間警告を発した後、警備システムと連携して着用者を攻撃する。

<ルール2>

参加者には1〜9のルールが4つずつ教えられる。

与えられる情報はルール1と2と、残りの3〜9から2つずつ。およそ5、6人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。

<ルール5>

侵入禁止エリアが存在する。

初期では屋外のみ。

侵入禁止エリアへ侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。

また、2日目になると侵入禁止エリアが1階から上のフロアに向かって広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

<ルール7>

開始から6時間以内に人に危害を加えると、危害を加えた者の首輪が作動する。

過失や正当防衛は除外。

まず1つ目には主に首輪の外し方が、2つ目にはルールが全部で9つあることが、3つ目には進入禁止エリアがあり、そこに一定時間以上いると首輪が発動することが、4つ目には開始から6時間以内は人に危害を加えてはいけないということが書かれていた。

次に、1つ前の画面に戻って、今度は機能の文字に触れる。その中からさらに文字が浮かび上がったが、現在そこにあっただのは『地図』という文字だけだった。それをタッチすると、異常に広い地図が展開された。画面に入りきらず、手で動かしてようやく全体を見ることがができる。

・・・と思ったら、拡大、縮小機能がついていたので、オレは画面に地図が入りきる大きさに設定した。

今は必要なかったので、再び前の画面に戻り、最後に解除条件の文字に触れる。

「解除条件・・・、4名以上の殺害？」

そこに書かれていたのは、常識では考えられないことだった。だが、既に兄貴のことで多少ながら事情を知っていたオレは、こんな条件があってもおかしくはないと思った。

追記で手段は問わないと書かれているが、これはどういうことだろうか？

よくわからなかったので、とりあえず放置しておくことにする。

「さて・・・」

これからどうするか、そんなことは決まっている。

「ようやくオレの番か。何としてでもここから生きて帰って、お前たちの悪事のすべてを暴いてやる・・・!」

オレはその思いを胸に、まずはルールを全て確認するため、他の参加者との遭遇を目的に建物の中を歩き始めた。

「誰もいないな・・・」

さすがに広すぎるのか、もうかれこれ30分は歩いているが、オレは未だに誰とも会えていなかった。

「先に上に向かうか？・・・いや、やめておいた方がいいな」

おそらく今2階以上に行くと、他のプレイヤーと接触する確率はかなり低くなる。できれば開始から6時間以内にすべてのルールを把握しておきたいので、オレはこのまま歩き続けることにした。

その後も歩き続けていると、オレはホールのようなところに出た。

「随分と大きなホールだな。元々は何かの会場だったのか？」

外に出ればここがどんなところか少しはわかるかもしれないと思っただが、残念ながら入口にはシャッターが下りていた。

「ん、あそこだけ壊れているな・・・だが、その先はコンクリートで埋められているか」

一か所だけシャッターが壊れている場所があったので、そこへ行っ

てみたが、その向こう側に見えていたのは他と変わらないコンクリートの壁だった。

「まあそうだろうな。ここから逃げることができるのなら、殺し合いになどならないしな」

オレはそこから立ち去ろうとして、そこで声を掛けられた。

「ねえ」

「っ!」

突然の出来事に動揺し、オレは勢いよく振り向いた。

「きゃあ!」

オレが急に後ろを振り向いたからか、いつの間にかオレの後ろまで来ていた少女が驚いて尻餅をついた。

「……いくら戦闘禁止期間中だとは言っても、もう少し用心した方がいいな。」

気の抜きすぎているとルールを知らない奴にいきなり殺されかねない。

「悪い、大丈夫か？」

オレはそう言って、倒れた少女に向かって手を差し出した。

そのついでに、オレは相手を軽く観察してみる。身長はそれほど高

くなく、とくに運動をしているような体つきには見えない。俺と同一年くらいで、髪はダークブラウンのセミショートだ。

・・・武器さえ持っていなければ、こいつにやられることはまずないな。

「あ、ありがとう」

少女はその手をすんなりと握って立ち上がる。

「急に後ろ振り向くからびっくりしちゃった」

「悪かった、次があれば気を付ける」

「ふふっ、そうね、そうして」

少女は立ち上がった後、軽く服をはたいて、自己紹介をした。

「私は千島泉希ちしまみずきっていうのよろしくね」

「ああ、よろしく。オレは村崎齋むらさきだ」

「ふーん、村崎君って言うんだ。それで、こんなところで何してたの?」

「特に何かをしていたわけではないが、強いて言うなら人探しだな」

「人探し? 誰かとはぐれちゃったんだ?」

「いや、そういうわけじゃない。千島みたいなオレ以外のゲームの

参加者を探していたんだ」

「え？ ゲームの参加者？ 私が？」

「ああ。首輪がついているから、おそらくそうだろう」

オレは自分の首輪を示しながらそう言った。

「首輪……、あ、あった。これのことね？」

千島は自分の首のあたりをまさぐって、首輪を確認した。

「おそらくそうだろう。オレは自分の首輪を見たわけではないから、確かなことは言えないがな」

「それで、これってどんなゲーム？」

「詳しくはPDAに書いてあるが、要は生存を賭けた殺し合いみたいなものだ」

「え……、こ、殺し合い！？ ……ていうか、PDAってどこにあったの？」

「ん、オレが寝かされていた部屋にあったが？」

「私それ持ってない……」

「なんだと!？」

「い、いや、そんなに驚くことかな……」

「これがないと首輪が外せない。そして、首輪が外せないということとは死を意味する。これでPDAを持っていないことの重大さがわかったか？」

「私、今すぐ取りに戻る」

「オレもついて行っていいか？」

「うん、いいよ。こっち！」

そう言っつて、千島はオレが来た方とは逆の通路を示してそちらへ向かって走り出し、オレはその後について行った。

第2話 知るが故の過ち（前書き）

とりあえず既に書き溜めてた分をちよこちよこ掲載していきます。

第2話 知るが故の過ち

「よかった！ まだあった！」

オレたちが入った部屋には、1台のPDAが置かれていた。

「持っていていかれていなくてよかったな」

「うん！ ありがとね、PDAのこと教えてくれて」

「気にするな。それに、オレはそれに書かれているルールが知りたかったからな」

「ルール？ ちょっと待ってね・・・、あ、これのことだね。うーんと、1と2と3と9が書かれてるみたい」

「そうか。なら、3と9を教えてもらえないか？」

「・・・う、うん・・・」

「なんだ？ どうかしたのか？」

「いや、ルールに物騒なことがいっぱい書いてあるなって思って・・・」

「確かにな。だが、ここに連れてこられて、こうして首輪やPDAが用意されている以上、それらが嘘だと笑い飛ばすことはできない

だろう」

「そつだよね……。っと、ルールね、はい」

読み上げてくれるだけでよかったのだが、千島はPDAをオレに差し出した。

「……少し借りるぞ」

<ルール3>

PDAは全部で13台存在する。

13台にはそれぞれ異なる解除条件があり、ゲーム開始時に参加者に1台ずつ配られている。

この時のPDAに書かれているものがルール1で言う条件にあたる。

他人のカードを奪っても良いが、そのカードの条件で首輪を外すことは不可能で、

読み込ませると首輪が作動する。

あくまで初期に配布されたもので実行されなければならない。

<ルール9>

それぞれのカードの解除条件は以下の通り。

A 2日と23時間他のプレイヤーを傷つけない。罨にはめること

は可。なお、このPDAのみ館内のすべての罠の位置がわかる。

2 JOKERのPDAの破壊。また、PDAの特殊効果で半径1メートル以内ではJOKERの偽装機能は無効化されて初期化される。

3 首輪とPDAを合わせて7つ以上取得する。ただし、首輪は最低でも2つ必要。

4 4名以上の殺害。手段は問わない。

5 館全域にある24個のチェックポイントを全て通過する。なお、このPDAのみ地図に回るべき24のポイントが記載されている。

6 JOKERの機能が5回以上使用されている。自分でやる必要は無い。近くで行われる必要も無い。

7 総計60時間以上他のプレイヤーに姿を見られない。姿を見られた場合、1時間以内に相手を殺害すれば免除。

8 自分のPDAの半径5メートル以内でPDAを正確に5台破壊する。手段は問わない。6つ以上破壊した場合は首輪が作動する。

9 「ゲーム」の開始から6時間目以降で、12時間以上行動を共にした人間1人以上の殺害。

10 5個の首輪が作動していて、更に5個目の作動が2日と23時間の時点よりも前に起こっている。

J 「ゲーム」の開始から24時間以上行動を共にした人間が2日

と23時間時点で生存している。

Q 2日と23時間の生存。

K 『A』、『10』、『J』、『Q』のPDAの取得。

ルール3には首輪は初期配布されたPDAでないと解除できないことが、ルール9には全てのPDAの解除条件が書かれていた。なるほど、確かに読み上げるには少々長いかもしれない。

「ありがとう。だが、PDAは人に手渡さない方がいい。盗られたり、最悪の場合は壊されたりするかもしれないぞ」

「そ、そっか。そうになったら大変だね。うん、次からはそうする」
オレにそうされるかもしれないと危惧したのか、千島は差し出したオレの手の中から素早くPDAを抜き取った。

「それと、オレの方に書かれていたルールだが、千島と違うのは5と7だな」

オレはその2つを読み上げる。

「ふーん、開始から6時間経つまでは戦闘禁止で、進入禁止エリアっていうのがあって、2日目からそれがどんどん下から迫ってくるのね」

「そういうことだな」

「それで、これからどうしよっか？」

「オレはルールを全部知るために、まだ会っていないプレイヤーに接触しようと思う」

「じゃあ私もそれについて行っていい？」

「オレにPDAを盗られたり、殺されたりしてもいいというのなら構わないが」

「・・・そんなことするの？」

「切羽詰まったら人間何をするかわからないからな」

「そんなこと言ったら誰とも一緒に居られないよね」

「そうだな。裏切られるのが怖いのなら1人で行動することだ」

「なら、私は村崎君と一緒に行くよ」

何が、なら、なのかは全く分からなかったが、どうやら千島はオレと行動を共にすることにしたらしい。

「そうか、じゃあ行くでしょう。6時間経つ前にできるだけルールを把握しておきたいからな」

そして、オレたちは他の参加者との接触を図るために、まだ進んでいない方へと歩き出した。

だが、その後は誰とも会おうことなく、とつとつ開始から6時間が経ってしまった。

ピロリン ピロリン ピロリン

「あれ？ なんだろ？」

オレと千島のPDAが同時に鳴る。

「・・・メールが来たのか？」

画面では、メールのマークが点滅していた。試しにそれに触れてみると、メールが開かれた。

『ゲームの開始から6時間が経過しました。これより戦闘禁止エリア以外での戦闘を許可します』

「・・・始まつちやったね」

「そうだな・・・。ここからは本当に何でもありだ。もし一緒に行動するのが怖くなったのなら、ここで別れよう」

「うっん、大丈夫。村崎君はきっとそんなことする人じゃないよ。私の勘がそう言ってる」

「ふん・・・。随分と当てにならない勘を持っているんだな」

「え・・・？」

千島がオレの襲撃に備えてか、一步下がる。もっとも、戦闘の素人がそんなことをしても無駄なのだが。

「オレには目的がある。そのためには人殺しもする。逆に殺されるかもしれない。オレについてくればそういう血の惨劇を見ることになるだろうが、それでもいいのか？」

「・・・そうなんだ・・・。うん、大丈夫。そうなりそうになったら逃げるから」

「逃げられればいいがな。・・・まあいい、オレは別にお前がついてきても何の支障もないんだ。このまま行くか」

「うん。・・・さすがにこんな建物の中で1人なんて、怖いよ・・・」

返事後の声は小さすぎてオレには聞こえなかった。

「ん、何か言ったか？」

「ううん、なんでもない。それより、これからもまだ1階を歩くの？」

「それもそうだな。そろそろ2階に上がってもいい頃か」

ゲーム開始から6時間も経てば、2階以上にいる人物が多くて不思議はない。多ければ半数以上が既に2階に上がっているだろう。

「よし、2階へ行くことにしよう」

「うん、わかった。じゃあ、一番近くにある階段は・・・っと、なんかバツ印がついてるけど、これって大丈夫かな？」

それを聞いて、オレは開かれたままだったメールを閉じ、代わりに地図を開く。

「ちょっと待て・・・、そうだな、仮にここが通れなかったとしても、近くにバツ印の付いていない階段があるから、確認のために行ってみる価値はあるかもな」

「じゃあそうしよっか」

そう言つて千島はオレの前を歩き出す。・・・実に無警戒だ。オレに後ろから殴り倒されるとは微塵にも思っていないのだろうか？

そんなことを思いながら、オレは千島の後について行った。

「ねえ、村崎君のPDAってなんなの？」

階段へ向かう途中、いきなり千島がそんなことを訊いてきた。

「・・・お前は馬鹿か？ そんなもの、教えるわけがないだろう」

「そうかなあ？ 私のは別に言ってもいいんだけど」

それは解除条件が楽な者の言葉であり、オレのように解除条件が厳しい者は、わざわざ公開して不利になるうとは思わない。

「じゃあ言ってみろ」

「そしたら教えてくれる？」

「そんなことはない」

「じゃあ言わない」

「結局言えないんじゃないか」

「そんなことないよ。ただ、私だけ教えるのはなんかなーって思っただけ」

「要は自分の解除条件を教えることで、相手のそれを聞き出したいんだろっ？」

「そういうわけじゃないんだけど、なんか私だけ言っのって損した気分だもん」

「そういうものか？」

「そういうものなの。ところで、バツ印っていうと、なんだろうっ・・・、封鎖されてるとか、近付くと危ないとか、そんなイメージがあるよね」

「そうだな。おそらくそのどちらかなんだろうが、後者なら、階段は封鎖されていないかもしれない。もしそうなら、そこに仕掛けてある罠などの危険さえ取り除くことができれば、通ることができるかもな」

「でも、わざわざそんな危険を冒してまで通ることないよね。近くにまともな階段があるんだし」

「ここはそうだがな。だが、他にもバツ印のついた階段はあるだろう。ほぼ対角線に位置する階段などを通れるようになれば便利なのに、これはそこだけに限らないが、他のプレイヤーに待ち伏せされにくい」

「あ、そっか。地図上では通れない場所ってなってるから、人が来ないんだ。じゃあやっぱりまともな階段を上らないとね」

「・・・なんでそうなるんだ？」

「だって、他の人たちに会うのが目的なんですよ？」

「それはそうだが、ゲーム開始から6時間が経った以上、相手が攻撃を仕掛けてこないとも限らないんだぞ？」

「でも、仕掛けてこないかもしれないよね。そんなのはまず1回会ってみないと分かんないし。ものは試しだよ」

「その1回で殺されなければいいがな」

「大丈夫だって。私、けっこう逃げ足は速いから」

そこでオレは、ようやくオレと千島の持っている情報に大きな差があることに気付いた。

「……そうか、千島は知らなかったな」

「え？ なにが？」

「このゲームはなんにも素手だけで戦うわけではない。刀もあれば弓もある。拳銃には銃まで存在する。それらから逃げ切るのは、はっきり言って無理だろう」

「……」

「それでもまだ、どんな奴とでもまずは話してみようと思うか？」

オレはそう質問したが、千島から返ってきたのはそれに対する答えではなく、オレへの質問だった。

「……ねえ、村崎君はなんでそんなにこのゲームに詳しいの？」

（しまったな、少々喋り過ぎたか……）

とはいえ、今更言ったことを訂正したり取り消したりはできない。

「……前に、このゲームに関する情報をたまたま拾ったことがあってな、それで知ったんだ」

結果、本当のような嘘のような曖昧なことを言っでごまかすことにする。だが、千島はオレのそんな曖昧な回避を許さなかった。

「でも、さっきの村崎君の口調はまるで実際に経験したことがあるみたいだったよ。ルールも全部本物だって思っつて、それを全然疑ってない。確かに首輪やPDAはあるけどさ、それだけで全部本物だって決めつけちゃうのはどうなのかな。書かれてるのは常識では考えられないようなことばっかりなのに。普通ならそんな情報はただのデマだって笑い飛ばすくらいじゃない？」

子供だましは一瞬で核心を突かれ、あっけなく砕け散る。仕方なく、オレは信じてもらえるもらえないは別にして、本当のことを話すことにした。

「…経験したことはない。だが、本当だと信じるに足る要素を、オレは持っている」

「それって何？」

「家族が、オレの兄貴がゲームに参加したことがある。その時に兄貴が撮った写真も見せてもらった」

「っ……でも、そんなのただの他人の言葉だし、写真だつてどこか他のとこで撮ったものかもよ？」

「確かに、お前にとってはなんてことないただの他人の言葉かもしれない。だが、オレにとっては他でもない兄貴の言葉だ。そして、オレは兄貴が決してこんなたちの悪い冗談を言うような奴じゃないということをよく知っている。写真の方は何とも言えないな。だが、そこに入っていた日付は間違いなく兄貴が修学旅行に行っていたはずの日だった」

「……まあ、これは日付をずらしたカメラがもう1台あればできな

いことはないが。

「でもっ……」

「別に千島にもこれを信じると言っているわけではない。自分が目にしたものだけを信じ、周りの言動に流されないのも素晴らしいことだとオレは思う」

「……じゃあ、このゲームが本物だってわかったら、村崎君のことを信じてあげる」

「そうか。だが、これらの話は全て作り話で、実は組織の関係者だったりするかもしれないぞ？」

「もし村崎君が本当に組織の関係者なら、そんなこと言わないよね」

「そうかもな。……いつまでもここで話していても仕方ない。オレは行くぞ」

そう言っつて、オレは千島の横を抜けて、目的地へと向かう。

「あ、待ってよ！ 私も2階までは絶対ついてくつてばー！」

なんだかんだ言っておきながら、結局千島はオレについてきた。

第3話 真実の証明

「封鎖されていて、尚且つ無闇に近づくと危険、か。厄介だな・・・」

「オレたちはバツ印のついた階段のところに来ていた。」

「でも、さつき村崎君が言ってたように、この有刺鉄線付きの瓦礫さえどかせられれば2階へ上がれるかもよ?」

「なんだ、千島はわざわざこんな危険なところから上る必要はなかったんじゃないのか?」

「む、別にそんなこと言ってるじゃないよ。もし待ち伏せされて襲われたら使わなきゃいけないかもしれないし。ただ、最初は普通に安全でみんなが通る階段を上るって言っただけ」

「それで、知らない人を見つけたら話しかけるんだよな。まずは自己紹介からか?」

「うー、もう、知らない!」

オレのことを信用したわけではない、それどころか、むしろ不振がっているのだろうが、こうして普通に会話をしてくれるのは正直ありがたかった。会話がいないには慣れているとはいえ、それは飽く迄も近くに会話をする対象がない状態の話だ。さすがに会話もなしにただ隣を歩かれ、目的地に着いても何も喋らないのでは気が

滅入るところだった。

「とりあえず、現状ではこんなところを上るのは到底無理だな。普通のバツ印がついていない階段の方へ行こう」

オレたちはその場を離れ、2階へ上がるために再び歩き出した。

そして、それから何事もなく階段に到着し、オレたちが2階へ上がった時。その時に、このゲーム、つまり、ルールや解除条件が本物であるということが示された。

幸か不幸か、プレイヤーの死体という最悪な物的証拠をもって・・・

「何、これ……。ひどい・・・」

千島は口に手を当てて、そう呟いた。

事実、目の前にあったオレより少し年上かと思われる少女の死体は、非常にむごいものだった。

服から露出した手足や顔にはいくつも青痣があり、後頭部はぱっくりと割れていた。おそらく、鉄の棒か何かで強打されたのだろう。辺りに飛び散った血の中には固まりきっていないものもあったので、殺されてからまだそれほど経っていないと思われる。

辺りを見回してみると、少し離れたところにPDAが落ちていた。

まだわかっていないルールを知ることができるかもしれないと思って拾ってみたが、画面が割れていたので壊れているの是一目瞭然だった。

「・・・PDAが壊れているってことは、これをやったのは8のPDAの所有者の可能性が高いな」

「なんで・・・あ、そっか。解除条件がPDAを5台壊す、だから・・・」

「そういうことだ。ひよつとしたらわざと壊したわけではなく、争いの最中に偶然壊れただけかもしれないが。・・・まあ、これでこのゲームが少しは本物だとわかつたんじゃないか？ 方法としては最悪だがな」

「そう・・・だね。さすがにこんなの見せられたら、信じるしかないよ・・・」

オレの言葉に千島は弱々しく頷いた。

「それより、早くここから離れよ」

「そうだな。こんなものは見ていて気持ちのいいものでもないし、さっさと離れることにするか」

本当はもう少し現場の状況を確かめたい気持ちもあったが、千島がここを離れたがっているのと、殺された人物が女性であることも相まって、オレはそれを断念した。

いくら死体とはいえ、男のオレが少女の体を隅々までチェックする

わけにもいかないしな。PDAが壊れていたことがわかっただけでも良ししよう。

しばらくその場から少し離れた部屋で休憩して、だいぶ千島が立ち直ってきたところで、オレは立ち上がって話を切り出した。

「オレはそろそろ行くが、千島はどうする？」

「村崎君について行く。こんなこと、一人で歩きたくないよ・・・」

「・・・そうか。好きにすればいい。だが、歩くときは横を歩いてくれ。背後に立たれるのはさすがに遠慮したいからな」

「うん、わかった。そうする」

そう言って、千島も立ち上がる。

そして、オレたちはまずは襲われたときに抵抗できるように、武器を探すことにした。

・ ・ ・

ここは同じ2階だが、斎たちがいる場所とはそれなりに離れた場所。そこに、女性にしては背が高めで、長い黒髪を後ろで縛っている1人の少女がいた。

彼女、九條彩菜くじょうあやなは2階への階段下で、階段を上がってすぐのところで行われていた惨劇の一部を、偶然通りかかった際に聞いていた。

・ ・ ・

彼女がそこに来たとき、階段上では既に争いが始まっていた。

『きゃあ！ やめて、やめてください！』

『ならさっさとPDA出せよ！』

『さっき見せたじゃないで・・・痛っ、痛いです！』

『そいつを俺によこせって言ってるんだよ！』

『でも、そんなことしたら私の首輪、外れなくなっちゃいます！』

『そんなこと知るかよ。いいからっ、出せよっ！』

ゴソツ、と鈍い音がして、上から少女の悲鳴が聞こえなくなった。

『はあっ、はあっ……。やっとくたばったか。まったく、馬鹿な女だぜ。素直によこせば死なずに済んだかもしれないねえのによ』

・ ・ ・

そこまで思い出して、私は頭を振ってあの時の音声を頭から追いやった。

「だめ……。気を張っておかないと、ついあの時のことを思い出してしまう」

その後、男の方が立ち去る音を聞いてから、私は2階に上がった。

そして、そこに倒れていたまだ頭から血を流している少女の姿を確認し、すぐにそれから目をそむけた。その姿はあまりにも痛々しく、とても見ていられなかった。

「私も、いつかあんなことを……」

声に出してから、またあの時のことを考えていたことに気づき、再びその考えを頭の隅に追いやる。いつかは考えなければならぬこ

とかもしれないけれど、今はまだそんなことは考えたくはなかった。

自分が、人を殺さなければならなくなるかもしれないということをして、

「あ、食料……」

目的もなくただ建物の中をさ迷い歩いてた彼女は、ある一室で真新しい段ボールに入った食料を見つけた。食料と言っても、その全てが缶詰だが。

「とりあえず、何か食べよう……」

段ボールの中に一緒に入っていた缶切りで魚の缶詰を開け、口を切らないように注意しながらそれを啜る。なぜ啜るのか、それはもちろん、缶切りまでついていながら、箸は入っていなかったから。親切なのか不親切なのかよくわからない。

ちょうど1つ食べ終えたところで、私は誰かが近づいてくる足音を耳にした。

「……っ!」

段ボールを素早く元に戻し、既に取り出していたものはバッグに詰め、部屋の奥にあった大量の段ボールの陰に身をひそめた。

しばらく息を殺して、その場で身じろきすらせず待機する。運のいいことに、その足音は部屋に入ってくることなく、ここから遠ざかって行った。

「はあ……」

私は安心して段ボールの陰から出て、ため息を吐いた。

さつきからこんなことが何度もあった。誰かの足音や話し声、独り言が聞こえるたびに、私は見つからないようにとその場から足音を忍ばせて離れたり、今回みたいに身をひそめたりしていた。

「それもこれも、全部このPDAの解除条件のせい……」

私はポケットからPDAを取り出し、解除条件が書かれている画面を開く。

そこには、何度見ても同じく、『解除条件：総計60時間以上他のプレイヤーに姿を見られない。姿を見られた場合、1時間以内に相手を殺害すれば免除』という文字が表示されていた。

ついでにルールの方も開く。そこにも解除条件と同じく、既に見慣れた文字が並んでいる。書かれているルールは1、2、5、6の4つだ。

既で紹介したものは省きます

<ルール6>

開始から3日間と1時間が過ぎた時点で生存している人間を全て勝
利者とし、

20億円の賞金を山分けする。

最初はこんなものは何かの冗談だと思い、あまり気にしていなかつたけれど、万が一本当だった時のためになるべく他人と接触しないようにしてきた。でも、階段上で起こったことをきっかけに、そんな甘い考えは放棄すべきだと思った。自分はどうであれ、このゲームに積極的に参加することを決めた人がいるのだ。そんな人と出会ったら、こつちに何の非がなくても殺されるかもしれない。・・・あの少女のように。

そう思うと、尚更他の人に見つかるわけにはいかないと思った。元々他人と接するのは苦手だし、他人のことなんてどうでもいいと思う。でも、殺すのはさすがに抵抗があるし、だからといって殺されるのはもつと嫌だ。

そして、それらから出された結論が「このまま誰にも見つからずに3日間過ごす」というもの。初めのうちこそこんなにも広い建物の中で他人に見つかるわけがないと思っていたけれど、実際に接触しそうになったのはさっきの人でもう既に4人目。予想以上にここには人が多いのかもしれない。

「それとも、ここに書かれている地図自体が偽物・・・？」

その可能性も考えられるけれど、2階に上がってからはこの地図に沿って歩いてきたけれど、未だに道が違ふところは発見できていな

い。だから、おそらくこれは本物で、そうになると、他のルールや解除条件も全部本物。・・・考えたくもないけど。

お金は決して欲しくないわけじゃない。でも、いくらなんでも20億なんて額は大金過ぎて、逆に欲しいなんて思えない。

「・・・ここでずっと考えててもしょうがないし、そろそろ行こうかな」

再び段ボールを開けて、重くなり過ぎない程度の量の缶詰をバッグに詰め込む。

そして、私は通路に誰もいないことを確かめてからその部屋を出て、また建物の中を当てもなく歩き始めた。

第4話 手助けとなるもの

武器を探すこと1時間。しかし、目的のものは一向に見つかる気配がない。

2人が歩いてきた道には部屋が少なく、その上、そのどこに入っても中にあるのはガラクタの詰まった段ボールだけ。地図を開いてみたが、階段のところからしばらく適当に進んでいたのも、ここがどこかもわからない。引き返そうかと思っただが、当然来た道もわからないので、断念せざるを得なかった。

「……全然身を守れそうなものがないね」

「そうだな。せめてオレたちも鉄の棒の1本くらいは欲しいところなんだが」

未だに、手元にある武器は千島の手荷物の中にあつた先の丸い鍔はのみが1本。使えないなんてレベルじゃない。まだそこら辺に転がっているガラクタを投げつけた方が攻撃力が高そうだ。だからと言って、それらを拾うわけではないが。

ただひたすらこの広い建物の中を、武器を探して歩き回る。そしてようやく1つの部屋で、目的のものではなかったが、使いようによつてはそれ以上に役に立つものを発見した。

「これ……、なんだろ？」

部屋の中にあつた真新しい段ボールを開けた千島は、その手に持った黒い小さなものをオレに見せた。

「さあ、なんだろうな。表面に文字が書いているようだから、読んでみたらどうだ？」

「んー、と……、『Tool-MapEnhance』と『Tool-PlayerCounter』って書いてある」

「地図の拡張と、……プレイヤーカウンター？　なんだ、それは？」

「さあ？　私にもわからないよ」

それらの扱いに困っていた時、オレたちに1通のメールが届いた。

「ん、またメールが……」

今度はその黒い小さなものの説明だった。

『今あなたが手に入れたのは、PDAにソフトをインストールすることのできるツールボックスです。どのPDAにもインストールできますが、1つにつき一度しかインストールできないので、誰がどのPDAに使うか十分に注意しましょう』

「……だって。どうする？」

「そうだな……、試しに1つずつインストールしてみるか？」

「そうしょっか。じゃあ私はこのプレイヤーカウンターって方をイ

インストールするね」

「そつちでいいのか？」

「うん、いいの」

返事をした千島は、既にPDAにツールボックスを接続していた。

それを見て、オレも千島からもう一つの方を受け取り、作業を始める。PDAの横にあるSDカードが差せそうなところに地図拡張のツールボックスを差すと、画面が切り替わり、「このソフトウェアをインストールしますか？」という文字と、その下に「YES」と「NO」の文字が表示された。「YES」の方に触れると、「インストール中です。ツールボックスを抜き差ししないでください」という文字と一緒に、インストールの状況を示すバーが表示された。それは直に100%になり、今度は「インストールが終了しました。ツールボックスを抜いてください」と出たので、指示に従ってツールボックスを抜き取る。

「終わった？」

オレの様子を見て、千島がそう確認してきた。

「・・・ああ、インストールされたみたいだ」

確かめるために地図を開くと、あちこちの部屋から線が伸びて、その先に部屋の説明があった。何の説明も出ていない部屋は、おそらく何も無い部屋だろう。似たような部屋でも「倉庫」と書かれていたり、「寝室」と書かれていたりする部屋もある。

「こっちは文字通り地図の拡張だな。地図の中の部屋に説明がつくようになっただくらいか」

「こっちはスタート画面に『残り12人』って表示されてるから、残ってる人の数かな？」

「そうだな。ルール9から見て、プレイヤーはおそらく13人。減った1人はおそらくさつき階段で死んでいた少女だろう」

その言葉でまたあの光景を思い出したのか、千島は顔を伏せた。が、すぐに顔を上げ、無理に明るい声で話しかけてきた。

「それじゃあ、次はどうしよっか？ 地図にいろいろ出てるなら、そのどれか1つの部屋に行ってみない？」

オレはその千島の努力を無駄にしないためにも、その話の転換にすることにした。

「そうするか。じゃあまずはここから一番近い『倉庫』に行くことにしよう。こっちだ」

地図上の部屋に説明が出たおかげで、だいたいだが現在地を把握することができた。おそらく、現在地は何の説明もない部屋が続いている地図の中央右寄りの辺りだろう。幸いにも先は行き止まりにはなっていないので、とりあえずこのまま今まで通り進み、それから一番近い部屋を目指すことにした。

そして15分後、オレたちは再び真新しい段ボールを見つけ、それを開けると、今度はいくつもの缶詰が出てきた。

「武器じゃないけど、食料ならあったね」

「そうだな。まあ腹も減ってきたところだし、ちょうどいいんじゃないか？」

「あ、やっぱり？ 実は私もそろそろおなかが空いてきたところだったんだ。さっそく食べよ」

千島は中からプルタブのついた缶詰をいくつか取り出し、そのうち3つをオレに渡し、2つを自分のもとに置いた。

「それじゃあ、いただきます」

千島はさっそく缶詰を開けて食べようとしたが、オレはその前に1つ質問をした。

「待て、箸やフォークとかはないのか？」

「うん。入ってなかったけど、啜っちゃえばいいんじゃない？」

「……大抵の女子は食べ方とかを気にすると思っていたが、千島からはその食べ方に対する恥じらいがまったく感じられないな」

「……何？ 恥じらって欲しいの？」

「別にそういうわけでもないが、気にならないのか？」

「だって、ないものはないんだもん。しょうがないよ」

「そういうものか？」

「そういうものなの。今のこの状況で形振りなりふなんて構ってられないよ」

そう言って、今度こそふたを開け、中身をずずず、と音を立てて啜る。女らしさがまるでない。・・・まあ本人が気にしていないのならしいが。

そのままじつと見ていてもしょうがないので、オレも自分の缶詰を開けて、その中身を丸ごと口の中に放り込む。

「あ、ずるい」

「あぬいあふあ（なにがだ）？」

「丸ごと食べるなんて、インチキでしょ」

「んぐ・・・、インチキも何も、どんな食べ方をしようがオレの自由だろう」

「そんな風にはつぺた膨らませて食べるのは行儀が悪いんだよ」

「いや、音を立てて啜るのと大して変わらない気がするが・・・」

「大違いです！ 音を立てて啜るのはお茶の作法の1つだけど、ほつぺたを膨らませて食べるものなんてありません！」

「いや、これはどうみてもお茶ではないからな。それと、さっきまで形振り構っていられないとか言っていた奴がそれを言うか？」

「これを礼儀正しく食べられないから、せめて他の作法では礼儀正しい食べ方をしてるの！」

その考え方はまったく理解できなかったが、それならばと思い、オレは食べ方を変えることにした。

「わかったわかった、こうすればいいんだろ」

オレは次の缶詰を開けて、今度は手づかみでそれを口に運ぶ。

「料理を素手で食べるなんてのはあちこちの国で行われている慣習だからな。これなら文句はないだろう」

そう言ってやったのだが、肝心の千島はもう興味なしといった感じで、再び自分の缶詰を嚙っていた。話を振っておきながら途中で放置とは、なんて奴だ。

そう思ったが、あまり突っかかるのも面倒で時間の無駄なので、オレも食べることに集中する。ちなみに3つ目は再び丸ごと口の中に放り込んだが、もう何も言われなかった。・・・結局こいつは何が言いたかったんだ？

わずかながら腹に物を入れ、体力と気力を取り戻したオレたちは、先程とは別の『倉庫』と書かれた部屋に来ていた。

そして、そこで日常生活ではほとんど目にするものがないものを見つけた。

「・・・ナイフ、だね」

「ああ、そうだな・・・」

今度の段ボールでようやく探していた武器が手に入ったのだが、それは予想外に殺傷能力の高いものだった。中に入っていたのは、刃渡り30センチ程度のサバイバルナイフ1本と、投擲用のナイフが3本、それと、一応料理用なのか、包丁が1本。鉄パイプよりずいぶん強いように思えるが、実際はいざ鉄パイプと戦った時に、これでは不利だ。包丁や投擲用のナイフはもちろん、サバイバルナイフでさえ鉄パイプを受け止めるにはリーチも込められる力も足りない。唯一優位に立てる方法は、投擲用ナイフで遠距離から相手を傷つけるというもの。正直、あまり気の進む手口ではない。

オレは無言で段ボールの中からサバイバルナイフと投擲用のナイフを1本取り出した。

「それ、持っていくの？」

「ああ、残りは千島の方だ。ちゃんと持っておけよ」

「え？ 私も持つのか？」

「当然だろう。自分の身くらい自分で守れるようになっておけ」

「自分で守れるように……って、私こんなのまともに使ったことなんてないよ」

「オレもない。だが、持っていないよりは持っている方がまだマシだろう」

刃渡りせいぜい10センチ程度のナイフなら握ったことはあるが、さすがに銃刀法違反にもろに引つかかるようなものは握ったことはない。まあ、少し前にダガーナイフなども所持することが禁止されたようだが。

「そうかもしれないけど……」

「とにかく持つておくことだ。最悪の場合はオレが千島から武器を借りることになるかもしれない。だから、持つておいてくれ」

「……うん、わかった」

そこでようやく千島は首を縦に振った。

刃物を所持しているからといって、自分で使わなければならないというわけでもないということが、刃物を持つことに対する抵抗を弱めたのだろう。

オレは千島が刃物を腰に下げたのを確認してから、地図に目を戻した。

「次は……、少し休憩でも入れるか」

「うん、そうしょ。なんだか疲れちゃった」

そして、オレたちは徐々に近付きつつあった『戦闘禁止エリア』と書かれた部屋へ向かうことにした。

第5話 一人歩き（前書き）

書き溜めていた分はこれで終了となります。

第5話 一人歩き

千島は戦闘禁止エリア到着すると、「疲れたから寝るね」と言い残して、真っ先にベッドのある奥の部屋に入ってしまった。

俺も多少は疲れていたが、さすがに寝るのは不用心だと思ったので、ベッドのところまで行ったもののそこに寝そべることはせず、代わりにそこに腰を下ろした。

特にすることもなく暇になったので、眠気覚まし代わりにこれまでのことやこれからのことを考えることにする。

改めて考えてみると、部屋を出た当初の目的はほとんど達成できていなかった。ゲーム開始から今までずっと他のプレイヤーと接触しようとしてきたが、その成果はまったく言っていないほどなかった。実際に出会えたのは千島1人と、物言わぬ死体のみ。

「やっぱり、1人で行動した方がいいか・・・」

このまま千島と一緒に行動をしていると、いつまでたっても組織側の人間を見つけることができそうにない気がする。1人ならもう少し歩くスピードを速められるし、休憩時間も短くて済むが、それが2人だと、さらにその相手が女性だと、かなりの差が生じる。現に今だって、オレ1人ならまだ先へ進めるが、千島は既に精神的にも身体的にも疲労困憊の状態だ。

しかし、足手まといだからといって、1人で歩くのが怖いという千

島を置いて行くのも気が引ける。それも、オレ自身千島と一緒に行動することに反対はしなかったので尚更だ。

「誰かほかのプレイヤーが千島と一緒に行動してくれれば助かるんだが……」

その時、オレは誰かが戦闘禁止エリアのドアを開ける音を聞いた。その直後に、かすかにだがシステムボイスも聞こえてくる。

オレは考え事をやめ、この新しく起こった出来事に集中した。

「……さて、こいつは敵か味方か。確かめてみるとするか」

オレはそつと立ち上がり、音を立てないように注意しながら半開きにしておいたドアのところまで移動した。慎重に隙間から向こう側を覗くと、そこには1人の少女がいた。身長は千島より少し高いくらいで、特徴はと言われれば、髪形をポニーテールにしていることと、辺りを警戒していることくらいだ。

ここに入った時に、ここが戦闘禁止エリアであるということシステムボイスで伝えられたはずだが、それでもなお警戒するのはさすがだな。

可能性はかなり低いと思われるが、既に首輪を外したプレイヤーがここに潜んでいるとも限らない。オレは一応それをチェックしたつもりだが、奥の部屋を全て覗いたわけではないので、もしかしたら俺たち以外の誰かがここにいる可能性もある。……まあ、現在ままで出てきていない時点で、その可能性はまずないだろうとは思っ

見たところその少女はまだ首輪をしていたので、出ていってもいきなり襲われることはないだろう。逆に、いきなり逃げられることはあるかもしれないが。

だが、もしかしたらオレの代わりに千島と一緒に行動をしてくれるかもしれないと思ったので、オレは話しかけてみることにした。

わざと音を立ててドアを大きく開けると、少女は素早くこちらを振り向いていつでも逃げだせる体勢をとったが、オレの姿を確認するとなぜか構えを解いた。

「驚かせて悪かったね。あたしは優木愛莉。アンタは？」

「ご丁寧にも。寧ろ驚かせたのはこっちだろう。オレは村崎斎だ」

「村崎斎・・・、ね。わかった、よろしく、村崎」

「ああ、こちらこそよろしく。ところで、いきなりで悪いんだが、オレの代わりに子守りをしてくれないか？」

「子守り？ 誰か子供でもここに居るのかい？」

「子供と言えば子供だな。ちょうどオレくらいの年齢の女子が1人、奥の部屋で寝ているんだが」

「・・・覗いたの？」

「いや、ここまで一緒に来たんだ」

「あつそう。それで、なんでその子の子守りをあたしに頼むんだい？」

「オレはそろそろ一人で行動したいんだ。だが、一人でここを歩くのが怖いという女子を置いて行くのも気が引けてな」

「なるほどね。それでたった今出会ったばかりのあたしにその子を押し付けて、アンタは子守りから逃れて自由になろうと」

「そう言われると身も蓋もないんだが、オレにはやることがあるんだ」

「それが何か・・・って訊くのは野暮なんだろうね。まあ、あたしはその子が構わないならべつにいいけど」

「なら決まりだな。それじゃあよろしく頼む。起きてきたときにオレのことを訊かれたら、一人で先に行ったと言っておいてくれ」

「了解。それで、その子は何て名前なの？」

オレはその問いに対して、口元に笑みを浮かべながらこう答えた。

「起きたらきつと自己紹介してくれるさ。じゃあ、オレは行かせてもらう」

「あ、ちょっと待って！」

「・・・なんだ？」

外へ出ようとしていたオレだったが、優木に呼び止められて足を止

めた。

「気を付けなよ。アンタを見たら襲いかかってくる奴がいるかもしれないから」

「わかっている。2階に上がってきたときに死体を見かけたからな。自分が殺される覚悟も、逆に人を殺さなければなくなる覚悟もしている」

優木はなぜか一瞬顔をしかめたが、すぐに元に戻って話を続けた。おそらく人が死んでいたという情報が初耳だったんだろう。

「それともう1つ。ルールの交換くらいしないかい？」

・・・すっかり忘れていた。そういえばルールを確認するために他のプレイヤーを探していたんだっただな。つい組織への復讐のことで頭がいっぱいになっていた。

「ああ、喜んで。オレが知っているルールは、1と2を除くと3、5、7、9の4つだ」

「そう。一つ被ってるけど、あたしの方は3と8だよ」

<ルール8>

指定された戦闘禁止エリアの中で誰かを攻撃した場合、首輪が作動する。

ルール8は、今いるこの部屋に関することだった。もっとも、システムボイスが同じことを忠告していたので、ルールに特筆するほどではない気がしたが。

ルール交換が終わった後、オレは戦闘禁止エリアを離れて、1人で歩き出した。

...

村崎が戦闘禁止エリアを出て行った後、あたしは1人ため息を吐いた。

「はあ……。村崎斎、ね」

彼はおそらく、あたしの知人の関係者だろう。

「まあそれはいいとして、問題はさっき村崎が言った、2階の階段付近で人を殺した奴の方だね。誰だか知らないけど、一番最初にゲームにのつたのはそいつで間違いないだろうね……」

あたしが2階に上がった時にはまだ死体はなかったから、そいつが2階に来たのはあたしより後だろう。

それにしても

「殺す覚悟も殺される覚悟も、どっちもしてほしくはないんだけどね……」

さきほど優木が顔をしかめたのは、そういった理由からだった。

「……でもまあ、今から気にしてても仕方のないことだし、とりあえずは休憩することにしようか」

まだどちらの覚悟も本気でしなければならぬ状況には陥ってはいないようなので、あたしは深く考えるのをやめて、体を休めることにした。

1時間ほどすると、村崎に任された少女が部屋から顔を出した。

てっきり村崎がいると思った場所にあたしがいたからか、寝起きの目をぱちくりとさせている。

「えっと、こんにちは。私、千島泉希です」

なるほど、村崎の言ったことは嘘じゃなかったね。確かにいきなり自己紹介してきたよ。

「ああ、こんにちは。あたしは優木愛莉。よろしく」

「うん、よろしくね。・・・ところで、ここに男の子がいなかった?」

「村崎のこと? アイツならアンタを置いて1人でここを出てったよ」

「ええー!?!」

いや、こっちがええー!?!? なんだけど。ここ、そんなに驚くこと? こんな状況じゃあ他人を盲信するもんじゃないよ。

「一緒に行動してくれるって言ってたのに・・・」

千島が目に見えて落ち込んだので、あたしのせいじゃないのになんか申し訳なく感じてしまう。

「それで、まあ代わりと言っちゃなんだけど、あたしと一緒に行動しないかい?」

「ほんと!?! 一緒に行ってもいいの!?!」

「べつにあたしは構わないけど。村崎もそう頼んできたしね」

「よかったあ。これからこの建物の中を1人で歩かなくちゃいけないのかと思っちゃった」

今度は目に見えて安堵している。感情表現が豊かだね。

「それじゃあ、改めてよろしくね。愛莉ちゃん」

「はいよ。それで、さっそくだけでもう出発する?」

「うん。村崎君に会って文句言わなくちゃ」

ああ、うん。それが目的なんだ……。まあいいけど。

「じゃあ行くうか。まずは……。そうだね、3階にでも上がる?」

「そうしよ。村崎君の地図は便利になってるから、きっとすぐに上の階に行っちゃうだろうし」

「便利に?」

「うん。ツールボックスの『地図拡張』ってやつをインストールしてるから」

「へえ、そう。じゃあ千島も何かインストールしてたりする?」

「私のも1つだけ。『プレイヤーカウンター』ってやつで、残りの人数が確認できるようになったみたい。今は残り12人ってなってる」

ということは、今のところ死んだのは村崎が見たっていう人だけだね。

「そういえば、千島も2階に上がったところで死体を見た?」

「うん……。全身あざだらけで、かわいそうだったよ……」

あまり思い出さなくなさそうだったので、あたしはそれ以上そのこ

とについて詮索するのをやめた。

「・・・さて、話はこんぐらいにして、これからは口じゃなくて足を動かそうか」

「そうだね。いつまでもここにいて、村崎君に追いつけなくても困るし」

そして、あたしたちは戦闘禁止エリアから出て、3階を目指すことにした。

ゲーム開始からまだ16時間ほど。この段階でもう3階を目指すなら、1日目が終わる頃には既に3階を歩いててもおかしくないね。

第6話 初めの第一歩（前書き）

明日はハロウィンですね。それにちなんで、先週は学内のコンビニで売っていたパンプキンシュークリームとかいろいろを食べましたプクプクです。

それはさておき、ハロウィンといえばスミスの出番といっても過言ではないのですが、今回はまだ出てきません。現在どんなエクストラゲームを行おうか思案中です。（おい、勉強はどうした

第6話 初めの第一歩

私は相変わらず1人で2階を歩いていた。というか、逆に1人じゃないと困る。

缶詰を手に入れた部屋を出てから一度だけ他の人の足音を聞いたけれど、それ以降は今のところ自分の足音以外は聞こえてこない。このまま何事もなく3日間を過ごせればいいんだけど・・・

しかし、そううまく物事が運ばないのが現実で、私はある部屋の中でついに他のプレイヤーと接触してしまった。それは、つい先ほどのこと。

．．．

私は当てもなく歩き続けて、そしてある一つの部屋にたどり着いた。私は他の部屋と同じように、中に誰もいる様子がないことを確認してから、その部屋に入る。

「あ、ここにもある・・・」

そしてそこにも、既に何度か目にした真新しい段ボールが置かれていた。それまでに見つけた段ボール　と言ってもまだ3つしか見つけていないけれど　はすべて食料だったので、これにも食料が入っているものだと思い込み、私はそれを開けた。

「え・・・、何、これ・・・」

しかし、その中身は今までとは違い、刃渡り20センチ程度のナイフが2本と、用途のわからない小さな黒い箱のようなものが入っていた。とりあえずその用途のわからないものをつまんで掌の上で転がしてみる。と、その時、PDAが鳴った。私はその音にビクツとしつつも、その音源がPDAだとわかるとなんだか少し安心した。・・・いや、ほんとは全然安全でもなんでもないんだけど。

PDAが鳴るっていうのは、それだけで怖い。ルールがほとんどわかっていないから、どこかで知らないうちにルールを破ってたんじゃないかと不安になってきた。

恐る恐るPDAの画面に目を向けると、そこには封筒の絵が。・・・メール？

その絵に触れてみると、画面が切り替わって、今私が手にしている小さな黒い箱のようなもの　ツールボックスと言っらしい　についての説明文が表示された。

どうやら、これはPDAにソフトをインストールできるものらしい。

試しに手に持っていたそれをPDAに差し込むと、『Tool-Trap Detectionをインストールしますか？』と画面に表示された。罨・・・、探知、でよかったっけ。あれ？　そもそも罨

なんてあるの？

それを確かめるためにはソフトをインストールしなければならなかった。私はそれをインストールすることにした。ありがたいことに、バッテリーの消費は極小だった。

数秒でインストールが終わったので、試しに地図を開いてみると、そこには以前は表示されていなかった赤い点と、そこから伸びている線にその場所にある罍の説明が書かれていた。

「うわ、すごい・・・」

1〜5階までは大した量の罍はなかったけれど、6階は罍だらけだった。やっぱり、進入禁止エリアに追い立てられて6階に移動した後、その逃げ込んだ人たちを一網打尽にするためにこんなに罍が仕掛けられているのだろうか。

私が地図に目を奪われていると、突然後ろから声を掛けられた。

「やあ、君もこのゲームの参加者だね？」

「っ！」

その声を聞いて、私は固まった。いつの間にか私の背後に誰かが来ていたようだ。

まずい、見られた。どうしよう・・・

「・・・っ、・・・っ」

早く何とかしなければと思うものの、体が思うように動かせず、満
足に声を出すことさえできなかった。

そんな私の様子を見て、怖がっていると思ったのか、その人はまた
話しかけてきた。

「大丈夫、危害を加えるつもりはないんだ。僕は七瀬廉也。ななせれんや少し話
をしたいんだけど、いいかな？」

そこで私はようやく後ろを振り向くことができた。

そこに立っていたのはメガネをかけた少年で、背は私とあまり変わ
らない。体格もそれほどがっしりとはしていなくて、見た目インド
ア派だ。

「えーっと……、何かかな？」

私はずっと黙ったまま観察していたからか、彼は居心地が悪そうに
立っていた。

「……何の用？」

私は努めて冷静を装った声を出したけれど、その実心臓が早鐘を打
っていた。だけど、それでいてどこか冷静に現状を見つめている自
分もいた。

私は、徐々に自分の感情が凍り付いて行くのを感じた。

「ああ、ルールの交換をしたいんだ。それと、できればPDAのナ
ンバーと解除条件も教え合いたいんだけど」

それに反対ではなかったので、私は知っているルールの番号を言う。

「私の知っているルールは1、2、5、6。そっちは？」

「僕の方は、1と2は共通だからいいとして、残りの2つは4と8だよ」

<ルール4>

最初に配られる通常の13のPDAに加えて1台ジョーカーが存在している。

これは通常のPDAとは別に、参加者のうち1名にランダムに配布される。

ジョーカーはいわゆるワイルドカードで、

トランプの機能を他の13種のカード全てとそっくりに見装する機能を持っている。

制限時間などは無く、何度でも別のカードに変えることが可能だが、一度使うと1時間絵柄を変えることができない。

さらにこのPDAでコネクして判定をすり抜けることはできず、また、解除条件にPDAの収集や破壊があった場合にもこのPDAでは条件を満たすことができない。

「PDAは？」

互いにルールを交換した後、私は今度はPDAの番号と解除条件を訊く。

「そう訊いてくるってことは、僕が教えたら教えてくれるのかな？」
それに対し、私は頷く。

「・・・僕のPDAナンバーは2。解除条件はJOKERのPDAの破壊だよ」

「私のは7。解除条件は、総計60時間以上他人に姿を見られないこと」

「・・・それ、本当なのかい？」

「本当。だから、こっちを向かずに後ろを向いて話してくれた方がいい」

彼はしばらく悩んでいたけれど、やがて、それじゃあ、と1つ提案をしてきた。

「なら、ドアを隔てて話すことにしようか。それなら問題ないよね？」

「うん、それでいい」

私の返事を聞いて、彼は部屋を出て、ドア越しに話しかけてきた。

「ところで、君の名前は？」

「・・・九條彩菜」

私は屈みながらそう答えた。

「九條さんね。さつきも言ったけど、僕は七瀬廉也よろしく」

「・・・」

誰かとよろしくする気などなかったので、私はその呼びかけに対して沈黙を返す。

「九條さん？ 聞こえてる？」

「大丈夫、聞こえてる」

私が返事をしなかったから聞こえていないかもしれないと思ったのか、彼はわざわざこっちに確認を取ってきた。たかがドア1枚で防げる音量など知れているのに。

「そうか、ならよかったよ。それで、話があるんだけど」

「・・・何？」

彼の話など興味なかったが、会話を続けさせるために聞き返す。

「さつきも言った通り、僕の首輪を解除するにはJOKERが必要なんだ。だから、もし九條さんがJOKERを手に入れたら、僕に渡してくれないかな？」

「わかった。見つけたら渡す」

私はドアと向かい合って立ち、ドアノブに手を掛けた。

「そうしてもらえると助かるよ。それじゃあ、僕はそろそろ行くから・・・」

「ちょっと待って」

ドアから離れようとした彼を、私は引き留める。

「ん、どうかした？」

「ちょっと渡したいものがあるんだけど」

「渡したいもの？」

「そう。ツールボックスっていう、黒い箱のようなもの。今見つけた。2つあるから、1つずつインストールしよう」

「そっか、ありがとう。なら、ちょっと入るよ」

そして、ドアノブが回された瞬間、私は思い切りドアを前に押し出した。

「うわっ！」

ドアが体にぶつかって、彼が体勢を崩す。

私は、彼が体勢を崩したためにがら空きとなったその胸元に、屈んだときに段ボールの中から取ったナイフを深々と突き立てた。

「かつ・・・はっ・・・」

彼が口から血を吐き、それが私の肩に、服に、手にかかった。

私はナイフを突き刺したまま、彼を押し倒した。彼はまったく抵抗できず、重力に従うがままに後頭部を床に強打した。

既に彼は息をしていなかった。そして、床に血が飛び散った時、私は正気に戻った。

「あ・・・ああ・・・」

私は呆然とその場に立ち尽くした。

「そんな・・・、なんで、こんなこと・・・」

自分でやっておきながら、私は自分の行動が理解できなかった。

冷静に考えてみれば、彼に姿を見られていた時間は5分にも満たない。12時間までは人に見られても問題ないので、わざわざ殺すまでもなかった。

しかし、他のプレイヤーに見つかったことでパニックに陥った私は、冷静に考えることができなくなっていた。

その結果、感情を凍らせた私は、ただ本能に従って動いて　　殺してしまった。

私は誰かにこのことがばれるのを恐れて、そこから全速力で走り去

った。

かなり離れただろうと思われるところまで来て、私はようやく走るのをやめた。

尋常じゃない疲労を感じる。身体的にも、精神的にも。

しかし、こんなところで立ち止まっているわけにもいかないのだから、私はゆっくりとでも歩を進める。

そして今、私は相変わらず1人で2階を歩いている。というか、逆に1人じゃないと困る。

こんな血に塗れた姿を、人を殺してしまった後の姿を、誰かに見られたくないから。

私はシャワー室を探して2階をあちこち歩き回り、ようやくある一室にそれを発見し、シャワーを浴びた後、その部屋で泥のように眠った。

第6話 初めの第一歩（後書き）

書けば書くほど九條の性格がE P 1と違う・・・

まあ自分が殺す前に他人が人を殺す場面に居合わせて（？）怖気づいたとも思ってください。

第7話 揃ったルール

戦闘禁止エリアを出て1時間ほど2階を徘徊していたところ、オレはまた新たな死体を見つけた。

その死体は、未だに左胸にナイフが刺さったままだった。後頭部も強打していたが、死んだのはおそらくこの刺さったままのナイフが原因だろう。

ナイフを抜き取ってみると、刃渡りは約20センチといったところ。上手いこと体に垂直に刺さっていたので、心臓まで届いていただろう。

「前と同じ奴・・・ではないだろうな。前回とは殺し方がかなり違う」

前の奴というのはもちろん、2階に上がってすぐのところまで少女を撲殺した奴のことだ。

向こうでは死亡者からのかんりの抵抗が窺えたが、今度の死亡者は全く抵抗した様子がない。それどころか、逆に油断さえしてたんじやないだろうか。そうじゃないと、普通はこんなにきれいに胸を刺されることなんてないだろう。

死体を分析するのはそれくらいにしておいて、今度は死体の持ち物を漁ることにする。・・・趣味が悪いだと？ 知るか。こんなところであつ倒れている方が悪いんだ。それに、どうせもう動かないんだ。それなら遺品だけでも有効活用してやった方がまだ救われる気

がしないか？

今度の死体は男なので、やりやすかった。そして、そのズボンのポケットに手をつ突っ込んだところ、そこにPDAがあるのがわかった。

オレはそれを引っ張り出し、画面を確認すると、そこにはハートの2が映っていた。

オレの知らないルール4やルール6が書かれているかもしれないという期待を込めてルールが書かれているページを開くが、残念ながらそこに表示されていたランダムのはルール7とルール9だった。

とりあえずそれを自分のポケットにしまい、今度は手荷物の方を探す。ところが、辺りを見回してみても壊れたメガネしか見当たらない。

「元々持っていなかったのか、それとも殺した奴に奪われたか・・・まあないものを探してもしょうがない。ここはもう放っておいて、次に行くか」

そして、オレは最初に死体のすぐ近くのドアが開いていた部屋に入る。そこには真新しい段ボールが置かれていて、その中に死体に刺さっていたのと同じものだろうと思われるナイフがあった。

「・・・これを見ると、こいつを殺した奴はここでこいつと出会って、そのまま勢いに任せて殺した、という可能性が高いな」

もしこれをやったのが殺すことに何の抵抗もない奴なら、PDAを回収したり、もう1本のナイフも持っていたりしているだろう。

もつとも、これは刺さっていたナイフがこのダンボールの中に入っていたものであるのなら、の話だが。

「・・・2階は大方歩いたな。そろそろ3階に行くか」

オレ2本のナイフのうち血の付いていない方を持って部屋を出て、今度は3階に向かって歩き出した。

そこから歩き出して30分ほど経った頃、オレは近くに何人かの集団がいるのに気が付いた。

「人数は・・・、3人といったところだな」

足音を聞き分けると、最低でも3人はいることがわかる。更に近づいてきた証拠なのか、時折話し声が聞こえてくるようになった。

「やり過ぎすべきか、それとも、接触すべきか・・・？」

相手が集団だということもあり、どうしようか少し迷ったが、話し合いの通じる相手ならルールが聞けるかもしれないと思い、警戒はしながらも会ってみることにした。

オレは通路を曲がったところで向こうが来るのを、サバイバルナイフを構えて待った。

直に、オレがいるのと反対側の通路からその集団が姿を見せる。

通路を曲がらずにまっすぐ行くつもりなのか、その集団の先頭はこちらを見なかった。

1人、2人、3人。予想通りだな。

先頭を歩いているのは、なかなか運動のできそうな背の高い少年だったが、その後ろを並んで歩いていた2人は、まだ自分より年下だと思われる少女たちだった。

しかし、相手を見た目で判断してはいけない。中学1年の時のオレでも、戦い方さえ覚えれば、そこら辺のチンピラどもを撃退するにとくらはできたのだから。

後ろを歩いていた少女のうちの片方がオレに気付き、声を上げようとしたところで、オレはその集団を呼び止めることにした。

「止まれ」

構えていたサバイバルナイフを相手によく見えるように上に掲げる。投擲用のナイフならともかく、10メートル以上離れている状態でこんなものを投げてもまともに当てることすらできないだろうが、こちらが武器を持っているということを示し、相手を威嚇することくらいはできる。

オレの声に反応し、今度は全員がこちらを向き、オレが武器を持っていることを確認してその場に足を止めた。

その時の相手の反応は、大きく分けて2つだった。

先頭を歩いていた少年は一步前に出て、腰からナイフを引き抜いてオレに向かつて構えた。少女のうちの1人は怯えてその場に立ちすくんでいて、もう1人は少年と同じように腰からナイフを引き抜き、こちらはオレに向かつて投げる構えをとった。

既に襲われたことがあるのか、それともただ単に反応がいいだけなのか、武器を構えた2人の動作は素早かった。

「1つ訊きたいんだが」

「・・・なんだよ？」

緊張した面持ちで少年が答える。

「オレと争う気はあるか？」

「当たり前だろ！ 無駄死には御免だからな！」

「なるほど」

その言葉を聞いて、オレはサバイバルナイフを腰につけていた鞘にしまった。

「・・・は？」

「死にたくないから戦うんだらう？ なら、互いに武器を手放せば話し合いができると思っただが」

オレの言葉に真っ先に反応したのは、さきほど武器を構えた少女だ

った。

「……うん、そうだね。あたしは西条紫音さいじょうしおんっていうの。お兄ちゃんは？」

「オレは村崎斎だ」

オレと西条の行動につられて、後の2人も自己紹介をした。少年は六巳むつみひろき広樹ひろきといい、もう1人の少女は西条詩織さいじょうしおりといった。

2人の少女は姉妹らしい。詩織が姉で、紫音が妹だそう。姉の方が妹より精神的に弱い……。いや、妹が強いんだろう。普通の少女ならあの場で立ちすくんだとしてもなにもおかしくはない。

また、運がいいことに、オレはまだ知らなかったルール4とルール6について知ることができた。

JOKERの存在について知れたのはいいが、ゲームの賞金が20億を生存者数で割ったものだとは……。まったく、ばかっているな。

「それじゃあ、オレはそろそろ行く」

「え！？一緒に行動してくれないの……？」

「オレはオレですることがある。悪いが、そういうことだ」

「待って！」

「近寄るな！」

「っ！」

オレを引き留めるためにこちらに駆け寄ってこようとした西条妹を、オレはとっさにナイフを抜いて牽制する。

さっきまでの会話の間も、オレは常に奇襲されないように注意しながら、3人とある程度の距離をあけて会話をしていた。

「もしお前たちがオレの存在を邪魔に思っているのなら、今ここで囲まれるというのはかなり厄介だからな。それ以上近付いたら攻撃する」

「私、そんなつもりじゃないよ！」

「お前はそうなのかもしれないが、他の奴らもそうなのかどうかはわからないだろう？」

「お姉ちゃんも六巳お兄ちゃんもそんなつもりじゃないよ！」

「解除条件は確認しあったのか？」

「それは……、ただだけど……」

「はっ！ そんな状態でよくそんなことが言えるな。ひよっとしたらお前らのうちの誰かが4や7のPDAの持ち主で、油断したところを殺そうとしているのかもしれないぞ。それとも9のPDAの持ち主で、お前たちと一緒に行動してから12時間以上が経つのを待っているのかもな」

「じゃあここで解除条件を見せ合えば・・・」

「それがJOKERかもしれないだろう？　そして、それを見分ける手段をオレたちが持ち合わせているとも限らない」

実際はオレが2のPDAを持っているため、それは可能なのだが、逆に言うと、それは向こうがJOKERを見分ける手段を持っていないということになる。

案の定、西条妹はオレの言葉を聞いて沈黙せざるを得なかったようだ。

「・・・反論できないようならオレは行かせてもらう。じゃあな」

オレは前を向いたまま少しづつ後ろへ下がり、角を曲がったところでようやく体の向きを元に戻した。その間、3人は誰も動かなかった。

・・・

「・・・紫音、やっぱりここからは2人で行動したほうがいいんじゃないかしら」

村崎さんが立ち去った後、私はずっと彼が去り際に言った言葉につ

いて考えていた。

「お姉ちゃん!?!」

「だって、村崎さんの言う通り、六巴さんのPDAが何かわからな
いんだもの! このまま一緒に行動していると、殺されてしまうか
もしれないわ!」

「詩織さん、落ち着いて! 俺のPDAはJなんだ! だから、俺
が2人を襲う理由なんてどこにもないんだ!」

六巴さんはそこで初めて自分のPDAのスタート画面を私たちに見
せた。そこには確かにJが映っていた、けれど

「そんなの信じられません! もしそれが本当なら、なんで最初に
見せてくれなかったんですか!? 今見せられても、まるでそれを
JOKERだと疑ってくれと言っているようにしか見えません!」

もう私は六巴さんのことを信用できなくなっていた。初めからあま
り信用していなかったけど、紫音がついて行くと言ったから私もつ
いてきた。でも、もう限界。私の身を守るためだけじゃなく、紫音
のためにも、六巴さんとはここで別れるべきだ。

「・・・紫音、行きましょう」

「あ・・・、お姉ちゃん・・・」

私は紫音の手を引いて、その場に六巴さんを残して歩き出した。六
巴さんは追ってはこなかった。

・ ・ ・

あたしはお姉ちゃんに手を引かれるままに歩いてた。

このままじゃいけないと思いつつも、お姉ちゃんの気持ちもわかるから、どうすればいいのか迷った。

・・・でも、やっぱりこんな良くない。せつかく協力してくれそうな人がいるのに、その人を自分から手放すのは自殺行為だ。

そう思い、あたしはどんどん先へ先へと歩いて行くお姉ちゃんの手を振り切った。

「・・・紫音？」

「お姉ちゃん、六巳お兄ちゃんのところに戻るう」

「なんで!？ あの人の近くにいたら殺されてしまつかもしれないのよ!？」

「でも、近くにいなかったら、もっと危ないかもしれないよ。今までは3人で、しかもそのうち1人男の人が混じってたけど、今度はあたたしたち女の子2人だけ。どう考えても今のほうが襲われやすいよね」

「それは・・・、そうかもしれないけど、でも・・・」

「それとね、お姉ちゃん、あたしのPDAね、Aなんだ」

あたしはお姉ちゃんにダイヤのAが映っている自分のPDAのスタート画面を見せる。六巳さんのは信じなかったけど、あたしのならきつと信じてくれるはず。

「・・・それが、どうかしたの？」

「うん、さつき斎お兄ちゃんから全部のPDAの解除条件を聞いたでしょ？ その時に聞いたAの解除条件ってどんなのか覚えてる？」

「2日と23時間、他のプレイヤーを傷つけない・・・だったかしら」

「そう。つまりね、あたしたちが襲われた場合、まともに戦えるのはお姉ちゃんだけなんだよ。そんな状況でお姉ちゃんはあたしたちを守る？」

「それは・・・」

「相手が強い男の人とかだったら、あたしを守るところか、自分の身を守ることも難しいよね。だから、危険かもしれないけど、今まで一緒に行動してくれた六巳さんを信じて、これからも一緒に行動したほうがいいって思うの」

「でも・・・」

「お姉ちゃんが不安がるのもわかるよ。わかるけど、でも、ここは誰か頼りになる人に一緒にいてもらったほうがいいと思うの。だから、また3人で一緒に行こう?」

お姉ちゃんはしばらく考え込んでいたけど、やがて決心してくれた。

「・・・そうね、私1人じゃ紫音を守ることはできない、悔しいけどその通りだわ。戻ってまた一緒に行動してくれるか六巴さんに聞いてみましょうか」

「うん！　ありがとう、お姉ちゃん！」

急いで来た道を戻ると、六巴さんはまだそこにおいて何かうんうん唸って考え事をしてた。でも、あたしたちがもう一度一緒に行動してほしいというと、喜んで引き受けてくれた。

よかった、これで誰かに襲われたとしても、相手が1人なら六巴お兄ちゃんを盾にして逃げられる。

あたしは表面上は普通の笑顔を、心の中では悪魔の笑みを浮かべた。

第8話 好都合

私は目が覚めた後、部屋を見渡してそこが寝る前と同じ場所であることがわかり、さっきまでの出来事は夢なんかじゃなかったと改めて認識した。

まだこの手には、人を刺したときの感覚が残っている。

何度手を洗っても、それを拭い去ることはできなかった。

キモチワルイ……

気を緩めると吐いてしまいそうになる。

しかし、私はその衝動を無理矢理押さえつけて、横になっていた姿勢から立ち上がる。

いつまでもここにいと、また誰かと遭遇してしまうかもしれない。

私は傍らに投げ捨てていた荷物を拾い上げ、その部屋を後にした。

「こんなものまで……」

それから何個目かの部屋で、私はクロスボウを見つけた。

ご丁寧に1本目の矢が既にセットされていたので、見ただけで矢のセットの仕方が大体わかるようになっていた。

「これがあれば、もっと確実に……っ！」

慌てて殺人を肯定しようとしている自分を追い払う。

「なんてことを考えてるんだろう、私……」

しかし、頭ではこんなものはさっさと捨ててしまっか壊してしまっの方がいいとはわかっているものの、私はそれを手放せなかった。

「……でも、威嚇用になら使えるし、これくらい持ってもいいよね……」

などと適当な理由付けをして、結局その武器を手に持っただまま建物内を歩くことにした。

その後、私は2階の探索もそこそこに、早く3階以上に行くことにした。

その理由は単純。偏へんに上うえに行けば行くほど、他のプレイヤーと接触する可能性は低くなるだろうと思ったから。

とは言っても、自分が今どこにいるのかすらもわからないので、と

りあえずはただひたすら歩き回っているだけだ。要は今までと何も変わっていない。

一度、少女たちの話し声が聞こえてきたけれど、その人たちは話し合った結果、私がいる方とは別の方向へ行った。私には時折1人の少女が上げる大声の内容しかまともに聞き取れなかったけど、遭遇することなくどこかへ行ってくれたので、とくにその内容については気にしなかった。

そして、この頃になると、いい加減地図を見ながら歩いたので、現在地がどのあたりかも予想がついた。

ここから階段まではそれほど遠くない。どうやら、適当に歩いている間も徐々に階段に近付いていたようだ。

私はさっきの少女たちと遭遇してしまわないように道を選びながら、階段へと向かった。

私が階段にたどり着いたのはそれから1時間ほど経った後のこと。そして、私が着いたとき、そこには既に先客が腰を下ろしていた。

金髪で目つきの悪い彼は、その手に鉄パイプを握っていた。もしかすると、2階で少女を撲殺した人かもしれない。

幸いにも彼はまだこっちに気が付いていなかったなので、私はしばらく

く様子を見てみることにした。

彼は腰かけている場所から周囲を油断なく見渡している・・・というわけではなく、どちらかと言えばぼーっとしているように見える。

とは言え、周囲をまったく見ていないわけではなく、たまに思いついたようにあちこちに目をやるので、かえって裏をかきにくい。

それから待つことわずか5分。しかし、私にはそれが1時間にも2時間にも感じられた。

そして、いつまでもそこを退かない彼に対して、私は苛立ちを感じてきた。

このままここにいると、いずれ誰かがここに来て、私を発見するかもしれない。それこそ、さっきの少女たちなどはすぐ近くに来ていてもおかしくはない。

そう考えると、やはり悠長に待つてなどいらねず、今すぐに彼をあとから退かさなければ、という思いに駆られた。

私は手に持っていたクロスボウをゆっくりと目の位置まで上げる。

命を奪う必要はない、ただあの場所から退かすだけでいい。そうしないと、危ないのは自分なんだから。

そんな言い訳をして自分の行動を正当化しながら、私は彼の顔の少し左の空間に狙いを定めた。

そして、ここだと思ったところで、私は1本目の矢を放った。

しかし、まだ一度も使ったことがなかったということと、私が当て殺してしまうのを恐れたということが原因で、矢は狙いを大きく外れて階段横の壁に当たった。

私は彼が咄嗟にこつちを振り向くと同時に、通路の角に姿を隠した。

まずい、これじゃあ彼に自分の居場所を知らせたただけだ・・・

そのままここにいると、通路の向こう側から彼が歩いてくる足音が聞こえた。やはりあの程度では尻尾を巻いて逃げてはくれなかったようだ。

「がっ・・・」

だが、私が急いでその場から逃げ出そうとした時、突然通路の向こう側からくぐもった唸り声が聞こえ、そのすぐ後に人が床に崩れ落ちる音と、鉄パイプが手を離れて落下したようなカランカランという音がした。そして、その後誰かが階段を駆け上がったいく音が聞こえた。

それを聞いて、私は駆け出そうとしていた足を止めた。

・・・彼が、倒された？

そっと通路の向こう側を覗くと、そこにはこつちに歩いてきていた彼が床に伏していた。

恐る恐る近寄ってみたけれど、起き上がる様子はない。

息はしていたので、死んではないようだ。

誰か知らないけど、これはチャンス。今のうちに上へ・・・

そう思い、私はそれ以上彼には構わずに急いで、しかし、彼を倒した人物が3階で待ち伏せされていないか確かめながら慎重に階段を上がった。

結果、上には誰もいなかったため、そこで私はようやく張っていた気を緩めた。

「えっと、今は・・・」

3階の地図を開き、現在位置を確認し、次に4階への階段の位置を探す。

「あった。・・・やっぱり、そんなに都合よくはないよね・・・」

4階への階段は、ここから一番遠い場所、というわけではないが、かなりの距離はあった。

しかし、千里の道も一歩から。そんな思いで、私は歩き出した。

・ ・ ・

オレが3人と別れて階段のところまで来た時、そこには1人の男がいた。

見るからに不良であるそいつは、その手に鉄パイプを持っていた。よく見ると、その一部が黒ずんでいる。最初は血かと思ったが、そう決めつけるのはやや早急な気がした。こんな薄汚い建物の中にあつた鉄パイプだ。汚れの1つや2つ付いていてもおかしくない。

それはさておき、あそこにいられると邪魔だな。階段に座っているということは、素直に通してくれる気はないのだろう。強行突破という手段もあるが、相手の実力もわからないうちからそんな無謀なことはしたくない。

「さて、どうやってあそこから退かそうか・・・」

男は階段の2段目に腰かけ、後ろにもたれかかっている。それなら・・・

オレは静かにその場を離れて、遠回りしてそいつから見られない道を通り、階段から見て斜め後方の通路に移動した。

ここなら、相手から姿を見られることはない。まあ覗き込まれれば丸見えだが、階段の上でふんぞり返っているあいつはそんなことはしないだろう。それくらいの慎重さのある奴なら、まず座り込んだりはしない。

それに、もし仮に覗き込まれても、近くまで行けていればそこからでも奇襲は成り立つ。まだ距離がある場合は、一旦逃げればいい。うまくいけば、相手をかかわして階段を上げられるかもしれない。

オレは音をたてないようにじりじりと階段の方へ向かう。

そして、階段まであと10歩ほどというところで、オレがいる通路の対角線方向にある通路に矢が当たった。

「っ！」

オレは声こそ出さなかったものの、動きを止めてしまった。まさか、第三者がこの場に割り込んでくるとは想定していなかったのだ。

そして、動きを止めたオレとは逆に、階段の上にはいたそいつは動き出した。

階段を下りて壁に当たった矢を一瞥し、そのまま正面に向かってまっすぐ歩いて行った。

反対側にいたオレの存在には気が付かなかったようだ。

これはチャンスだ。オレはそう思った。

行動するなら今しかない。そして、そのとるべき行動の選択肢は2つ。1つはこのまま階段を上がる。ただし、この場合2人から同時に狙われる可能性がある。そして、もう1つは、今歩いて行ったあいつを気絶させ、相手を1人にしてから確実に階段を上がる。と。

オレは迷わず後者を選んだ。リスクは小さい方がいい。クロスボウの矢程度なら距離があればかわすことができるが、そこに至近距離からの攻撃が加わったら、それは一気に難しくなる。

それに、歩いて行った奴は自分を大きく見せるためか、鉄パイプを引きずっているので、それによる音が俺の足音を消してくれる。

決断すると、オレはすぐに、しかし、なるべく静かに飛び出した。

少ない歩数で相手の背後をとり、その頭を組み合わせた両手で強打する。

「がっ……」

そいつは一撃で気絶した。最近組織の情報を集めるのをやめたため、不良どもと喧嘩していなかったが、どうやら腕は鈍ってはいないらしい。

オレは前を向いたままできるだけ急いで階段まで戻り、そして、階段を駆け上がった。

「ふう、後ろから撃たれはしなかったな」

オレは何事もなく階段を上がることができた。てっきり矢が飛んでくるものだと思っていたのだが……

「まあいい、おかげで楽に上がることができた」

せつかく何事もなく済んだのに、このままここについて同じように階

段が上がってきた矢を放った奴と遭遇しては意味がないので、オレは早々とその場を離れ、まずは周囲を探索しながら3階の戦闘禁止エリアを目指した。

第9話 睨み合い

齋と九條が去つてしばらくすると、齋に気絶させられた男、赤井雄太は意識を取り戻した。

「畜生……、俺をぶん殴つたのは誰だあ!!!?」

既にこの場にいない相手に対して、赤井は怒りの咆哮を上げた。

「出て来いやああああ!!!」

手に握つた鉄パイプを怒りに任せて壁に叩きつける。

そんなことをしても出て来るはずがなかったが、彼はその怒りを抑えつけることができなかった。

「こんな屈辱は初めてだぜ……。くくくつ、待ってるよ。必ず見つけ出してやつからよオ……。!」

おそらく自分を殴り倒した相手は階段を上がったのだらうと思い、彼もまた階段を上がることにした。

「ここで誰かくるまで待つてようかとも思つてたんだがよオ、ここまでなめられちゃあ借りを返さねえわけにはいかねえなあ」

どのくらい気絶していたのかはわからないが、それほど長い時間ではないだらう。強打されたとはいえ、所詮は素手だったのだから。

「俺を殺しておかなかったこと、後悔させてやるぜえ……！」

当然の如く、階段を上った先にも誰もいない。

そんなことは彼もわかっていたのだろう、特にその場でわめくことなく、適当に3階を歩き出した。

・ ・ ・

「ん……？」

3階を歩いていたオレは、背後に人の気配を感じて振り返った。

しかし、視線の先には誰の姿もない。

「……気のせい、か？」

だが、歩き始めると、しばらくしてから再び背後に誰かの気配を感じる。

やはりつけられているな……

さて、どうしたものか。今のところ襲ってくる様子はないようだが、

後をつけられるのはいい気分ではないし、第一このままでは戦闘禁止エリアに着くまで休むこともままならない。どこかで撒くか？

だが、この広い建物の中、追手を撒くのは難しい。歩いていてはいつまでも撒くことはできない。かといって走れば音が響くので、相手に自分の居場所を教えているようなものだ。

そうになると、取れる手段としてはそれでも体力と脚力に任せて力技で逃げ切るか、それともここで撃退しておくかな。

そしてオレは後者を選んだ。オレはそれほど足が速いわけではないので、相手が筋肉ダルマでもない限り逃げ切るのものすごく体力を使うことになる上に、確実に逃げ切れるかどうかはわからない。まあ相手がどんな奴でも敵^{かな}うってという自信があるわけでもないが、走るよりは戦う方が得意だ。

「……おい、隠れていないで出てきたらどうだ？」

しかし、向こうからの反応はなかった。まあ当然だな。呼びかけたくらいで出てきたら苦労は……

「……ふうん、やっぱり気付いてたのね」

……出てきた。何がしたいんだ、こいつは？

身長は……、高いな、170手前くらいあるんじゃないか？ 髪は黒髪のショート。そして、顔を見る限りオレより老けている。

「ちょっと、今何か失礼なこと考えなかった!？」

「気のせいだろう。自意識過剰じゃないか？」

「・・・言っとくけど、私はまだ10代よ」

「そんなことはどうでもいい。それより、なぜオレの後をつけてきた？」

「どうでもいいって流された」とかいう声が聞こえた気がしたが、おそらく気のせいだろう。

「・・・まあ、ちょっとした様子見よ」

「そうか。それで、何かわかったか？」

「そうね、あんたがただの一般人じゃないってことがわかったわ」
「なぜかドヤ顔。一体何が誇らしいのか、オレにはまったくわからない。」

「ただの一般人を捕まえて失礼なことを言ってくれるな。先に言うておくが、オレは組織の関係者ではないぞ？」

「そんな言葉信じるわけないでしょ。それに、組織のことを知っている時点でほぼ確定みたいなものじゃない」

「なら、同じ言葉をお前に返そう。なぜお前は組織の存在を知っているんだ？」

「そんなの教えないわよ。私には私なりの事情があるの。それをあんたが知る必要はないわ」

「それを言うなら、オレにもオレの事情がある」

「どうせそれも組織絡みの事情なんですよ」

どうやらこいつはオレを組織の関係者にしないと気が済まないようだ。

俺から見るとお前も十分怪しいんだがな。

「そんなにオレを疑っているのなら、オレと一緒に行動したらどうだ？ もしオレがお前の言うように組織の関係者だったなら、そのうちに尻尾を出すかもしれないぞ」

そして、オレはオレでこいつを監視することができる。互いにとって悪い条件ではないだろう。

「・・・そうね、それもいいかもしれないわね。でも、やめておくわ」

だが、意外にもその返事はNOだった。

「なぜだ？ 互いに誤解を晴らすことのできるいい方法だと思うんだが」

「確かにね。でも、もしあんたが組織側の人間だった場合 まあほぼ確定だけど わざと私を好戦的なプレイヤーと接触させて、私がそいつと戦っている間に背後から攻撃してくるかもしれないじゃない。そんな危険な状況に追い込まれるのは御免だわ」

「おいおい、E P 1でSMと行動を共にしていた奴がそれを言うか？」
サブマスター

「? 何のことよ?」

「・・・いや、なんでもない。何となくそう言わないといけないよ
うな気がしたただけだ」

「どうやらおかしな電波を受信してしまったようだ。気を付けないといけないな。」

「とにかく、私はあんたとは一緒に行動しないわ」

「ならどうするんだ?」

「今まで通りよ。あんたの後をつけていくわ。そうすれば敵と接触した場合も真つ先に狙われるのはあんたになるからね」

「存在がばれておきながら尾行を継続とは・・・、馬鹿なのか? それとも頭が悪いのか? む、どっちも同じ意味だな。それに、これは若干距離があるとはいえ、一緒に行動していることにはならないのか?」

「オレの邪魔はしてくれなよ?」

「それはあんたの行動次第ね。あんたが組織と連絡を取ってたりしたら、その時点で攻撃を仕掛けるわ。ただ、もし万が一あんたがただの連れてこられた側のプレイヤーだったら安心していいわよ。私は組織の関係者しか殺さないから」

「……まあいい。そういうことなら好きにしろ」

どうせついてくるなと言ったところで無駄だろう。

さすがに攻撃しないという言葉を簡単に信じるわけにはいかないが、実際に今まで背後をとっていながら攻撃をしてこなかったのは事実だ。それに、今のこいつからは殺気がそれほど感じられない。まったくくないというわけではないが、それは相手を傷つけようという類のものではなく、どちらかという嫌悪に近いものだ。

距離が離れているのもあり、この程度なら気を付けていれば相手に後れを取ることはない範囲だ。

オレは姫宮の存在をないもののように扱って、再び戦闘禁止エリアを目指して歩き出した。

その後、結構な時間を歩いたが、姫宮は1回も手を出してこなかった。

ただ、オレが食料や武器を見つけたときには近寄ってきてその一部を分捕っていった。

休憩中にたまにいなくなる時もあった。その間に撒いてやるうかとも思ったが、それほど長い時間ではなかったのですねに見つかってしまっただろうと思いき、結局はおとなしく休んでおくことにした。ちなみにどのくらい短いかというと、ちょうど1回花を摘めるくら

いだ。

そんなこんなで歩き出して3時間。オレは戦闘禁止エリアの直前で1人の男と遭遇した。

そして、そいつはオレを見つけるなりこう言った。

「よう、村崎弟」

「なっ……！」

その一言は衝撃的で、オレは少しの間その場に立ち尽くしていた。

「……改めてみると、やはり彰とは似ても似つかないな。お前たち、本当に兄弟か？」

オレはそこでようやく頭が現状に追いつき、そいつに向かって問いかけた。

「お前、兄貴を知っているのか!？」

「ああ、知っているさ。なんたってこのオレが殺した奴だからな。忘れるはずがない」

「っ！ 貴様ア!!！」

オレはその言葉を聞いてキレた。そいつに向かって突っ込み、ナイフをがむしゃらに振り回す。

だが、そいつは前後左右にゆらゆらと動いてそのすべてをかわした。

「危ないな。そういう物騒なものは無闇に振り回すなよ」

「このっ！」

ガッ

オレが振るったナイフはそいつが持っていたモノに弾かれた。

「そう焦るな。後でちゃんと敵討ちのチャンスはやる。今回はその誘いに来ただけだ」

そいつはそう言って、オレのナイフを弾いた警棒をこちらに向けた。

オレは投げナイフを取り出して投げつけたが、手が警棒からの電撃で痺れていたため、うまくいかなかった。

「くそっ……！」

「今のお前じゃ無理だ。だから、俺を倒したければもっと強い武器を集めて来い」

そいつはオレに背中を向けて歩き出した。

「4階の戦闘禁止エリアで待っている。くれぐれも他の連中に殺されてくれるなよ？俺と戦う前に死なれちゃあ拍子抜けだからな」

その言葉を最後に、そいつはその場から姿を消した。

「……おい、聞いていたんだろう？」

オレはしばらく思索した後、跡をつけてきている奴に話しかけた。

「ええ、もちろん」

直に返答があり、すぐその角からそいつは姿を見せた。

「あいつは組織の関係者か？」

「そうよ。あいつは榊原悠斗。私も知っている組織のメンバーの人よ」

「なら、お前の殺害対象だな？」

「そうなるわね」

「それなら」

オレは振り向いて、そいつに向かい合った。

「オレと手を組まないか？」

第10話 痛み分け

オレと手を組まないか？

その俺の問いに、そいつは少しの間考えた後、答えを出した。

「手を組む・・・、そうね、悠斗を殺すまでなら手伝ってもいいわよ」

「決まりだな。なら、今更だが自己紹介をしておこうか。オレは村崎斎だ」

「確かに今更ね。私は姫宮^{ひめみや}皐月^{さつき}よ」

「それで、これからどうするのだが・・・」

「今すぐ追いかけて潰す・・・ってわけにはいかないわよね」

「ああ。そうするには俺たちの武器が貧弱すぎる」

「それなら、やっぱりまずは強い武器探しよね!」

「あ、ああ。そうなるな」

なぜか急にハイテンションになった姫宮について行けず、オレは気圧される形で頷いた。

「じゃあこれからは別行動にしましょ。私は先に4階で武器を探し
てくるわ！」

姫宮はそう言って、さつさと駆けて行ってしまった。

「・・・なんだったんだ？」

オレは何となく氣勢をそがれた気持ちで姫宮の後姿を見送った。

さつきまで人のことを怪しいと言って付け回していたくせに、今度はオレ1人置いて先に行ってしまった。

「信用されたと捉えていいのか、これは？」

何はともあれ、これでまた1人で自由に歩けるようになった。別にこれを狙っていたわけじゃないが、自由であるに越したことはない。

「さつさと榊原とかいう奴を殺すために、オレも武器を集めるか・・・」

そう呟いて、オレも武器を探して歩き出した。

時刻はまもなくここに来て1日が終わる頃だった。

・
・
・

優木と千島は、赤井が階段を占領する前に既に3階へと上がっていた。

「それにしても、この広い建物の中どこにいるのかわからない相手を探すのはきついね。どこか村崎が行きそうな場所とかないのかい？」

あたしは隣を歩いている千島にそう訊ねた。

「うーん・・・、オレには目的があるーとか、そのためには人殺しもするーとかは言ってたけど、特にどこってというのは聞いてないよ」

その言葉にあたしはまた顔をしかめた。

村崎の奴、多分兄の彰を殺した奴か、もしくはそれに携わっていたであろう組織の関係者を探して殺そうとしてるね。こりゃちよつとマズいかも。

「早く探さないと、取り返しがつかなくなるかもね・・・」

「え？ どういうこと？」

「アイツが誰かを殺しちゃうかもってことだよ」

「そっか・・・。でもね、愛莉ちゃん。もっと心配するべきことってあると思うんだ」

「もっと心配するべきこと？」

「うん。たとえば・・・自分が攻撃されることとか！」

「っ！」

千島が振るったナイフを大きく身を逸らして避けた後、あたしはその場から距離を取った。

「今の避けるんだ？ 反射神経いいんだね」

「アンタ・・・どういうつもりだい？」

「どういうつもりもなにも、私が愛莉ちゃんを殺すといいことがあるんだよ」

「いいことだって？」

「うん。だって、そうすれば私の首輪の解除につながるから」

「・・・なるほどね」

あたしは村崎から教えてもらったすべてのPDAの解除条件を思い出す。

クリアカードは4と9の2枚だけ。でも、まだ一緒に行動し始めてから12時間は経ってないから、千島のPDAは4？

それとも、直接「殺す」ことは必要ないけど、殺せば楽になるのは3、7、8、10あたりだから、それらのうちのどれか？

いや、AだってQだって人が減れば戦闘になる可能性が下がるから、それらも確実に違うとは言いきれない。

・・・結局、あたしの番号以外ならどれでもおかしくないってことだね。

元々プレイヤー同士が殺しあうように作られたゲームだから、こうなるのは仕方のないことなのかもしれない。

「アンタの解除条件、協力し合うことはできないのかい？」

「ううん、できるよ」

「なら、協力し合えばいいじゃないか」

「でも、村崎君はそうせずに1人でどこかに行っちゃったよ」

「それは・・・」

「一緒に首輪の解除を手伝ってくれと思ってたのに、あんな風に知らないうちに私を置いて行っちゃったんだよ。だから、愛莉ちゃんもそうしちゃったら嫌だから、ここで私のために死んでもらうの！」

再び斬りかかってくる千島を、あたしは後退して避ける。

「確かに村崎はアンタを置いて行ったけどさ、ちゃんとアンタの心配をしていたよ」

「そんなのは詭弁かもしれないよね。何か理由を付けないと引き受

けてくれないかもしれないって思ったんじゃない？」

「・・・考え直す気は？」

それに対し、千島はナイフを構えるという行動で返答を示した。

あたしはいつでも動けるように身をかがめる。いくら相手が攻撃してくる気があると言っても、一般人を攻撃するのは気が引けたからだ。

「武器を構えないんだ？」

「あたしにアンタを傷つける意志はないからね」

「ふうん、余裕だね。もしかして、村崎君が言ってた組織の関係者だっったりするの？」

「さあ、どうなんだろうね。あたしにもそれはわからない」

「わからない？」

「気が付いたらここにいたからね。これから先、アンタの言う組織つてところから連絡が来ないとも限らないさ」

「曖昧な返事だね」

そこで千島は一瞬気を抜いた。

今だ・・・！

あたしはその隙をついて、一気にその場から駆け出した。

「あっ……！」

一歩遅れて千島が追いかけてくる足音が聞こえたが、何度も角を曲がったりドアをくぐったりしているうちに、それも聞こえなくなつた。

「撒いた、かな」

完全に足音が聞こえなくなつてからしばらく歩き続けて、もう何度か目にした真新しい段ボールのある部屋に来たところで、あたしはようやく足を止めた。

さすがに疲れたので、その段ボールの脇にしゃがみこんで中身を確認した。

「……これ、あたしが普段持ち歩いてる武器じゃない」

中から出てきたのは痴漢を撃退するためのスタンガンが2つと、それ以上のものを撃退するための麻醉銃が2丁。それらはここに連れて来られた時、つまり、眠らされていた間にあたしを取り上げられたものだつた。

あたしはそれらを制服の下の所定位置にしまった。

「さて、これからどうしようかね・・・」

特に何か目的があつて動いていたわけではないので、あたしは少し悩んだ。

「首輪解除を目指してもいいけど、ほつとしてもそのうち外れそうだしね」

あたしの首輪の解除条件は、べつにあたし自身が何かしなければいけないわけじゃないし、もっと言うと何もしなくても解除できてもおかしくない条件だ。

そう、あたしのPDAはハートの6、解除条件は『JOKERの機能が5回以上使用されている』こと。自分でやる必要は無いし、近くで行われる必要も無い。

結局、何もせずにしばらくその部屋で休むことにした。

そして、休憩を取ることたったの15分、あたしは誰かの足音がこちに近付いてきていることに気が付いた。

「追ってきた？・・・いや、まさかね。千島にあたしの居場所がわかるわけないか」

ただ、相手が誰であろうと、警戒はしておかないといけない。

あたしは静かに立ち上がり、部屋に入ってきた相手を奇襲できるようにドアの陰に隠れた。

徐々に足音が近付いてきて、そしてついにこの部屋の前で止まり、一瞬の空白を置いてドアが開かれた。

その瞬間、あたしは麻醉銃を構えて飛び出した。

「動くな！・・・って、アンタ・・・！」

しかし、そこに立っていたのはついさっき撒いたはずの千島だった。

「あはっ。逃がさないよ、愛莉ちゃん！」

あたしがトリガーを引く前に、千島が懐に飛び込んできた。

「くっ！」

咄嗟に左手で腰に差していたナイフを抜き、その刃を受け止める。

「すごいね。これも防いじゃうんだ」

「・・・どうしてここがわかったんだい？」

「秘密。それを教えちゃったら次からこの手が使えなくなっちゃうじゃない」

「まあそういっただろうとは思ったけどさ」

あたしは麻醉銃をしまって、ナイフだけを構えて千島に対峙した。

この部屋にある出入り口は現在千島が占領しているドア1つだけ。この場を切り抜けるためには、千島をそこから退けるしかない。

「今度はちゃんと向き合ってくれるんだ。よかった、やっぱり無抵抗の相手は攻撃しにくいんだよね」

そう言っつて千島が取り出したのは、一丁の拳銃。

コイツ、本気だね・・・

ナイフなら特定の場所を狙わないと致命傷を与えることはできないが、拳銃なら適当に何発かぶち込むだけで致命傷となる。

あたしは一層気を引き締めて、千島の行動に注目した。

その銃口はあたしの体の中心に向いている。一発で殺そうと無理に顔や心臓を狙わずに完璧には避けにくい体の中心を狙ってくるあたり、確実に仕留める気だ。

しばらくこう着状態が続く。

あたしは確実に銃弾を避けるために、千島は確実に仕留めるために相手の出方を窺っていた。

そんな中、先に動いたのはあたしだった。

一気に千島に肉薄し、斬りつけると見せかけて横に跳ぶ。

タアンッ！

一発目の弾がさつきまであたしがいた位置を通り過ぎていく。

そのまま千島が動けなければその手から銃をはたき落そうと思っていたが、千島は外れたことは気にせずに着いてこっちに向かつて銃を構えなおす。

あたしは再び横に跳んで弾をかわそうとしたが、今度は千島は撃っていないかった。

代わりに、その銃口は確実にあたしを追っていた。

マズい……！

そう思った次の瞬間、あたしはナイフを千島に向かって投げつけた。そして、それとほぼ同時に二発目の銃声が響く。

「っ……！」

「きゃあ！」

互いの二の腕から鮮血が飛び散る。

傷口は焼けるように痛んだが、それを気力で抑え込んで再び千島に肉薄する。

「くっ！」

それに気付いた千島が再度こっちに銃を向ける。けれど、今度はそれがあたしの狙いだった。

「はあっ！」

あたしは銃口を避けながら、それにスタンガンを当てて電流を流した。

「あっ……」

千島は一度ビクツとなった後、こっちに倒れかかってきた。

もう意識はないだろう。あたしはそれを受け止めて床に寝かせ、そしてその手に握っていた銃を取り上げた。

ついでにナイフも奪い、他にも何か武器を持っていないか探っていたところ、あたしはあるものを見つけた。

「これは……。なるほどね、そういうこと」

あたしはそれを見つけたことがばれないように元の位置に戻し、その場を離れた。

第11話 運命の分岐点

目が覚めた後、私はしばらく呆然としていた。

あれ？　なんで私、こんなところで倒れてるんだっけ・・・

そして、先程の出来事を思い出す。そうだ、愛莉ちゃんに気絶させられたんだ。

そうと気付くと、私は急いで持ち物の確認をした。

「PDAは・・・ある。こっちも残ってる。・・・でも、武器は残ってないみたい」

だけど元々拳銃1丁とナイフ1本しか持っていなかったので、対した損失じゃない。

「まあ、これを取り上げられなかっただけでもよかったと思わなくちゃね」

そう言った千島の手には何かの機械が握られていた。

「村崎君は無理そうだったけど、愛莉ちゃんならいけると思ったんだけどな・・・。計算違いだったみたい」

なぜかはわからないけど、優木愛莉はかなり戦いなれているようだ

った。とても私1人では太刀打ちできないほどに。

「やっぱり、私1人じゃ何も成し遂げることはできないのかな・・・」

「

私は私なりに努力してきたつもりだった。けれどその努力が実を結ばないのなら、周りから見ればそれはただの自己満足に過ぎない。

こんな調子じゃ首輪を解除できるかどうかすらわからない。

既に1階は進入禁止となっている。そうなる前に一度下に行った方がよかったのかもしれない。

でも、私は前に進むことを選んだ。自分を信じて・・・そして信じた結果、何の成果も残せずにここに1人置いて行かれた。

今からでも遅くない。誰かと組んで、まずは首輪の解除を目指そう。

誰かと組んで・・・そして、その時真っ先に思い浮かんだのは彼だった。

うん、村崎君に会おう。そして、手伝ってもらおう。

そう考え、私は軽く傷の手当てをした後、ある一点を目指して歩き出した。

・
・

オレが武器を求めて3階を歩いていると、前方から誰かが近づいてくる足音が聞こえた。

「ん……」

誰だろうかと思い、近くの部屋に身をひそめて様子を窺うことにした。

やがて角を曲がってきたのは千島だった。その手にPDAを持ってきよるきよるとしている。

そして、オレの隠れている部屋を見てPDAをしまい、まっすぐにこちらに向かって歩いてきた。

なぜ最初に躊躇していたのかはわからないが、どうやらここに用があるらしい。

武器を構えている様子はなかったので、オレは手にナイフを持っておくだけに抑えて、千島が入ってくるのを待った。

ドアを少し開けて中を覗き、そしてオレの姿を発見すると千島の顔に安堵の表情が浮かんだ。

「あ、村崎君」

「よう。2階の戦闘禁止エリア以来だな」

「もう、村崎君が私を勝手に置いて行ったんでしょ！」

「悪い悪い。少し身軽になりたくてな」

「……私、そんなに重荷だった？」

なぜか千島の表情が暗くなった。

「さあな。オレはお前を担いだことなどないから、そんなことはわかるわけがないだろう」

「え……もうっ、女の子に体重の話はご法度！ それに私が言ってるのはそういう意味じゃないんだから！」

「まあそう怒るな。ちょっとした冗談だ」

冗談で済まされることじゃないよ！ などとまだ文句を言っていたがそれは無視する。

「で、なぜ急にそんなことを訊くんだ？」

「うん、ちょっとね……」

千島がオレから目を逸らす。何か事情があるようだが、それを話す気はないようだ。

「……率直に言っと、いない方が楽だな」

まともに動けない奴は戦力にならない。かえって相手に人質や盾、

障害物代わりに利用されやすいので邪魔なだけだ。

「やっぱり、そうなんだ・・・」

わずかな間落ち込んだが、千島はすぐに顔を上げた。

「じゃあ、私が役に立つなら村崎君と一緒に行動してもいいかな？」

「どついつ風に役に立つんだ？」

「うん、これ・・・」

そう言っただけ千島はPDAを取り出したのだが、そこで固まった。

「うそ・・・」

「どつしたんだ？」

千島はそれには返答せず、急いでドアの方に駆け寄った。

だが千島がドアに触れる前に、そのドアが開いた。

「なんだ、優木・・・っ！」

入ってくる人物に見覚えがあったのでつい気を抜いてしまったが、優木の手には拳銃が握られているのを見て急いで臨戦態勢を整え直す。

だがその銃口はオレではなく千島に向けられていた。

「やっぱり、たどり着く先は村崎かい」

「・・・え？ 何のことかな？」

千島は優木と目を合わせずに横を向いてそう返した。

「ごまかそうったって無駄だよ。アンタが今手に持ってるそれ、PDAじゃないでしょ？」

「なん・・・っ！ う、ううん、そんなこと、ないよ」

だが千島はそれを見せることなく、逆にそれを隠そうとした。

「村崎」

「なんだ？」

今度は千島に銃口を向けたままオレに話しかけてくる。

「こいつは今回のゲームマスターだ。騙されないように気を付けなよ」

「・・・なんだと？」

「今千島が持つてるのはPDAじゃない、受信機だよ。アンタに取り付けた発信機からの信号を受け取るね」

その言葉に千島が身を固くする。どうやら本当のことらしい。

「で、なぜそれでゲームマスターだとわかるんだ？」

「あたしは以前にもゲームに参加したことがあってね、その時にそれと同じものに触ったことがあるのさ」

「それで？」

それだけでは千島がゲームマスターだという証拠がない。断言するということはもっと明白な理由があるのだろう。

「その時あたしはゲームマスターだった。そして、その受信機と発信機はゲームマスターが有利に事を進められるように組織から配られるものだったんだよ」

「っ！」

・・・待て。ということは、優木もゲームマスターということか？

「・・・ゲームマスターは全部で何人いるんだ？」

「さあ。そんな詳しいことは知らないよ。ただ、一度のゲームに参加するのはゲームマスターが1人とサブマスターが1人。組織側からの参加者は大抵その2人さ」

「なるほど、なら今回のゲームマスターは千島ということか」

そして、姫宮の言葉を信じるのなら榊原がサブマスターなのだろう。

しかし、そう考えると1つ疑問が残る。

「だが、そうなるとお前はどつなんだ？ それだけの情報を知っているということはお前も組織側の人間なんだろう？ それになぜそ

の情報をオレに教えた？」

「生憎あたしはもう一年以上前に組織を抜けててね、今は逆に組織から追われてる身さ。アンタに教えたのは、アンタが組織の操り駒にされないためだよ」

「・・・なるほど、組織に弄ばれるのはオレとしても不本意だ。その情報、ありがたく受けとっておくことにしよう」

オレは構えていたナイフを腰に下げて、代わりに先程見つけた拳銃を手に取った。

「村崎！？ 何を・・・」

「安心しろ。けりをつけるだけだ」

オレはその銃口を千島に向ける。

オレの動きを視界の端でとらえたのか、それともただ銃を構える音に反応したのか、俯いていた千島が恐怖と絶望が入り混じったような表情を顔に張り付けてこちらを向いた。

「駄目だ村崎！ そんなことしちやいけない！」

自分だって千島に拳銃を向けているくせに、よく人のことが言えるな。

「五月蠅いな、少し黙ってる」

「アンタの兄だって、アンタがそんなことをするのは望んでないは

「ずだよ！」

その言葉に、オレの動きが一瞬止まる。

「……お前に死んだ人間の何がわかる？」

「っ……！」

今度は優木が固まる番だった。

まさかオレが、兄貴が死んだことを知っているとは思っていなかったらしい。

「……どこで、そのことを聞いたんだい？」

「榊原とかいう奴が親切に教えてくれたさ」

「！？ あの馬鹿、いったいどういつつもりだよ……！」

どうやら優木は榊原も知っているようだ。……なら、こいつも榊原と同罪か？ 今は組織を抜けているとしても、兄貴が死んだ当時はまだ関係者だった可能性が高い。

「……まあいい。それは後回しだ。まずは今直面しているところから終わらせよう。」

そこからはまだ何か言っている優木を無視して千島に向き直る。

「やってくれたな。まさかお前が組織の関係者だったとは」

「む、村崎君・・・」

「失せろ」

そしてオレは引き金を引いた。

第11話 運命の分岐点（後書き）

ちょっと短いけどここで終わりです。

そして、この話の後はサブタイトル通り分岐します。

・・・はい、そうです、他人のパクリです。

自分もやってみたいなと思ったのですことにしました。

とりあえずは分岐はこの小説内で章分けして行おうと思います。

無理だったら素直に新規小説を作成します。

次回は2ルートと同時に1話ずつ投稿する予定なので、いつも以上に時間がかかるかもしれません。

第12話A 狂い始めた歯車（前書き）

今週中に間に合いましたので更新します。

こちらのルートはサブルートです。本ルートを読みたい方は第2章Bの方へ移動してください。

章管理の都合上、更新直後に話が混同することがあるとは思いますが、5分程度すれば整理されると思います。

それでは

裏切り者には死を……

第12話A 狂い始めた歯車

タアンッ

銃声が鳴り響く。

放たれた弾のうち1発は千島の額に吸い込まれ、もう1発はオレの右手をかすめていった。

千島が糸が切れた人形のようにその場にゆっくりと倒れる。

「・・・アンタ、自分が何をやったのかわかってるのかい!？」

怒りを含んだ声で優木がそう問いかけてくる。

「べつに、ただ気に喰わない奴を殺したただけだ」

「ただ殺しただけって・・・!」

しかし、優木はそこで急に話を切った。オレが撃った2発目の弾が頬をかすめたのだ。

「ちっ、外したか」

「・・・狂ってる・・・」

「知ったことか。先に手を出したのはお前ら組織の人間だ」

「村崎彰のことかい？」

「わかっているじゃないか」

話しながらも3発目を撃つが、今度は予想していたのか、撃つ瞬間に動かれて狙いを外した。

「・・・まずはアンタを止める。これ以上好き勝手できないようにしてあげるよ」

応戦する気か、優木も手に持っていた拳銃を構えなおす。

「ふん。やれるものなら・・・？」

おかしい、体が急にだるく感じられる。

「あたしのこれは拳銃じゃなくてね、エアガンを改造して作った麻酔銃さ」

その言葉と同時に、優木はオレに向かって再び発砲した。

「ぐっ・・・」

ちくりと痛みを感じた後、今度は視界が狭くなってきた。

「1」の・・・」

オレは立っていることもままならなくなり、その場に倒れこむ。そ

して直に意識を麻酔に刈り取られた。

・
・
・

「さて、どうしようかね・・・」

村崎を麻酔銃で眠らせた後、あたしはどうすべきか悩んだ。

「PDAを奪うわけにはいかないし、武器を奪ってもここにはいく
らでも代わりの武器はあるからね・・・」

そこであたしは1つの案を思いついた。

「あ、そうだ。まずはコイツの首輪を外して、それから下の階に連
れて行って、そこで食べ物だけ置いて置いて縄で縛っとけば・・・」

しかし、村崎の身辺整理を行った結果、出てきたPDAは2つ。

方や全解除条件の中でも1、2を争うほど条件の緩い2のPDAで、
方や今回のゲームで最も条件が困難だと思われる4のPDA。

「・・・困ったね。これじゃあどっちが村崎のだからはっきりしない
よ」

あたしは最初に出会った村崎を思い出してみる。

もし村崎のPDAが2なら、最初に出会った時にJOKERを持っているか訊いてくるだろう。

逆に4なら、1人で行動したいと言ったことに納得がいく。

「となると、4の可能性が高いね」

2つも持っていないながら自分のPDAを持ってないってことはないだろう。

試しに解除条件をしてみる。

そこには村崎から聞いた通りの解除条件と、残りの人数が表示されていた。

「残り3人。殺したのがまだ千島だけだったら辻褃が合うけど・・・」

┌

そこであたしはあることを思い出した。

「たしか、千島が村崎は『地図拡張』のツールボックスをインストールしたって言ってたね」

千島はゲームが始まってまだ1時間とちょっとしか経ってない時に村崎に会ったらしい。

そしてそれからはしばらくずっと一緒に行動していて、ツールボックスをインストールしたのもその時だったらしいから、おそらく『

地図拡張』のツールボックスがインストールされているのが村崎の初期配布されたPDAだろう。それまでに他のPDAを手に入れているとは考えにくい。

試しに4のPDAの方で地図を開いてみると、そこには確かに拡張された地図が表示された。

「ビンゴ。村崎のPDAはこっちだね。でも・・・」

問題はただ1つ。これでは解除してやることができない。

かと言って、首輪を解除させなければ今度は村崎が死んでしまう。

「まったく、つくづく嫌なゲームだよ」

首輪の件は保留として、とりあえず村崎の手から拳銃を引き抜こうとした。

武器を奪ってしまえば、相手を殺そうとする可能性はかなり低くなるだろう。

だが、その手は途中で止まった。

「でも、もしここであたしがコイツを丸裸にしたら、今度はコイツが他のプレイヤーに殺されるかもしれない・・・」

これまた難しい問題だ。あたしのせいで村崎が死ぬのは勘弁だけど、あたしのせいで村崎が人を殺すのも勘弁だ。

「・・・まったく、結局どっちも選べないじゃないか・・・」

あたしはその場から2のPDAと拳銃だけを持って、また荒らされるかもしれないが千島の死体をきれいに整え、その場を後にした。

もちろん千島からも使えそうなもの、村崎に盗られたら困るものはあたしが先に盗った。

・
・
・

「ぐ……」

優木がその場を離れてから1時間ほど経って、オレは目を覚ました。状況整理のために辺りをぐるっと見回す。

目に映ったのは無機質な灰色の壁と、千島の死体。

強制的に眠らされた前と違ったことは、オレを眠らせた張本人の優木がいなこととオレの持ち物の中から拳銃と2のPDAがなくなっていること、そして、千島の死体がきれいに整えられていること。

あの様子だと、おそらく漁ったところで何も出てこないだろう。

「拳銃を失ったのは痛いな。早く新しい武器を探すか」

幸いにもオレの4のPDAはなぜか盗られていなかったの、次の倉庫はすぐに探すことができた。

「……鬱陶しい」

最初に立ち寄った倉庫で再び拳銃を手に入れてからしばらく歩いて
いるうちに、オレは再び誰かに後をつけられていた。

最初は姫宮がまた後をつけてきたのかと思ったが、どうやら違っ
うだ。今度の奴は姫宮につけられていた時よりもはつきりと感じ取
ることができる。

今度は誰だ？

オレはそれを確かめるため、角を曲がってすぐにまた角を曲がり直
し、後続を確認した。

そこにいたのは、姫宮ほどではないが背が高めの少女だった。

ちょうどこちらに移動しようとしたところで固まっている。

「何か用か？」

とりあえずそいつに尋ねてみるが、返答はなかった。

「……っ!」

それどころかこちらにクロスボウを向けてきた。

しかし、どこか慣れない手つきで焦って構えられたそれは、明後日の方向へ矢を放った。

「目障りだ。消えてもらおうか」

オレは相手に攻撃意思があると判断し、拳銃を構えて反撃に出る。

だが相手はオレを執拗に攻撃してくることはなく、こちらが拳銃を構えると通路を引き返して姿を消した。

オレは一瞬追うべきか迷ったが、また後をつけられて攻撃されても面倒だと思い、ここで殺しておこうという結論を出した。

拳銃を構えたまま急いで後を追う。

相手の走って逃げる足音が聞こえるため、待ち伏せを心配する必要がないので、オレは遠慮なく全力で追いかける。

2人の間の距離はすぐに縮まった。

相手の背中がまともに見えたところで、オレはその背に向かって発砲する。

タアンッ！

1発目。大きく脇に逸れた。

タアンツ！

2発目。相手の結構近くを通過した。

そこで相手が角を曲がったので、オレも走ることに専念して2人の間の距離をさらに縮める。

タアンツ！

そして角を曲がって3発目。

しかし、今回の発砲はオレの拳銃からではなく、相手が手に握っているものからだ。体勢から見て、角を曲がってからは武器を持ち替えて後ろ向きに走っていて、オレの姿が見えた瞬間に発砲したようだ。

その弾は当たりこそしなかったが、オレの足を鈍らせるには十分だった。

「ちっ……」

拳銃まで持っていたとは。もっと楽に殺させてもらえるかと思っていたが、どうやらその考えは甘かったようだ。

迂闊に近付けば蜂の巣にされるのはオレの方かもしれない。

発砲を終えた相手は再び前を向いて走り出す。

どうもこのあたりは道が入り組んでいるようで、5メートルも走ればすぐに次の交差点に差し掛かる。

これではまるで鬼ごっこだな。ただし、鬼同士の潰しあい許されている特殊なものだ。

俺たちの生死を懸けた鬼ごっこはしばらく続いた。

だが、それはある出来事を期に終わりを迎えた。

相手の走る先にシャッターが下りてきたのだ。

オレが相手に続いて角を曲がると、ちょうどシャッターが下りている途中だった。

相手は懸命にシャッターの向こう側へ行こうと走っていたが、ここまでかなりの時間と距離を走ってきていたため、既に歩いているよりも少し速い程度の速さしか出ていない。

当然の如く、シャッターは相手が向こう側へ行く前に完全に下りた。

「ようやく追い詰めたか」

オレの声に反応して相手が素早くこちらを振り向く。だが、その顔には疲労が色濃く表れていた。

「もう諦めたらどうだ？ どうせ抵抗するだけ無駄なんだ。苦しまずに死にたいだろう？」

「……っ！」

だが相手は無言で拳銃を構える。

タァンッ！

4発目。今度はオレが、相手が拳銃を撃つ前に発砲する。

その弾は過たず相手の右肩に当たった。

「あっ……くっ……」

少女は拳銃を取り落とし、懸命に悲鳴を抑えてその場につづくまっ
た。

オレはその少女に近付き、ちょうど真上まで来た。

「……じゃあな」

タァンッ！

5発目。少女のこめかみに弾がめり込む。

少女は千島と同じようにあっけなく死を迎えた。

第13話A 交渉決裂（前書き）

1 1 / 2 1 2 3 : 2 2 赤井と六巳の戦闘前描写を追加しました。

第13話A 交渉決裂

オレは殺した少女から武器を奪い取り、他にも何かないと死体を漁ったところ、7のPDAを手に入れた。

そのPDAには『罨探知』がインストールされており、地図を見るとここも罨のある場所だった。

「なるほど、このシャッターはこいつが罨にはまったから下りてきたのか」

地図には詳しくは表記されていないが、足元にも配置されていたスイッチを踏んだか、それとも何かのセンサーに引っかかったか。どうせそんなところだろう。

「さて、次は・・・、そうだな、そろそろオレも4階に上がるとするか」

まだ2階すら進入禁止エリアにはなっていないが、早く上に行っておいて悪いことはない。

武器も上に行って集めればいい。今までの各階に置いてあった武器から考えても、往々にして下の階の武器よりもその1つ上の階の武器の方が強くなっている。

従って、このまま3階を歩いて武器を探すより、4階に上がってから探した方がより確実に榊原を殺すことのできる武器を入手しやすい

いということだ。

オレは地図で4階への階段の位置を確かめ、そこへ向かって歩き出した。

・ ・ ・

一方その頃、3階の別の場所では赤井が六巳、詩織、紫音の3人を見つけていた。

「今度は男1人に女が2人かよ。これまた楽そうな奴らだぜ」

俺は頭の中でこれから取るべき行動を考える。そしてすぐに考えはまとまった。

男 殺る
女 犯る

はっ、我ながら完璧だぜ。これ以上の考えは無用だっということだな。なら、さっさと行動して終わらせちまうか。

俺は3人のうしろ姿に向かって鉄パイプを振り上げ、雄叫びを上げながら突進していった。

「うおらああああ!」

それに反応して3人が振り向く。

「え……?」

「な……!?!」

俺は集団に向かって突撃して行ったが、その狙いはただ1人、先頭を歩いてる男だけだ。奴の脳天を叩き割った後は、女どもを慰みものにしてやるぜ。

だがここで誤算が生じた。てっきり全員が俺の威嚇で怯んだもんだと思ってたが、女のうちちっこい方が動きやがった。

「お兄ちゃん、危ない!」

そう叫んでそいつが男を引っ張る。それに反応して、男が俺がオレの狙いに気付いて一丁前にナイフなんて突き出してきやがった。

「ちっ、クソが……!」

俺は鉄パイプを手元に引き寄せ、足でブレーキをかけてナイフの刃から逃れて、体勢を整える。

「よお兄イチャン、そっちの嬢チャンのおかげで救われたなあ?」

さて、奇襲は失敗したが、まだ状況をよく呑み込めてない奴がいるなあ。一発喰らわせて気絶でもさせてやるか。

「なら……、今度はテメエだあ！」

俺はまだ呆然とした俺を見ていた女に向かって鉄パイプを振り下ろす。

だが、今度もまた邪魔が入りやがった。

「うおおおおお！」

横から男がタツクルをかましてきやがった。

「このクソガキが！ 邪魔くせえ！」

俺は急遽狙いを変えて、突進してきた男に向かって鉄パイプを振った。

ガキはそれを肩で受けて、軽く後退する。

「詩織さん、紫音さん、今のうちに逃げててくれ！」

「う、うん、わかった！」

ちっこい方の女がもう1人の女の手を引いてその場から走り去る。

「逃がすかよ！」

俺は逃げようとした女どもを止めようとしたが、再びガキが邪魔し
てきやがった。

「はあっ！」

「ちっ……！」

走り出そうとした俺に向かって突き出されたナイフを鉄パイプで去いなす。

「……まあいい、まずはお前をぶっ殺してから逃げた女どもを追うか」

俺はひとまず追うのをやめ、目の前のガキを殺すのに専念することにした。

・ ・ ・

詩織さんと紫音さんの2人を先に逃がした俺は、ナイフを構えて男と対峙した。

「これ以上先に行かせてたまるかよ。俺がお前をここで止めてやる！」

「はっ、お前ごときが俺の相手になるとでも思ってたのかよ!？」

男が再び鉄パイプを縦に横に振り回してくる。

俺はそれらを避けて、避けられそうもないものはなんとかナイフで受け止めるが、その度に腕がしびれる。

キィィィ・・・ン

そして数合打ち合った後、相手の男が振るった鉄パイプに俺の持っていたナイフが弾き飛ばされてしまった。

「くははははっ！ どうしたよ兄ィチャン。もっと気張って見せるや！」

「っ、くっそ・・・！」

これは使いたくなかったんだけど・・・

しかし、俺にはもうこれ以外の武器がない。

俺は男と距離をとり、後ろのポケットに隠し持っていた拳銃を相手に向けた。

「動くな！ 動くと撃つ！」

さすがに拳銃を見て身の危険を感じたのか、相手は無闇に武器を振り回すのをやめた。そして何を思ったか、俺に話しかけてきた。

「・・・おい、テメエ確か、六巴とか言われてたよな」

「・・・それがどうかしたのかよ？」

「いや、別に確かめたただけだぜ。ところでな、俺は赤井雄太ってん

だ。よろしくな、六巴さんよお」

「俺はお前とよろしくなんてしたくない」

「まあそう言うなよ。ほら、互いに武器なんて捨てようぜ」

そう言って相手は鉄パイプを床に落とし、両手を上にあげた。

それを見て、俺は一応銃口を下げた。

「おいおい、俺は手放したってのに、お前は持ったままかよ？」

「話し合いならこれで充分だろ？ それにお前がもう武器を持ってないとも限らないだろうが」

「ちっ・・・、まあいい。今はそれで我慢してやらあ。それで、本題なんだけだよ。お前、俺と手を組まねえか？」

「・・・は？」

「だからよ、協力しねえかつつてんだよ」

俺には赤井とかいう男の心の内が知れなかった。手を組む？ ついさっきまで俺を殺そうとしていた相手と？

「ふざけんな！ たった今の今まで俺を殺そうとしていた奴と協力なんて、そんなことできるわけないだろ！」

「まあそう怒るなよ。1発や2発殴らせてやるからよ、手を組もうぜ」

「気が悪い。一体どうして急にこんなに態度が変わったんだ？俺が拳銃を見せたからか？」

「……なんで急に協力しようなんて言い出すんだよ？」

「お前、さっき逃げて行った女らと一緒に行動してたんだろ？」

「……そうだけど？」

「ならよ、あんな奴らより強い俺と組んで、あいつらを俺に売ってくれねえか？」

なるほど、女目当てかよ。……反吐が出るぜ。

俺が黙っているのを見て、俺が悩んでるとでも思ったのか、赤井は更に話を続けた。

「べつに両方くれつつってるわけじゃねえ。お前にも片方やるからよ。俺を撒いたふりをしてあいつらのところに戻って、油断したところを俺が捕まえる。簡単だろ？」

「断る！ お前になんかに2人を売るわけねえだろ！」

「おいおい、そんな口きいていいのかよ。断ったらこの場でお前のPDAをぶっ壊してゲームオーバーにしてやってもいいんだぜ」

「やれるもんならやってみるよ！」

俺は再び銃口を上げ、赤井に照準を定めた。

「はっ、よく吠えるじゃねえか、このクソガキが!!!」

赤井が鉄パイプを拾い上げるのを見て、俺は狙いを定めつつ徐々に引き金に力を加える。

だがそこで赤井が取った行動は鉄パイプを持って俺に突撃してくることではなく、それを俺に向かって投げることだった。

「うわっ!」

咄嗟のことで俺はそれを腕で防ぐ。

「ひやははははっ! 死ねエ!」

そして前に向き直った俺の目に映ったのは、拳銃を構える赤井の姿。

次の瞬間、俺は腹部に銃弾を受けて床に倒れた。口の中に血の味が広がる。

「あ、ぐう……」

赤井が近付いてくる足音が聞こえる。

俺はなんとか離さずにいた拳銃で狙い撃とうとしたが、痛みのおまじり満足に体を動かすことができなかった。

「けっ、おとなしく俺と組んでりゃ死なずに済んだのによ。まったく、馬鹿な奴だぜ」

赤井が俺のすぐそばまで来て、腹部の傷口を蹴りあげる。

「かはっ……」

堪らずに口から血を吐く。体勢がうつ伏せ気味から仰向けになった。

2度目の蹴りで、今度は拳銃から手が離れた。

「安心しな。もうすぐその痛みからも解放されるぜ」

そう言っつて赤井は俺の傷口をぐりぐりと踏みつける。

「ぐがっ……」

痛みで意識が朦朧としてきた。ああ……、俺、このまま死ぬのかな。死ぬんだろうな……。

混濁していく意識の中、俺が最後に耳にしたのは、赤井の狂ったような嗤い声と共に響いた1発の銃声だった。

・ ・ ・

私と紫音は、六巳さんが知らない男の人を足止めしていてくれる間に結構な距離を走って逃げた。

「はぁ・・・はぁ・・・、ここまでくれば、もう大丈夫かしら・・・？」

「・・・うん、そうだね。追ってきてる様子はないみたい」

普段から家にこもって本ばかり読んでいる私とは違って、よく外で遊んだり部活で体を動かしたりしている紫音はそれほど息を切らさずここまで走ってきていた。

私はなんとか妹に後れを取らないようにと頑張ってはみるものの、それでもやっぱりやせ我慢はそんなには続かないもので、私の足と体力は既に限界に近かった。

「ごめんね、紫音。疲れたから、少し、休ませて」

「そうだね。ここまで一生懸命走って来たもんね。あたしも疲れたし、休憩にしよう」

こんな時、いつも紫音は自分を差し置いて私を案じてくれる。嬉しい反面、姉としては情けない。

「いつもごめんね、紫音」

「え？ なんのこと？」

「・・・うん、何でもないわ。・・・ありがとう」

「くすっ・・・、変なお姉ちゃん」

「わ、笑わなくてもいいじゃない」

「だって、お姉ちゃんがやけに殊勝なんだもん。おかしくって」

「もう・・・」

その後、取り留めのない話をしながら体を休めて、30分後に私たちは六巴さんと落ち合う予定の場所である4階の戦闘禁止エリアに向かって歩き出した。

第14話A 振り返ち（前書き）

両話同時更新だと書きにくいし読みにくいというところで、先にこちらを仕上げてしまおうと思います。本ルート更新はしばらくお待ちください。

第14話A 振り返ち

ここは4階のある部屋の中、そこには姫宮が1人立っていた。

「ふふっ、これだけあればさすがの悠斗も倒せるわね、きっと」

私は数種類の銃や刃物、その他のいくつかの武器に囲まれながら笑みを浮かべた。

「村崎は私と協力して悠斗を殺そうなんて言ってたけど、あんな奴、今の私1人で十分だわ」

まあ元々あんな素人じゃただの壁代わりくらいにしかないだろうけど。

でも、今の私にはその壁さえ必要ない。これだけの武器があれば相手が誰であろうと負ける気がしないわ。

「それに悠斗は戦闘禁止エリアの中で、こっちに向かって攻撃すらできない状態だし。まさに袋の鼠ね」

村崎から離れて行動する前に聞いた話によると、悠斗はまだ首輪を外してない。そんな状態で戦闘禁止エリアに籠るなんて、あいつも焼きが回ったかしらね？

私は新しく見つけた武器と前から持っていた武器を床に並べて、そ

の中から使えそうなものを選んでいく。

ナイフはより殺傷性の高いものに換えて、腰には拳銃1本、手榴弾5つをぶら下げ、右肩からはライフルを、左肩からはマシンガンを下げる。

「・・・さすがにこれだけの量を一気に持ち運ぼうとすると、結構重いわね」

このままじゃ俊敏性はかなり落ちるけど、実際に戦う時はライフルもマシンガンも、使わない武器は床に置けばいい。相手は戦闘禁止エリアからまともに動いてこないんだから。

「悠斗、私が行くまでに神様へのお祈りは済ませておきなさいよね」

そして私は一直線に戦闘禁止エリアを目指して歩き出した。

直に私の進む先に1つのドアが見えてきた。

「あそこね・・・」

間違いないか私は再度地図で確かめる。

そして、そこは確かに村崎の地図に戦闘禁止エリアと表記されていた部屋だった。

「それじゃあまずは手榴弾であぶり出しと行こうかしら・・・」

そして私がライフルを床に降ろし、次いでマシンガンを降ろそうとしたところで、どういう訳か悠斗が部屋の中から出てきた。

「っ!？」

咄嗟のことで私は判断が遅れたが、動揺していることを悟られまいとなんとか声を出すことには成功した。

「あら、ちょうどよかったわ。今から戦闘禁止エリアに攻撃を仕掛けようと思っていたところなの」

「・・・何の用だ？ 今はお前に構っている暇などないんだが」

そこで落ち着きを取り戻した私は、降ろそうとしていたマシンガンを持ち上げ、それを構えた。

「大丈夫よ。すぐに終わるわ。あんたが死ぬことによつてね!」

そして、それを悠斗に向かって乱射する。

しかし、間一髪のところまで悠斗に戦闘禁止エリア内に逃げ込まれた。

「もう、逃げ足の速い奴ね・・・」

その後も少しの間、出てくれば撃つという警告の意味も込めて乱射した後、私は攻撃をやめた。

「さて、どうしようかしら・・・」

現段階で、状況は振り出しに戻った。唯一違う点は、悠斗が私の存在に気付いているということ。

「やっぱりさつき悠斗が姿を見せたときに即座に殺しておくべきだったわね」

ああもう、さつきは折角の悠斗を殺すチャンスだったっていうのに、あそこで動揺した私が憎いわ。

「それにしても、どうして悠斗は急に戦闘禁止エリアから出てきたのかしら？」

いくら考えても思い当たる節がまったくない。もしかして村崎と既に戦った後だったのかも考えたが、もしそうならばここで戦った跡があってもおかしくないはず。わざわざここから離れた場所で戦うなんて無駄なことはいらないだろう。それに、村崎が私より先にここに来たとは考えにくい。いくら地雷拡張機能があるとはいえ、私だって3階から4階までは一直線で来たし、武器探しも順調に終えられたのだから。

「……まあいいわ。そつちに部屋から出てくる気があるなら、私は悠斗が痺れを切らすまでここで待たせてもらおうよ」

私はマシンガンを構えたまま、足音を立てないようにしながらゆっくりと部屋へ近付く。

次に悠斗がドアを開けたとき、ドアをこつち側に全部開かせようと思ったのだ。そうすればドアを弾除け代わりにされなくなり、悠斗に思う存分鉛玉を叩き込める。

しかしこの作戦は失敗に終わった。私がまだドアへの道を半分も歩いていないところで、ドアが再び開いたのだ。

「もう、早すぎるわよ！」

私は愚痴りながらも、素早くマシンガンを乱射する。しかしドアはまだ半開きにも満たない状態で、肝心の悠斗の姿はそこにすっぽりと隠れていた。

そこで私はマシンガンを乱射しながらもドアに駆け寄ろうとした。

その途中で視界の端に何かが映った。そしてそれは、私が確認するよりも早く弾に当たって破裂した。

直後、激しい光と鼓膜が破れるかと思うほどの爆音が私の感覚を激しく狂わせる。

「うあっ!?!」

私は思わずマシンガンから手を離して両手で目を覆う。

その直後、私は肩を打ち抜かれた。

「あああああああ!!!!」

思わず叫び声を上げる。しかし攻撃はそれだけでは終わらなかった。

次いで2発目の弾が今度は私の左肩を貫通する。

撃ち抜かれた右肩を抑えていた左手に力が入らなくなる。

そして3発目、力が入らなくなって膝をついた私の額に弾が命中した。

．．．

悠斗は急遽予定を変更して、戦闘禁止エリアを出る支度をしていた。

なぜかと言えば、少し前に悠斗のもとに組織からメールが来たのだ。

その送られてきたメールの本文には『ゲームマスターが死んだ。今からはお前がゲームメイクをしろ』とだけ書かれていた。

「ちっ、面倒くさい役回りがきたな．．．」

とは言え、これを無視するわけにはいかない。そんなことをしたら組織から消されかねないからだ。

「まったく、今回に限ってこんな時に死んでくれなくてもいいのによ」

愚痴りながらも、俺は今いる4階の戦闘禁止エリアから出る支度を整えた。しばらくどうするか考えた結果、現状確認のために一旦コ

ントロールルームへ行こうと考えたのだ。

これがゲーム開始からそれほど経っていない時なら歩きながら確認してもいいのだが、既に開始から1日経っているため、多くのプレイヤーが強力な武器を持っており、こちらの姿を見た瞬間に攻撃を仕掛けてくる奴も少なくはないだろう。そんな中を暢気に歩いて確認などしてられない。

そして、俺が支度を整えて戦闘禁止エリアから一步出た瞬間、俺は早速そんな奴を見つけた。

「あら、ちょうどよかったわ。今から戦闘禁止エリアに攻撃を仕掛けようと思っていたところなの」

通路の先にはマシンガンを両手で持った姫宮がいた。

「・・・何の用だ？　今はお前に構っている暇などないんだが」

「大丈夫よ。すぐに終わるわ。あんたが死ぬことによってね！」

姫宮がその手に持ったマシンガンを乱射してくる。

俺はその直前にドアを閉めて、戦闘禁止エリア内に非難した。

ドアに何発もの銃弾が当たるが、さすがにマシンガン程度では貫通はされない。

「しかし、まずいことになったな。このまま外に居座られると外に出られない。なんとかして退かさないと・・・」

こちらにも武器はあるのだが、いかんせん俺がいる場所は戦闘禁止エリアで、俺の首輪はまだ外れていないときている。

「しかもこの部屋の出入り口はここ1つ。まったく、待ち合わせ場所を戦闘禁止エリアなんかにするんじゃないかな。」「

待ち合わせ場所にここを選んだのには2つの理由があった。

1つは単純に大きくて地図で見たときにわかりやすいから。

もう1つは他のプレイヤーからの奇襲を防ぐことができるから。戦闘禁止エリアは他の部屋と比べて広く、奥にも部屋があるため、手榴弾を投げ込まれても奥に逃げて凌ぐことができる。

だが、これは俺が外に出ないことが前提だった。したがって、その前提がひっくり返ってしまった今では決して俺に対して都合のいい場所ではなく、それどころか今回のように一方的に攻められた場合だと反撃することすらできないので、かえって都合が悪い。

「さて、どうするか・・・」

あまり悲観しすぎても仕方がないので、この状況の打開策を考えることにする。

できることとしては、銃声が止んだところで一気に攻撃を仕掛けるか、相手の弾丸が尽きるまで無駄撃ちさせるかくらいなものだ。

早くこの状況を打破するためには前者だろう。それに相手は素人ではなく姫宮だ。そう簡単には弾を切らしてはくれないだろう。

そんなことを考えているうちに、通路からの攻撃が止んでいた。少しの間様子見で待っていたが、再び撃ってくる様子がなかった。俺は今考えたばかりの作戦を実行することにした。

まずは武器を手元に集め、その中から必要なものを準備する。

次に、ドアに手をかけて、素早く少しだけ開ける。

やはりと言つべきか、俺がドアを開けた直後に姫宮からの銃撃が再開される。

しかしそれらは、半分も開けていない扉の陰に隠れていた俺には当然当たらない。

そして、今度はドアの隙間からスタングレネードを通路に向かって投げた。

それはすぐに銃弾に当たって破裂し、激しい光と轟音を生み出す。

もつとも、俺自身は耳栓と遮光ゴーグルをあらかじめ身につけていたため、それらの影響はほとんどない。そして、音のピークが過ぎたところで、俺は姫宮が未だマシンガンを乱射しているかどうかを確かめるために耳栓を外す。しかし、俺の耳にはマシンガンが乱射される音は聞こえてこなかった。おそらく姫宮はあの閃光と轟音を何の覚悟もなしに直で受けたため、今頃は目や耳の強烈な痛みにやられているのだろう。

「よし、やるか・・・！」

俺はドアを開け放って戦闘禁止エリア内から一歩出る。姫宮は予想

外にドアに近い位置にいた。こりやあもろに影響を受けたな。

俺はかねてから手元に準備しておいたライフルで姫宮の右肩を的確に打ち抜く。

「あああああああ！！！」

肩を打ち抜かれた姫宮が痛みに耐えかねて悲鳴を上げた。

だがこれで満足してはいけけない。完全に無力化しなければ、感覚が戻った後に不意打ちされる可能性がある。

次は自由に動くもう片方の腕を封じるために、左肩を打ち抜く。

最後に、死なない程度に腹部を狙う。そしてその後、止血をして戦闘禁止エリアに寝かせておく予定だった。

しかし、力が抜けたのか姫宮はそこで跪いた。

「なっ！？」

慌てて発砲をやめようとしたが、指は既に引き金を引いていた。

パンッ！

弾は姫宮の額に穴をあけた。見ただけでわかる。即死だ。

「・・・くそっ」

俺は死体から目を逸らす。

もう何度もゲームを経験していたが、未だに自分の手で誰かを殺すと気分が悪くなる。それも殺すつもりではなかった相手を殺すと尚更だ。

俺は姫宮の死体をそつとその場に整えて寝かせ、PDAと使えそうな武器だけ残し、残りを誰かに利用されないようにその場で無駄打ちしたり、戦闘禁止エリア内に隠したりした。

「・・・行くか」

それらすべてを終え、俺はその場を後にした。

第15話A 道連れ

4階に上がって武器集めをしている時、オレはいくつもの銃声を聞いた。

「誰かが戦っているのか・・・？」

しかし、それにしても音の間隔がおかしい。ほぼ等間隔でしか聞こえてこないのだ。撃ち合っている様子もなく、まるで壁に向かって1人撃ちをしているような感じた。それに止んだと思ったら今度は別の銃声が聞こえてくる。

武器の扱いの練習をしているのかと思っただが、それにしても音の間隔に乱れがなさすぎるし、もしそうならば武器を統一して練習するだろう。わざわざ違う武器に手を出す必要なんてないはずだ。

「・・・確かめてみるか」

オレはあまり手に入らなかったわずかな武器を手に、音のする方へ向かった。

音はオレがそこへ着く前に既に止んでいたが、その跡はしっかりと

残っていた。

壁のところは無数の銃弾の跡がついており、弾丸の装填されていない銃がごろごろと転がっている。

そして、そこから少し離れたところに姫宮が仰向けに倒れていた。

「撃っていたのはこいつか？」

しかし、近くで見た姫宮は両肩と額から血を流しており、とても銃を持てる状態ではなかった。

自殺したとも考えにくいだろう。もしそうならば、わざわざ両肩を打ち抜く必要性を感じられない。

「なら、姫宮を殺した奴がこれをやった可能性が高いな」

おそらく、こいつを殺して武器が大量に手に入っただけがいいが、持ち運ぶには多すぎて持て余してしまったのだろう。

オレが地図でこの場所を確認すると、ちょうど戦闘禁止エリア手前だった。

「なるほどな。オレを差し置いて1人で榊原と戦って、その結果殺された」

姫宮の実力がどれほどのものだったのかは知らないが、向かい合った感じではそれほど弱そうな感じではなかった。どうやら榊原は、ただ単に武装しただけでは倒せないほどの奴のようだ。

「ということ、これをやったのは榊原か？」

戦闘禁止エリアの手前ということもあり、その可能性はかなり高いだろう。しかし、そうすると今度はまた別の疑問が生じる。

榊原の目的は姫宮と戦うことではなく、オレと戦うことだったはずだ。にもかかわらず、オレと戦う前にこれほどの武器を捨てたことになる。

それはそれで意味が分からない。オレたちの戦いに遠距離武器は使用禁止などの制限を付ける気か？

「とりあえず、戦闘禁止エリアへ行くか。そこに榊原もいるだろうしな」

そしてオレは部屋の前まで行き、ドアを開けた。

「ん、やあ。ようやく人に会えたよ。・・・おや？ 君はまたいい顔をしているね」

しかし中にいたのは榊原ではなく、まだ会ったことのなかったプレイヤーだった。

背が高く、上下共に暗めの色の服を着ている。

「・・・ここに誰かいませんか？」

相手は確実に年上なので、オレは敬語で対応する。

「ここにかな？ いや、いなかったね。なにせ、私が初めて会った

参加者が君だからね」

「初めて・・・？ もう2日目に入っているというのに、今まで誰にも会わなかったんですか？」

「そうなんだ。1日目から首輪解除のために館内を走りまわされてつてね。少し前に首輪の解除が終わって6階から下りてきて、今はここで休んでいたところさ」

言われてみると、男には首輪がない。2日目にしてもう外れたようだ。

「悲鳴や銃声が聞こえたから誰かイイ男でもいるのかと思ってここに来たのだが、いたのは部屋の前で死んでいた女性だけ。君にこの悲しみがわかるかい？ イイ男がここにいなかったときの悲しみが」

いや、わからない。わかりたくもない。なぜにイイ男限定なんだ？ というか聞こえてきた悲鳴はどちらかと言えば絶叫だろう。街で偶然アイドルを見かけた女性じゃないんだぞ。

そんな馬鹿らしい事を考えていると男が再び話しかけてきた。

「そういえば自己紹介がまだだったね。私は坂井宗吾さかいしゅうごというんだ。君は？」

「オレは村崎齋です」

「ふむ、村崎君か。それでは、これからよろしく頼むよ、村崎君」

「え？ 何が・・・!?」

気が付くと坂井さんが目の前にいた。

速い！ いつの間に・・・!?

そして次の坂井さんの行動。坂井さんはいきなりオレを抱きしめた！

「うおっ!?!」

オレは慌てて坂井さんの腕の中から逃げようとしたが、その力は万力のように強く、オレが腕の中で暴れてもまったく緩まなかった。

「まあまあ、そう暴れてはいけないよ。ほら」

坂井さんがまだドアの外にいたオレを戦闘禁止エリア内に引き込む。

うそだろ、おい・・・

そしてオレを絶望に叩き込む警告が流れる。

『あなたが今いる場所は戦闘禁止エリアです。ここで戦闘を行った場合、首輪が作動するのでお気を付けください』

無闇に暴れると戦闘行為ととられる可能性があるのです、オレはこれ以上抵抗することができず、ただ坂井さんにされるがままになっていた。

「ふむ、肌が若干荒れているね。ちゃんと夜は寝ているかい？」

「さ、さあ……どうだったか……」

や、やめろ、それを頼ずりで確かめるなあ!!

その時、幸か不幸か背後で戦闘禁止エリアのドアが開く音がした。

「さ、坂井さん、誰か来たみたいですよ!」

オレの言葉を聞いて、坂井さんはオレの頭越しに入ってきた人物を確認する。

「ん……、なんだ女性か……。悪いね、今取り込み中なんだ。入ってくれても構わないが、邪魔だけはしないでくれたまえ」

そして、そのすぐ後に閉まるドアの音。こちらに向かってくる足音は聞こえない。これは、もしかして……

「おや、どこかへ行ってしまったようだね。では斎君、続きといこうか」

いきたくねえ! というかやっぱり見捨てられた!

いや、正直オレも目の前でこんな光景が展開されていたら逃げ出したくはなるが……。そこは助けてくれよ、通りすがりの誰か……

「ふふふつ、最近君のようなナイスガイになかなか出会う機会がなくてね、少し飢えていたところなんだ」

耳元でそうささやかれて、オレは背筋がぞぞぞとじた。

くそっ、このままだとオレの貞操がこんな男に……。フツ特に初めてがどうか意識したことはなかったが、いざ失うとなると何となくだが名残惜しいな……。じゃなくて！

危うくどこかへ行ってしまいそうだった意識を何とか取り戻したところで、オレは妙案を思いついた。

「そ、そうだ、そういえばこの建物の中でオレよりももっとナイスガイな男の人を見ましたよ！」

「なに？ それは本当かい？」

よし、食いついた！ 後はこのまま押ししていけば……

「ええ。榊原悠斗って奴です。オレよりも背が高く男前でした」

「……なるほど、ではその悠斗君を探し出してから、2人同時にいただくことにしようか。その方が私も萌えるしね」

2人同時エ……。オレは候補から外れないのか……。まあいい。この伸びた執行期間中にいろんな意味でこの人を不能にしてしまえばいいだけだ。

しかしこの男、かなり強いように思われる。身のこなしに無駄はなく、さきほどオレを抱きしめたときの力もかなりのものだった。榊原を探し出して殺すのに役に立つかもしれない。

この上なく不快だが、どうやらオレに好意のようなものを感じているようなので、裏切りの可能性は低いだろう。

榊原を見つけ次第この人をけしかけて、2人が・・・うつぶ、想像しただけで吐き気が・・・。ふ、2人が抱き合っているとこゝろをまとめて射殺すればいい。そうすればオレのハッピーエンドだ！

心の中でガッツポーズを決める。後は榊原を見つけるだけ。一気にゴールへの道が開けた気がするな。

「なら、これから一緒にそいつを探しませんか？ 多分そいつは上に行ったと思うので、オレたちも上へ行きましょう」

「また上に？・・・ふむ、しかしイイ男のためなら仕方がないな。よし、それでは早速出発するでしょうか、斎君」

坂井さんがこつちに向かつて茶目っ気たっぷりに片目を瞑る。

オレはなんとか吐きそうになるのを堪え、何食わぬ顔をして返事をした。

「そうですね。早ければ早いほどいいでしょうから、今から行きましょうか」

こうしてオレはなんとか自らの貞操を守り、同時に榊原を効率よく倒す算段を立てることに成功した。

・・・榊原、殺してやりたいほど憎いお前だが、今回だけは同情してやる。せいぜい美形に生まれてしまったことを憎むんだな。

村崎を眠らせた後、優木は4階へ向かい、しばらく4階を探索した後、現在は戦闘禁止エリアを目指して歩いていた。

そして部屋の手前まで来たとき、他のプレイヤーと同様に姫宮の死体を発見した。

「……こりやまたひどくやられてるね」

両肩と顔を撃たれた姫宮を見て、あたしはそう呟いた。

誰にやられたのかははっきりしないが、姫宮の性格を知っていたあたしは、誰にやられてもおかしくはないと思った。

「まったく、アンタが敵を作りやすい性格してるから、こんなことになるんだよ……」

そう言いながらも、あたしは姫宮の両手を胸の上で組ませてやる。

「それで、こいつを殺した奴は戦闘禁止エリアの中かい？」

あたしはさきほど見つけた『Tool-ColliderDetect
ion』、首輪探知を作動させる。

結果、戦闘禁止エリア内には反応が1つだけあった。

「・・・誰かいる。まあ犯人かどうかは別として、もしかしたらこの惨劇のことを知ってるかもしれないね」

とりあえずその誰かに話を聞こうと思いい、あたしは戦闘禁止エリアへのドアを開けた。そして、言葉を失った。

部屋の中には知っている人物が2人、男同士で抱き合っていた。

村崎があたしが入ってきたのに気づき、坂井に誰か入ってきたと伝え、坂井がこつちを向く。

あたしは咄嗟に構えた。コイツが危ないことは重々承知だ。ここに来る前も何度か会っているのだから。だから、もしかして今回も・

しかし、あたしの姿を確認した坂井の口から出た言葉は意外なものだった。

「ん・・・、なんだ女性が・・・。悪いね、今取り込み中なんだ。入ってくれても構わないが、邪魔だけはしないでくれたまえ」

まるであたしなんて眼中にないといった感じの投げやり感たっぷりな言葉。それに、どうやらあたしを見逃してくれるらしい。

あたしは何も言わず、そつとドアを閉めた。

さて、次に行こうか。

戦闘禁止エリアから大分離れたところで、あたしはようやくさっきの状況のマズさに気付いた。

「そういえば、戦闘禁止エリアから首輪の反応は1つしかなかったね。ということは……」

そして、今度は千島が持っていたPDAの画面を確認する。

そこには『残り7人』と表示されていた。あたしが村崎を眠らせたときから2人減っているが、村崎の首輪解除までの残りの人数はあと3人だった。ということは、首輪が外れているのは坂井の方だということになる。

「こりゃあ、このゲームで一番厄介なの首輪が外れてるんじゃないかい……？」

ホモで有名なアイツは
あの坂井宗吾とえば、名の知れた殺し屋だ。あたしも噂くらいは耳にしたことがあるし、実際に何度か見たことはある。……まあホモだということはいさつき確認したばかりだけだ。

「それがこのゲームに参加してるなんてね……」

これからはより一層気を引き締めていかなければならない。もはや戦闘禁止エリアも安全とは言えなくなってしまったのだから。

あたしは今まで以上に警戒をしながら、4階の探索に戻った。

第16話A 攻略への糸口

オレと坂井はなぜか4階の戦闘禁止エリアにいなかった榊原を見つけて出すため、5階を目指すことにした。

「ふむ、その悠斗君がどれほどの男か気になるね。斎君もそうだろう?」

いや、それはもういい。それに、そもそもオレは既に榊原と会っている。今更気になるも何もないだろう。

坂井さんはさつきから何度もこれと同じようなことばかり言っている。いい加減聞き飽きてうんざりだ。

「それにしても・・・」

坂井の言葉が途中で止まった。

「・・・どうかしたんですか?」

何かあったのかと思い、オレはそう訊ねた。

「静かに。誰かいるようだ」

いままでの腑抜けた声とは違い、緊張感のある声で坂井さんがそれだけを告げる。

オレはそれに従って黙った。オレには何の音も聞こえなかったが、ここまで真剣な表情をしているのを見ると、坂井さんには本当に音が聞こえたのだろうか。

そして、少ししてオレにもその音が聞こえてきた。

何かが床をひつかく音・・・、何かを引きずっている？

音は徐々に近付いてきて、それと共に足音もはっきりと聞き取れるようになった。

間違いない。誰かが何かを引きずりながら歩いている。

「・・・どうするかい？ もしこれが悠斗君なら、会わない手はないよ」

「いや、きっと榊原ではないと思います。あいつはこんな小さいことをして自分を大きく見せようなんてことはしないでしょから」

「なるほど。ではどうしようか。このまま避けて通るのも1つの手だよ？」

オレは接触した時のメリットとデメリットを考える。

今のところ足りない情報は榊原と優木の居場所だけだが、これからここに来る奴がそれを知っているだろうか？ いや、きっと知らないだろう。

しかし、ここで相手と接触して戦闘になると、坂井さんの実力を知ることができるかもしれない。この人が戦闘でどれほど役に立つの

か、見ておいて損はないだろう。

以上がメリットで、今度はデメリットを考えてみる。

最悪なケースは出会った相手が出鱈目に強い場合。もう1つ、相手も坂井さんと同じように一度6階に行っており、そこで強力な武器を手に入れて下りてきていた場合。

このどちらかが当てはまるのならば避けた方がいいな。

だが、よく考えると前者である可能性はないことがわかった。オレは既に他の12人との接触を終えていたのだ。

そして、今ここに来ようとしている人物にも見当がついた。おそらくオレが3階へ上がるときに気絶させたあいつだろう。そしてそう考えると、あいつがオレを追い越して6階まで行って帰ってきたとは思えない。

「坂井さん、おそらくここに来る奴はただのクズです。どうしますか？」

「そうだね・・・、殺しておこうか」

オレはその言葉に一瞬返答に詰まった。この人、しれっと殺すとか言ったな。

それに、初心者によくあるようなぎらついた感じがない。かなりの数をこなして慣れているのか、それとも人殺しをただの作業としか思っていないのか。どちらにせよ、この人はオレ1人で手におえるような相手ではなさそうだと改めて認識する。

「・・・悪くない考えですね」

オレの返答に坂井さんは少し驚いた顔をする。

「ほう、君もなかなか鬼畜だね」

「べつに、首輪解除のためにそうする必要はただけです」

そう言ってオレは自分の4のPDAを見せ、その解除条件を教える。

「ほう・・・、これはまた、残酷なものを引いたね」

「それで、殺すならとどめはオレに刺させてもらえませんか？」

「構わないよ。私が殺そうと君が殺そうと、生存者が減ればそれでいいからね」

生存者が減ればいいということは金目当てか？ やはりそういう人もいるのか。

「もうすぐ来る。さあ、殺す準備をしようか。私は適当に舞台を整えておくから、タイミングよく撃つてくれたまえ」

そう言って坂井さんは音を立てずにするすると移動する。オレはその場で銃を構えた。

そして、直に俺の予想通りの人物が角を曲がってきてその姿を現す。同時に坂井さんが飛びついて、そいつの手から引きずられていた日本刀をはたき落した。

「なっ！？ テメ・・・がはあっ！」

しかし最後まで喋らせてもらえないうちに坂井さんのアップパーをもるに顎にくらっ。

「さあ斎君、殺りたまえ」

「言われなくても」

オレは相手のながら空きの胸に向かって躊躇なく引き金を引いた。

銃声が鳴った直後に相手の体がびくんと痙攣する。

「ほう、一発で胸に的確に当てるとは、なかなかやるね」

「いえ、的が大きくて近かったただけですよ」

実際に何度か銃を触ったことはあったが、撃つたのはここに来てからが初めてだ。

PDAを確認すると、首輪解除までの残り人数が1人となっていた。

「成功かい？」

「ええ、うまくいきました」

後は最低でも榊原を殺せば、首輪解除はできる。

「そうか。では、次へ行こうか」

その前に、とオレは坂井さんに言って、殺した相手からPDAと武器を奪う。PDAはクラブの8だった。

それらを手にしたところで、オレたちは神原の搜索に戻った。

・
・
・

その頃、5階では優木が神原に追いついていた。

神原の姿を見つけたあたしは、その背に向かって声を掛けた。

「神原！ ちょっと待ちな！」

「っ!?!?」

こつちを振り向いた神原の顔は驚きに満ちていた。

「・・・おい、なんでお前が生きているんだ？」

「は？ なんでアンタの中ではあたしが死んだことになってるのさ？」

「いや、ゲームマスターが死んだというメールが組織側から届いた

「からな、お前が死んだものだと思っていただけだ……」

「ああ、なるほどね。サブマスターはそういうシステムになってんのかい。」

「……。ゲームマスターの千島は確かに死んだよ」

「千島がゲームマスターだと？ ……驚いたな。俺はてっきりお前かと思っていた」

「なんだ、アンタ知らなかったのかい？ あたしはもう組織をやめて、今は逆に組織に目を付けられて追われているところだよ」

「追われている？ 何かやらかしたのか？」

「いや、特に何かをしたわけじゃないけどさ、ただ組織の情報を持っているっただけで、アイツらにとっては爆弾みたいなもんだからね」

「なるほどな。言われてみれば確かにその通りだ」

「そこであたしはそれまでの話を打ち切って、本題に入った。」

「それよりアンタ、村崎に彰が死んだことを伝えるなんて、一体どういうつもりだい？」

「ああ、そのことが。村崎から聞いたのか？」

「それに対してあたしは頷く。」

「・・・お前、村崎のPDAが何か知っているか？」

「クラブの4、じゃないのかい？」

「なんだ、知っているんじゃないか。それなら俺が何をしたいのかもわかってるんじゃないのか？」

そりゃあわかってるさ。アンタが村崎に殺されることで、村崎の首輪解除に貢献しようとしていることくらい。でもね、それじゃダメなんだよ。

「アンタのやり方は間違ってる」

「そう思うか？・・・まあ、お前がそう思うのならそうかもしれない。だが、俺にはこれ以上の良策が思いつかなかった。どうせ自分が助かるために誰かを殺すなら、それに対する抵抗が少しでも小さい方が気が楽ってものじゃないか？」

「だとしても、アイツはあと3人殺さなきゃいけない。殺す人数がたかが1人減ったところで、大して変わりはないんだよ」

「じゃあ一体どうしろというんだ？俺にはこれしか思いつかなかったんだ」

榊原が少しいらついた口調でそう言い捨てる。

「あたしをコントロールルームまで連れて行ってくれたらどうにかなるかもしれない。手伝ってくれないかい？」

「首輪の作動を制御するのか？そんなことができるのか？」

「さあね。それはやってみなきゃわからない。なにせこれを試すのは今回が初めてだからね」

そう言っただけで、あたしは肌身離さず持っていた小さなチップを榊原に見せた。

「それは？」

「コンピュータウイルスみたいなものさ。細かい説明はしてもどうせわからないだろうから省くよ」

「・・・わかった。試してみる価値はあるだろう。やってみようじゃないか。どうせ失敗したところで失うものは何もないんだ」

「話が早くて助かるよ。それじゃ早速コントロールルームに向かうじゃないか」

そして、あたしは悠斗に案内されながら5階を抜け、コントロールルームへと向かった。

ゲームは既に2日目が終わって、最終日に突入していた。

第17話A 介入者

榊原と優木がコントロールルームへと向かっている途中、唐突にそれは起こった。

いきなり俺たちのPDAが鳴り始めたのだ。

「なんだ？」

何事かと思いPDAを取り出すと、PDAの画面がさっきまで見ていたものとは似ても似つかないものに切り替わっていた。

その画面は普段よりもきらびやかに飾られており、画面中央には『エクストラゲーム』と書かれていた。また、その文字の下にはプレゼントのように包装された箱があり、その箱の表面には『スタート』と記されてる。

「エクストラゲーム？ なんだい、それは？」

「いや、知らないな。今までにはこんなことはなかったぞ」

無闇にボタンを押すのは危険かもしれないと思い、しばらくそのまま放置していると、唐突に間の抜けた感じの音楽が流れ出し、それと同時にカボチャの怪人の姿をしたCGキャラクターが画面の端から現れて中央まで移動した。

さらに見続けていると、今度はそのカボチャの怪人は『スタート』と書かれた箱を指さし、その顔の横には『Touch!』と書かれた吹き出しが表示された。どうやら早く触れてほしいらしい。

「・・・どうする?」

「PDAが操作できない以上、触れてみるしかないんじゃないのかい?」

「それもそうだな」

このままではコントロールルームまでたどり着くことができないので、俺たちはその誘いに乗ってみることにし、『スタート』を画面をタッチした。

すると、画面は一際豪勢なものに切り替わり、画面中央にいたカボチャの怪人が先ほどより少し大きなサイズで映し出され、喋りだした。

『お楽しみ! エクストラッゲームッ!!』

その声は姿に似合わず甲高く、合成音声であるということも相まって、少し聞き取りづらかった。

ただ、画面にそのカボチャが喋った言葉が画面に表示されるようになっていたため、聞き間違いや聞き損いをする心配はなさそうだ。

『やあ! ぼくはジャックオーランタンのスミス! よろしくね!』

スミスと名乗ったカボチャの怪人は、大げさな身振り手振りをしな

がら話を続けた。

『さて、いよいよゲームも大詰めだね！ みんな、元気にしてるかな？』

そう言っつてスミスはこちらに耳を傾けるしぐさをするが、そこに穴なんてなかった。

『うんうん、生き残ってる6人のみんなはほとんど怪我もないみたいだね。いやー、よかったよかった！』

「何がよかった、だよ・・・」

優木がそう呟く。

『何がよかったかって？ それはこれからぼくが言うことを聞けばわかると思うよ』

スミスがまるでこちらの声が聞こえたかのように話を進める。いや、実際に聞こえているのかもしれない。

『みんなは今ちょうど2人1組で行動してるよね。そこで今からは、その組でゲームに参加してもらおうよ』

「2人1組でゲームに参加・・・というと、俺は優木とペアということになるのか」

「そうなるんだろうね」

『そして、ここからがゲームの中身。今からみんなには殺し合いを

してもらおうと思うんだ!』

「なっ!?!? 殺し合いだと!?!?」

『そう。そしてこの殺し合いの勝者にはなんと! ゲームの賞金とは別に20億円をプレゼント!』

「・・・勝者?」

「ん、それがどうかしたか?」

「いや、表現がちよっとね・・・」

『お? いいところに気が付いた人がいるね。そう、ぼくはこの殺し合いの『勝者』と言ったんだ。つまり、このゲームは別にペアで勝ち残る必要はないんだ。最後まで生き残ったチームの勝ちで、勝った人、もしくはチームのメンバーはその場で首輪の解除条件を満たしたことになるよ』

そこでスミスは人差し指を立てた手を前にビシッと突き出した。

『ただし、このゲームにはいくつかのルールがあるんだ。それを守らないと、館内の警備システムから一斉攻撃を受けるから注意してね。まず1つ目、このゲームでは移動できる場所が制限されるよ』

そして、スミスがどこからか館内の地図を持ち出して、その範囲を示した。

『5階、6階、共に赤い線で囲まれているところが行動できる範囲だよ。これはみんながPDAで地図を開いたときにも表示されるか

ら、そこからはみ出ないように気を付けてね』

「・・・やられたな。コントロールルームはこの範囲外だ。付け加えると、そこへつながる道も範囲外になっている」

「つまり、このゲームはあたしたちをそこへ向かわせないためのものってことかい？」

「おそろくな」

スミスの説明はまだ続く。

『次に2つ目。チーム内での殺し合いはNG。ただし、他のチームと協力するのはオッケー。そのかわり、勝ち残れるのは1チームだけだから気を付けてね』

「協力すれば今度はどちらが先に裏切るかが恐ろしく、結局互いに潰しあうってことになるな」

『そして3つ目。このエクストラゲーム中でも今までの解除条件で首輪を解除できるよ。そうすれば当然ルール破りのペナルティもナシ。要は今まで通りのゲームに戻るってことだね。だから、このエクストラゲームに終わりはないよ。しいて言うなら、生きているプレイヤーみんなの首輪が解除されたところで終了ってことだね。それじゃあみんな、頑張ってるね！ 健闘を祈ってるよ！』

そして通信が切れた。

「くそっ、やられたな・・・」

「まずはアンタの首輪の解除が最優先だね」

「俺のだけじゃないだろう？ お前のも外さないと、俺ではそのチップの使い方なんてわからないぞ」

「あたしのは時間の問題だよ」

そう言っつて、優木はポケットから3のPDAを取り出した。

「っつて、3！？ それっつて・・・なるほど、JOKERか」

「そういうこと。そしてあたしのPDAは6で、解除条件は『JOKERの機能が5回以上使用されている』こと。これは4回目さ」
なるほどな。あとは時間の問題っつてわけか。

「なら、まずは協力者を探すべきか」

「それがアンタの首輪解除につながるならね」

「ああ、俺のPDAは3だ。解除条件はそっちでわかるだろう？」

優木がJOKERを取り出ししてその条件を見る。

「自分以外の首輪とPDAを合わせて7つを半径2メートル以内にね。今いくつ持つてるんだい？」

「俺が持っているのはPDAが2つだけだ」

「あたしはPDAが2つと、まだ外れてない首輪が1個。っつてこと

は、あと1人協力者がいるね」

「そうなるな。それじゃあ、早速動くとするか」

そう言って歩き出そうとした俺だったが、優木に止められた。

「ちょっと待ちな。榊原、アンタに言っておくことがある」

「・・・なんだ？」

振り向いた先にあったのは、真剣な表情をしている優木の顔だった。

「どうかしたのか？」

もう一度そう訊ねると、優木は話し出した。

「あたしの首輪探知に引っかけた方のうち、遠い方に向かうよ」

「なぜだ？ と一応聞いておこう。まあ聞く前から答えはある程度予想できるが」

「その2人が村崎と坂井だからさ」

「マジかよ・・・。村崎の奴、坂井と組んでるのか・・・」

これは本当に厄介だ。正直坂井だけでも勝てるかどうかわからないのに、そこに村崎まで加わるとは・・・

「わかった。なら、もう一組の方に行こう」

そして、俺たちはまだ4階から5階へ上がる階段付近にいるプレイヤーたちに協力を求めに行くことにした。

・ ・ ・

スミスのその声は榊原を探して5階を進んでいた斎と坂井の元にも届き

「エクストラゲーム、か・・・」

「ふむ、まあ特に何が変わったという訳ではないね。今まで通り進んでいけばいいのではないかい？」

オレの呟きに坂井さんが返事をする。

「確かにそうですね。逆に探す範囲が狭くなってちょうどいいくらいですよ」

だが、少々厄介なことになった。このゲームのせいでオレは坂井さんを殺すことができない。少なくとも首輪を外すまでは。

榊原を殺せば首輪を外すことができるが、それと同時に坂井さんを殺してしまえばオレの首輪は作動してしまう。

「……とりあえず、この階にいると思われる方の組との遭遇を目指しましょう」

エクストラゲームによって指定された範囲には特徴があった。

指定された範囲のうち、1つは4階から5階への階段と5階から6階への階段をほぼ一直線で結ぶ経路、もう1つは6階の中心付近から少し右へ行つたところから5階への階段までの経路、そして最後の1つは今オレたちがいる地点から2つの階段までの経路を中心に広がっていた。

「おそらくそれぞれの道の先に他の組がいるはずです。その組の移動先を考えながら行動すれば、遭遇することは難しくないでしょう」

そして、十中八九その組に榊原はいない。よって、ここで1人殺して首輪を外した後、予定通りに事を進めればいい。

「なるほど。言われてみればそんな風に思えるね。ならそうしようか」

そしてオレと坂井さんは、まずは4階から5階への階段付近へ向かうことにした。

・ ・ ・

そしてようやく5階に着いたばかりの詩織と紫音の元にも届いた。

「エクストラゲーム・・・」

それは過去に二度このゲームに参加したことのあるあたしが聞いたことのないものだった。

「紫音、これからどうなるのかしら・・・」

横にいたお姉ちゃんが心配そうに話しかけてくる。きっと解決策はないとわかっていながらも、それでも不安で話を振らずにはいられなかったんだろう。

「うーん・・・、とりあえずこの赤枠の範囲内から出ないように気を付けていけばいいんだけど・・・」

だけど、指定された道はあまりにも一本線過ぎる。これじゃ他の人と会った時に、満足に逃げることもできない。

更にその太さもせいぜい道5本程度。どこかに隠れてやり過ごすにしても、ちよっと探されればすぐに見つかってしまう。

他の組と協力するっていうのも手だけど、その場合、常に裏切りを心配しなきゃいけない。

「とりあえず6階へ行こう」

「6階？ どうして？」

「6階にはいっぱい罠があるから、それであたしたちの身を守れるの」

あたしはAのPDAをお姉ちゃんに見せる。

「ああ、そうだったわね」

「行こう、お姉ちゃん。それに、ひよっとしたら協力してくれる人がいるかもしれないよ」

「・・・そうね。他の人たちが全員敵とも限らないものね」

「うん、そうだよ。それじゃ、行こう」

そして2人は6階へ向かって歩き出した。

第18話A 偽りの協力

6階を下りて5階を歩いている時、唐突に優木が足を止めた。

「・・・誰か来る」

優木の声を聞いて、俺たちもまた立ち止まった。

耳を澄ませてみると、確かに前方からわずかに誰かの足音が聞こえる。

「相手も馬鹿じゃないみたいだね。ちゃんと足音を忍ばせてるじゃないか」

「なるほどな」

通りで気付かなかったわけだ。それにしても優木の奴、よくこんな小さな音を聞き分けたな。

俺の物言いたげな視線に気付いたのか、優木はこっちを向いて喋った。

「あたしはここを出た後に何度か襲われそうになってるからね。物音には特に敏感なのさ」

「まったく、お前は外に出てまでも経験を積んでるのかよ」

「好きでやってるわけじゃないんだけどね。生きるためには必要なのさ。それと、どうやらここに向かってきてるのはまだ誰かわかってない2人みたいだね」

PDAを弄った後、優木がそう言った。おそらく首輪探知を作動させたのだろう。

「そうか」

その言葉を聞いて、俺は少し気を緩めた。

「武器は持っておくだけにしておかないか？ その方が円滑に話を進められるだろう」

「それもそうだね・・・っと、無駄話はここまでだ。もうすぐここに来るよ」

だがこのとき、優木は大事なことを見落としていて、そして俺はその大事なことを知らなかった。

そして、通路の向こう側から相手が姿を現した・・・

・ ・ ・

「こっちは来なかったか・・・」

歩いて20分、オレと坂井さんは4階から5階へあがる階段のところまで来ていたが、そこに他のプレイヤーの姿はなかったし、途中で遭遇することもなかった。

「辺りに潜んでいる気配もないね。もうここからは移動してしまっているようだよ」

「・・・そうですか。なら、まっすぐに6階へ向かったんですね」

オレは6階へ通じる通路へ目を向けた。

「今から追いかけると、どのあたりで追いつくでしょうか？」

オレがそう訊くと、坂井さんは少し考えた後に答を出した。

「ふむ、そうだね。相手が私たちと同じ速さで歩いているとすれば、軽く30分も走れば追いつけると思うよ」

「なるほど。なら追いかけましょう」

「わかった。そうしようか」

そしてオレたちは走り出した。

「……！ お姉ちゃん、後ろから誰か来る……！」

あたしは後方から聞こえた足音に気付き、お姉ちゃんに声を掛けた。

「えっ！？ ど、どうしましょう……」

「とりあえず隠れよ。誰が来るかわからないから」

「そ、そうね」

やっぱりこういう状況に慣れてないお姉ちゃんは動揺してしまう。

まあ、あたしが慣れてるっていうのが普通じゃないんだけど。

あたしたちはこっちに来る人たちが誰か確かめるため、近くの通路に身をひそめた。

好戦的な人じゃありませんように……

もしここで、3階であたしたちを襲ってきた人と遭遇したら、かなりまずいことになる。

あ、そういえば六巳さん置いてきたけど、大丈夫だったかな。さっきのカボチャのおぼけが残り6人って言ってたから、ひよっとしたらもう死んじやってるかも。

話を戻すと、今のあたしたちには、あの時にはあつた足止め用の壁がないってこと。幸いにもこの少し先にシャッターが仕掛けられてるから、それを利用してその場をしのぐことはできるかもしれないけど、あたしたちの行ける場所が限られてるから、すぐにまた見つかつちゃう。

直に通路の向こう側から2人の男の人が姿を現した。

あ、お兄ちゃん・・・

そこにいたのは村崎のお兄ちゃんと、背の高い知らない男の人だった。

「あ、村崎さん・・・」

あたしの後ろから通路の方を覗いていたお姉ちゃんがそう呟く。

「ねえ、出ていっても大丈夫だと思う？」

お姉ちゃんがあたしにそう訊いてくる。

「どうかな・・・」

あたしは正直、出ていかない方がいいと思った。お兄ちゃんたちは手に銃を握ってたし、身にまとっている気配は完全に人殺しが出すそれだった。

誰か特定の人を殺そうとしてるだけかもしれないけど、無差別に殺してる可能性の方が高い。

「とりあえず、しばらくこのまま様子見して・・・！」

その時、知らない方の男の人が喋り出した。

「齋君、このあたりに誰がいるようだよ」

「本当ですか？」

「ああ、人の気配を感じるんだ」

2人が周囲をきよろきよろと見回す。

まずい、このままここにいたらすぐに見つかっちゃう。

「お姉ちゃん、一か八かだけど、2人の前に出ていこう」

あたしはお姉ちゃんにそつと耳打ちする。

「だ、大丈夫なの？」

「このままここに隠れてたらずぐに見つかっちゃうだろうし、そう
なったら逃げ切れるとも思えないから。それならいっそ、こっちか
ら出て行った方が怪しまれずにすむと思うの」

「そ、そうね。ならそうしましょう」

お姉ちゃんは完全に思考が停止しちゃってる。いや、お姉ちゃんだ
けじゃなくて、あたしもきつとそう。もっとうしていいかわからな
い。

「お兄ちゃん……」

あたしはそう呼びかけて、2人の前に姿を現した。

「西条妹……、と、姉の方もか。まさかお前たちが生きているとはな」

あたしと、その後ろに一步遅れて立ったお姉ちゃんを見て、お兄ちゃんはその言った。

「ねえお兄ちゃん、あたしたち、協力できないかな？」

ここからはお兄ちゃんたちと協力して、なんとか首輪が外れる時間まで生き延びるしかない。

「協力？ ……そうだな、それもありがちな。坂井さん、ちょっと」

お兄ちゃんは少し考えた後にそう言って、そして一緒にいた男の人とひそひそ話を始めた。

しばらく話した後、坂井さんって人が頷いて、話し合いは終わったみたいだった。

「西条妹、こっちに来て」

「え……、うん」

今お姉ちゃんのそばを離れるのは不安だったけど、銃を向けられるから従わないわけにはいかない。

「紫音……」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん」

だからあたしは言われた通りにお兄ちゃんたちの方へ向かった。

だけど、あたしが歩き出すと同時に、坂井さんって人もこっちに向かって歩き出した。

「これからオレと西条妹、坂井さんと西条姉のチームに分かれて行動する。オレたちには通信手段があるから、片方でも裏切ればもう1人の命はないと思え」

「え!?!」

その言葉にあたしは思わず顔を上げた。

「ま、待ってよ、なんで別々に行動しなくちゃいけないの!?!」

「そっちの方が都合がいいからだ」

だけど兄ちゃんはその言うただけで口を閉ざしてしまった。詳しく話す気はないみたい。

「……うん」

ここで駄々をこねても立場が危なくなるだけ。それなら、少しでも生かしてもらえる可能性が上がるように従順になるしかない。

あたしがこっちに着いたのを確認して、お兄ちゃんは再び話し出した。

「……これからオレたちはある奴を殺しに行く。お前はそれに協力しろ」

「……うん」

お姉ちゃんを人質にとられてる以上、拒否権なんてないも同然。あたしは言われるがままに頷いた。

「ならこの通路をまっすぐ行け」

あたしは言われた通りに歩き出した。

「じゃあ坂井さん、頼みます」

「ああ、わかっているよ」

2人がそう挨拶を交わした後、お兄ちゃんがあたしの後ろについた。

そして、あたしたちはそのまま無言で5階を歩き続けた。

・ ・ ・

「ふむ、行ったかな」

斎君たちの姿が見えなくなったところで、私はそう呟いた。

「あ、あの、これから私はどうすれば……」

西条君、だったかな。随分と怯えているね。

「君かい？ 何もしなくていいよ」

「え？ それはどういう……」

しかし、その言葉は私の拳によって遮られた。

「っ、かはっ……」

西条君は私に殴られた腹を押さえてその場に崩れ落ちた。

「私たちに人質など必要ないんだよ。よって、君は今から死ぬだけでいい」

「そ、そんな……」

「大丈夫、一思いに絶ってあげるよ」

ふむ、大声を上げられることを危惧していつでも口をふさげる準備をしておいたが、どうやら今は空いた口がふさがらない様子だね。

その口から出ているのは咳とよだれ、そして血だけだった。

私は作業を始めるため、手に持っていた銃をしたに置き、代わりにナイフを手にした。

「私は2人を見失う前に尾行するという役目を斎君から任されたのでね。手短に終わらせてもらおうよ。・・・そうだね、最後に何か言い残すことはないかい？」

訊いたところで返ってくるのは命乞いだろうと思っていたが、その内容は妹に関するものだった。

「紫、音・・・、逃げ、て・・・」

その言葉を聞き届けた後、私は西条君の心臓にナイフを深く刺した。それと同時に、赤い色が彼女の服にパツと広がる。

そして二度ほど体が痙攣した後、彼女は動かなくなった。

「ふむ・・・、君の最後は立派だったとだけ、妹に伝えておくことにするよ」

私はもはやただの肉塊となってしまうた元少女に向かってそう言った後、足音を立てないようにしながらも、素早く移動して2人を追った。

第19話A 別れ

「嘘だろ、おい・・・」

俺は通路から現れた相手を見て、そう呟いた。

そこにいたのは、村崎と紫音だった。

「待たせたな、榊原。殺しに来てやったぞ」

殺気をむき出しにして、村崎が俺に銃を向ける。

「・・・おい優木、話が違うぞ」

俺は冷や汗をかきながら優木に不満を垂れる。

どういうことだ？ 村崎は坂井と共に行動しているんじゃないのか？ どうして紫音と一緒にいるんだ？

「・・・村崎、アンタ、坂井と一緒に行動してたんじゃないのかい？」

その言葉に、村崎の眉がピクリと動く。

「どつしてそう思うんだ？」

「どうしてって、戦闘禁止エリアで一緒にいたじゃないか」

「なるほどな、あの時オレを見捨てたのは優木だったか」

どうやらご立腹のようだ。優木の言葉は火に油を注いだ結果になってしまった。

「い、いや、見捨てたというか、邪魔をしないように配慮したというか・・・」

愛想笑いを浮かべながら、優木が手に持ったPDAを軽く振る。・・・何の合図だ？

目を凝らしてみると、そこには地図が表示されていた。

地図、ちず、チーズ・・・じゃなくて。

「っ！」

そこで俺は優木が何を言いたいのかに気が付いた。決して連想ゲームでチーズを思いついたから気付いたわけじゃないぞ。

優木が村崎の気を引いているのを確認して、俺は紫音の方に目を向けた。

てつきりこつちを見張っていたりするのかと思っていたのだが、紫音はずっと俯いたままだった。

なんだ、こいつらは同じチームじゃないのか・・・？

しかし、今はそんなことをじっくり考えている暇はない。

急いでポケットからPDAを取り出し、地図を開いた。

俺たちが歩き始めてから既に1時間は経っている。ということは、優木の首輪はもう外せるということだ。

なら、あとは場所さえ知ることができれば、優木1人でもコントロールルームまで短時間でたどり着くことができる。

本当は俺と一緒にいった方がコントロールルームまでの道を抜けるのが楽なんだが、俺の首輪が外れる可能性が一気に下がった今、贅沢は言っていられない。

俺は6階の地図を拡大して、画面左上にコントロールルームへの隠し通路の場所が、中央に階段が来るように調整した。

「優木！ 階段から地図の左上へ！ 機械に気を付ける！」

俺はそう叫んで、優木にPDAを投げ渡した。

「サンキュー榊原。それじゃあ、あとは任せたよ！ せいぜい殺されないようにするんだよ！」

そう言って、優木はエクストラゲームの指定範囲外のエリアに飛び出した。

「なに！？」

その行動に村崎が少なからず動揺した。

直後に、優木のPDAから進入禁止エリアにいるという警告が流れる。

「黙ってな」

優木はそのPDAを首輪に接続した。

すると、今度はPDAから首輪解除に成功した旨を伝えるシステムボイスが流れる。

「くそっ！」

優木が死なないということに気付いた村崎が銃を優木に向けようとしたが、それを俺が邪魔をした。

「おい、お前の相手は俺だろ？ よそ見るんじゃないよ」

威嚇するために銃を一度発砲する。

それは村崎の銃に当たり、銃口が優木から逸れた。そして、その間に優木は角を曲がって、その姿は見えなくなった。

「ちっ、邪魔しやがって。・・・西条妹、こいつを殺すのを手伝え」

その言葉に、紫音がわずかに首を縦に振る。そして、顔を上げて俺を見た。

「ごめんね、悠斗さん。あたしは悠斗さんと戦う。そして、きっと・・・」

それ以上紫音は続けなかった。ただ、彼女の目は俺を真正面から見つめ続けており、その目の奥にはゆるぎない決意が窺えた。

「紫音、お前……」

まだ首輪が外れていない今、紫音はその手に握った拳銃を撃って誰かに当ててしまうだけで死ぬことになる。

それなのに、その銃口は的確に俺をとらえていた。

「覚悟してね」

それが俺に向けて言った言葉なのか、それとも自分自身に向けて言った言葉なのかは俺にはわからなかった。そして、その言葉と同時に紫音は発砲した。

「馬鹿が、死ぬ気かよ……！」

俺はそれにかすりさえしないように、大きく右に避ける。と、そこには村崎が狙いを定めていた。

急いで身を逸らせたが、村崎が放った弾は俺の脇腹をかすめた。

「……さすがにそう易々とは殺らせてもらえないか」

「村崎、お前、紫音に何をやらせているのかわかっているのか？」

俺はそう言って村崎を睨みつけたが、村崎はそれを軽く受け流した。

「無理にやらせているわけではない。これはこいつの意志だ」

「紫音の意志だと？ ふざけるな！ 紫音が望んでこんなことをしているわけがないだろ！ 一歩間違ったら死ぬんだぞ！？」

「そんなことはこの建物の中にいる限り当然のことだろう？」

「そうだが、これはっ……」

まだ言葉を続けようとした俺を止めたのは紫音だった。

「いいんだよ、悠斗さん。これはあたしが選んだことだから」

「いいつて……、そんなわけあるかよ！」

「本人が納得しているんだ。それでいいじゃないか。大方、姉が殺されるくらいなら自分が死ぬ方がまだ、ってことなんだろう」

その言葉を聞いて、過去に2回ほど紫音とゲームを共にし、その時に姉のことを聞かされていた俺は納得した。

「なるほどな。お前、紫音の姉を人質にして、紫音を従わせているわけか」

「……もうこいつが彰の弟だとか、そんなことは関係ない。

「最低な奴だよ、お前は」

「ふん、なんとも言え。どうせお前はもうすぐ死ぬことになるんだ」

続けてもう一発撃つて、今度は無事な方の手を打ち抜く。

「う、あう……」

村崎がやられて、どうしたらいいかわからないといった様子で、紫音がその場に立ち往生している。

その間に、俺は3発目を村崎の足に撃ち込んだ。

バランスを失い、村崎がその場に倒れる。

「ぐ……、ち、畜生……！」

村崎はなんとか穴の開いた手で銃に触れたが、いかんせん掌を撃ち抜かれてしまっているため、引き金に指を掛けることはおろか、まともに握ることすらできないようだった。

それを確認して、俺は村崎に近付いた。

「ふん、随分と惨めな最期じゃないか」

「じ、この……っ！」

村崎は両手をついて起き上がろうとしたが、掌を地面につけたところで激痛が走ったらしく、わずかに浮かんだ体はすぐに地に落ちた。

「お前のような屑は生きる資格なんてない。ここで死ね」

そして、俺は銃を村崎の後頭部にあてがい、引き金を

「待つて、悠斗さん」

引けなかった。

「・・・なんだ、紫音。お前を弄んだこいつを殺すのは決定事項だ。見逃すことはできない」

「うっん、違うの。その役目、あたしにやらせて」

「・・・なんだと？」

紫音からの返答は予想外のもので、俺には紫音がそんなことを言う意味がわからなかった。

「これはあたしがやらなきゃいけないことだから。それにあたし、あたしのせいで悠斗さんが人を殺すところなんて、見たくないよ」

「こんなクソ野郎のために紫音が手を汚す必要なんかない。俺が・・・」

「だめっ！」

それでもなお村崎にとどめを刺そうとする俺を、紫音は怒鳴りつけてきた。

「おねがい、あたしにやらせて・・・」

紫音が俺にそう頼み込んでくる。

「・・・でもお前、こいつを殺したら死ぬんだぞ？」

「大丈夫。あたしたちは同じチームじゃないし、罠を作動させるから」

そして、紫音は少し先の通路を示した。

「あそこに落とし穴があるから、悠斗さん、あそこまでお兄ちゃんを運んでほしいな」

最初は紫音がこいつを殺したいほど憎んでいるのかと思ったが、どうやら違うようだ。

紫音の言葉からは怒気のようなものは一切感じられず、逆に村崎をいたわるような感じだった。

俺は無言で紫音に従った。村崎は痛みで気を失ったようで、抵抗はなかった。

落とし穴のところまで引つ張っていったところで、俺はその場から離れた。

．．．

悠斗さんと向かい合った時、あたしは死を覚悟した。

たとえ悠斗さんにあたしを殺す意思がなくても、あたしが悠斗さんに弾を一発当てるだけで、首輪が作動してしまう。

「覚悟してね」

あたしは自分にそう言い聞かせた。

たとえここであたしが死んでも、あたしが裏切らない限り、お姉ちゃん安全だ。

あたしは悠斗さんに向けて発砲した。

「馬鹿が、死ぬ気がよ……！」

その言葉にあたしは手が止まった。

なんでか知らないけど、悠斗さんはあたしのPDAがなにか知っているみたい。

そんなことを思ってる間に、お兄ちゃんが撃った弾が悠斗さんかすめる。

ああ、今追撃してたら殺せてたかも。いけない、目の前のことに集中しなくちゃ。そうしないと、お姉ちゃんが殺されちゃう。

あたしは拳銃を構えなおして、お兄ちゃんに食って掛かる悠斗さんを止めようとした。

「いいんだよ、悠斗さん。これはあたしが選んだことだから」

「いって・・・、そんなわけあるかよ！」

「本人が納得しているんだ。それでいいじゃないか。大方、姉が殺されるくらいなら自分が死ぬ方がましだ、ってことなんだろう」

お兄ちゃんのその言葉を聞いて、あたしは気を引き締めた。

まだお兄ちゃんと悠斗さんは何か言い争ってたけど、あたしは目を閉じて集中していた。

と、突然目の前が白くなった。

「え・・・きゃあ！」

何が起こったのか確かめようと思って目を開けたら、より一層強い光が目飛び込んできて、あたしは慌ててもう一度目を閉じた。

そして、次に目を開けたときには、お兄ちゃんが両手を打ち抜かれていた。

「う、あう・・・」

あたしが戸惑っていると、悠斗さんがまた撃ってきて、今度はそれは足に当たって、お兄ちゃんが床に倒れた。

あたしはいよいよどうしていいかわからなくて、ただその場に立ちすくんでいた。

でも、悠斗さんがお兄ちゃんを殺そうとした時、反射的に声が出た。

「待って、悠斗さん」

悠斗さんはあたしの言葉を聞き入れてくれて、動きを止めた。

「……なんだ、紫音。お前を弄んだこいつを殺すのは決定事項だ。見逃すことはできない」

そうなんだ……。お兄ちゃんは許してもらえないんだね。それなら……

「その役目、あたしにやらせて」

「……なんだと?」

「これはあたしがやらなきゃいけないことだから。それにあたし、あたしのせいで悠斗さんが人を殺すところなんて、見たくないよ」

「こんなクソ野郎のために紫音が手を汚す必要なんかない。俺が……」

「だめっ!」

それでもなお、とどめを刺そうとする悠斗さんを、あたしは怒鳴りつけた。

「おねがい、あたしにやらせて……」

あたしはそう頼み込んだ。このけじめはあたしがつけなきゃいけない

い。あたしはそう思った。

「……でもお前、こいつを殺したら死ぬんだぞ？」

「大丈夫。あたしたちは同じチームじゃないし、罠を作動させるから」

そこであたしはPDAから地図を開いて、少し先の通路に落とし穴があるのを見つけた。

「あそこに落とし穴があるから、悠斗さん、あそこまでお兄ちゃんを運んでほしいな」

悠斗さんはそれ以上何も言わず、あたしの言葉に従ってくれた。

そして、目的の場所にお兄ちゃんを置いて、こっちに戻ってくる。

「ごめんね、お兄ちゃん。もし2階で会ったあの時にお兄ちゃんを説得できてたら、こんなことにならずに済んだのかもしれないのね……」

あたしはPDAの前に手を持ってきた。

「さよなら、お兄ちゃん。……あたし、ちっちゃい頃からずっと、お兄ちゃんのことを好きだったよ」

そして、あたしはPDAに触れた。

それと同時に、お兄ちゃんを支えていた床が消えて、お兄ちゃんは下の階へと吸い込まれていった。

徐々に床がもとに戻っていく。

そして、その床が完全に元通りになる前に、あたしは下から無数の銃声を聞いた。

最終話 A 繰り返される「日常」

首輪を外した後、あたしは急いで6階へ向かった。

6階までの道筋は大体わかる。来た道を戻ればいいだけだから。

でも、そのまま戻ると、もしも榊原がやられた場合に背後から攻撃されることになる。

だからあたしは、わざと進入禁止エリアを選んで走った。誰にも追いかけられないように。

そして、走り始めて10分ほど経った頃、あたしはあたしを追ってくる足音があるのに気が付いた。

その足音はあたしが立てる足音に合わせられていたため、気付くのが遅れたようだった。いつからつけられていたんだらうか。

あたし自身が走っているため、人数まではわからないけれど、少なくとも1人はあたしを追いかけてきているということだ。場所もそれほど離れてない。

あたしはなんとかそれを撒こうと速度を上げる。

しかし、後ろの人物はぴったりとくっついてきて、引き離すどころか逆に徐々に近付かれつつある。

そして、階段を駆け上がった6階を少し走ったところで、今までとは違ってわざとらしい大きな足音が響く。

「っ!」

あたしはその音を聞いて、咄嗟に振り返ると同時に横に跳んだ。

そのおかげで、あたしは後ろから飛んできた弾に当たらずにすんだ。

「ほう、よく今のを避けたね。さすがに今まで逃げ続けてきただけのことはあるよ」

振り向いた先にいたのは、坂井宗吾だった。

ああ、忘れてたよ。コイツはもう首輪を外してるんだっただね。

進入禁止エリアへ侵入できるソフトウェアを使用してる奴かと思っただけど、これじゃあ時間切れを狙うこともできやしない。

「・・・大概の奴は避けれるさ。あんなわかりやすい音を立ててくれたらね」

「そうかい？ それは失礼した」

ここまでずっと走ってきたせいであたしは息が切れていたけれど、坂井は涼しい顔をしている。

万全の状態でも勝てる確率は低いのに、体力のない今じゃあ確実に負ける。

だからあたしは、時間稼ぎに話に付き合ってもらうことにした。

「それよりアンタ、わざわざ姿を見せたってことは、あたしに何か話でもあるのかい？」

「1つだけいいかな。君は悠斗君と付き合っているのかい？」

「・・・は？ あたしが？ 榊原と？ そんなことあるわけないね
一体どんなことを訊きたいのかと思ったら、そんなどうでもいいことだったのかい？」

「なるほど。それは良かった。さて、これで心残りもなくなったから、そろそろ君を消そうか」

そう言つて、坂井は手に持っていた銃を捨て、ナイフを構えてこっちに突進して来た。

「ちっ・・・」

なかなかうまくいようにはいかないもんだね。これならいつそ付き合つてるつて言つた方が時間が稼げたかもね。・・・いや、それじゃあ逆にブチ切れされるだけか。

とにかく、今はなんとかしてこの状況を切り抜けなきゃいけない。

あたしは片手で麻醉銃を構えた。

それを見て、坂井があたしに狙いを定めさせないように左右に不規

則に揺れる。

・・・落ち着け、集中しろ。

自分では不規則に揺れているつもりでも、実際にはその中にも個性が表れ、その結果、それは不規則であつても何かしらの特徴のある揺れとなる。

しかしこの短距離ではそれを見極めることなどできるはずもないので、あたしは坂井の方を向いたままの後ろ向きで走りながら、その動きを追った。

何をやっているのか悟られたらまずいので、あたしは走りながらも坂井に向かって話しかけた。

「アンタ、なんで、銃を、捨てたのさ？」

走りながらなので、自然と言葉は切れ切れになる。

「私にとっては、肉を引き裂く感触と共に味わうことのできる悲鳴の方が、ただ痛くて上げられた悲鳴よりも美味だね」

「・・・、狂ってる」

「そうかもしれないね。正直私自身もこの習性に気が付いたときは恐怖したよ。自分はこんなにも残酷な人間だったのか、とね」

だんだん距離が縮まっていく。それと同時に、おぼろげながら習性がわかつてきた気がする。

もう少し、もう少しだけ・・・

あたしは無駄な話をやめて、危険を承知で動きを見ることに集中した。

右、左、右、右、大きく左、フェイントを入れて右・・・

全体的に右寄りな気がするけれど、時々逆向きに大きな動きを入れて、体をなるべく中央に戻そうとしている。

そして、そのタイミングは往往にして「もう1歩同じ方向に寄れば、そちら側に寄れるスペースがちょうどあと1回分」になる時。

間違いないかもう一度だけ坂井の動きを確認する。

すると、確かにあたしの予想通りに動いた。

いける！ これでは次に坂井が中央に戻ろうとするときに麻醉銃を撃てば・・・

そして、その時が来た。

「っ、当たれえ！」

パシユッ

あたしが引き金を引くと同時に、ほとんど音を立てずに弾が飛んでいく。

そしてそれは、何も無い虚空を貫いた。

「え・・・？」

「ふむ、やはりこのタイミングだったか。君はもう少しโป๊กเกอร์エイスを身につけるべきだよ」

本来なら中央に戻っているはずの坂井は、今回だけはそのまま直進してきて、今、あたしの隣にいた。

そして、あたしに向かってナイフを振り上げる。

「あ、あ・・・」

いつの間にかあたしの足は止まっていた。

「ご退場願おうか。優木愛莉君」

ナイフが振り下ろされた。

今しかない・・・！

「はあっ！」

あたしはその刃に向かって、拳銃を持っていない方の手に握っていた、スイッチを入れたスタンガンを当てた。

最初の1発がかわされるかもしれないことは初めから予想済みだった。そして、坂井の実力からすると、その可能性は決して低くないことも。

だからあたしは、初めからかわされた後のことも考慮して勝負を仕掛けていた。

あたしを確実に殺すためには、坂井はあたしに近付くだろう。

銃を持っていた時ならいざ知らず、それをナイフに持ち替えた時点であたしはそう確信した。

坂井はあたしの麻醉弾をかわした後、かなりの確率であたしに接近するだろう。

なら、そこを狙ってスタンガンを当てればいい。そうすれば、気絶させるまではいかなくても、怯ませることくらいはできるだろう。

そう思つての行動だった。

そして、スタンガンは見事にナイフに当たって、その刃を受け止めた。

よし、あとは怯んだところに麻醉銃を当てれば

キーン

次の瞬間、あたしの手から麻醉銃が弾かれた。

「なっ……」

「残念、惜しかったね。君が片手で銃を構えていたように、私も片手でナイフを持っていたんだよ」

そう言って、坂井がさきほどまでとは逆の手に握っていたもう1本のナイフをあたしに見せた。

「でも、痺れたはずじゃ……」

「考えてごらん。いくら電流が流されたからって、私の腕力が君に負けると思っかい？」

そうだ、あたしはスタンガンでナイフを受け止めた。その時点でおかしいと気付くべきだったんだ。

つまり、あたしがスタンガンをナイフに当てた時には、坂井はそのナイフから手を放していた。

まったく、我ながら情けない。こんな単純なことに気付けないなんてね。

「さて、それでは今度こそ……」

再びナイフがあたしに迫る。

殺される

そう思った次の瞬間、どこからか3本の矢が坂井に向かって飛んできた。

「むっ……」

坂井はそのうち2本は避けたが、どうしても避けきれない1本は、現在ナイフを握っている方の手で腕で防いだ。

腕を負傷した坂井が一旦その場から引く。

すると、今度は坂井の真上から鉄格子が降ってきた。

「おっと、危ないね……」

それを避けつつ、坂井がそう呟く。

そして今度は、坂井が罨に気を取られているうちに逃げようとしたあたしに向かって、壁から1本の斧が飛び出てきた。

「きゃっ！」

慌ててそれを避けるが、その拍子に尻餅をついてしまった。

これは……、罨？ でも、それにしても数が多いような……

「ふむ、こんなにも罨の多いエリアがあったとは……」

どうやら坂井も、ここがどんなところなのか詳しくは知らないようだ。

あたしは立ち上がって、再び逃走しようか、それとも隙を突いて麻酔銃を当てようか悩んでいた時、突然足元が揺れた、気がした。

「……？」

それを感じたのはあたしだけではなかったようで、坂井も警戒しながら周囲を見渡していた。

そして次の瞬間、あたしたちの足元から無数の棘が飛び出して、あたしも坂井も、足をその棘に貫かれた。

「ぐうっ……！」

「あ、う……」

あまりの痛みに思わず倒れそうになるが、倒れる先にあるのは無数の棘。あたしはなんとかその場に踏みとどまった。

「っ……」

激痛のせいで頭がまともに回らない。

ただ倒れてしまわないようにと、懸命に歯を食いしばる。

なんとかして、早くここから抜け出さないと……

そう思って、逃げ道を探して周囲を見渡したあたしの目に映ったのは、こっちに向けてナイフを投げようと構えていた坂井の姿。

「っ！」

それに対して、あたしはそれを投げさせまいと、まだ手に握っていたもう1丁の麻醉銃を坂井に向けて撃った。

それが坂井に命中して、ナイフは力を失った坂井の手から滑り落ちた。

そして、坂井の体もまた、力を失って床に、棘の上に崩れ落ちた。

「しまっ……！」

ブシュッ

あたしが気付いた時には既に遅く、坂井は全身を串刺しにされた。

・ ・ ・

「お姉ちゃん！」

お兄ちゃんを落としてから、あたしと悠斗さんはお姉ちゃんを探して今来た道に戻っていた。

そして、元の位置まで戻って生きたところで、あたしたちは血塗れで倒れているお姉ちゃんを見つけた。

慌てて駆け寄って脈を確かめてみたけど、既に動いてなかった。

「そんな……。なんで……」

あの状態のお兄ちゃんが連絡を取ったとは思えない。ということは・

「坂井の奴、初めから殺すつもりだったな」

「っ……!」

やっぱり、そうなんだ。あの人が、お姉ちゃんを……

「紫音……」

震えているあたしの肩に悠斗さんが手を添える。

「……はは、あははっ……」

「お、おい、大丈夫か、紫音?」

突然笑い出したあたしに、悠斗さんがどうしていいかわからない様子で立ち往生する。

でも大丈夫。あたしは正常だよ、悠斗さん。

「あんなやつ……、殺してやるッ!」

あたしは5階、6階にあるすべての罠を作動させていった。

「!?!? やめろ、紫音っ!」

落とし穴が作動したことによって開いた天井から、鉄格子やシャッターがいくつも下りる音がする。

それに混じって、何かが壁にぶつかる音も聞こえる。

「きゃはははっ。死んじゃえ！」

ただ復讐するためだけに、あたしは罾という罾を作動させていった。

「止める、紫音！」

「邪魔しないで！」

あたしを止めようとして肩をつかんできた悠斗さんを突き飛ばして振り払い、あたしは罾を作動させ続けた。

もっと、もっと、もっと！ あいつを殺すまで！

もう少しですべての罾を作動させ終わるという時になって、周囲の壁から何かが出てきた。

あれ？ こんなところに罾なんてあったっけ？

そう思って地図を5階に戻して眺めてみたけれど、あたしたちのいる場所に罾は見当たらなかった。

「おい、紫音！ なにもこの場所まで罾を作動させる必要はないだろ！」

悠斗さんの焦った声が聞こえる。

「・・・違っ」

「なに？」

さっき、悠斗さんに肩をつかまれたとき、あたしは何をした？

あたしは、悠斗さん突き飛ばした。

つまりこれは、あたしの首輪が作動したペナルティ。あたしの機能では決して止めることのできないもの。

「悠斗さん、逃げて！」

あたしは咄嗟にそう叫んだけど、既に遅かった。

壁から顔を出したいくつかの火炎放射器によって、辺りは火の海になった。

「ははっ、これは……」

悠斗さんもようやくこれがただの畏じゃないこと気付いたみたいだった。

肌がちりちりと焦げ付くのを感じる。

炎はわざとあたしたちから少し離れたところに向けて噴射されていた。

そして、徐々にあたしたちを取り囲む火の輪が縮まってくる。

「紫音」

「……うん」

いくら罵倒されてもしょうがないと思い、あたしは身を縮めた。

「しっかりつかまってるよ」

「え・・・わっ！」

そしてあたしは悠斗さんに抱きかかえられたまま、炎の中に突っ込んだ。

「熱っ・・・！」

「耐えろ、紫音！」

悠斗さんはあちこち皮膚がただれながらも、あたしを抱えたまま走り続けた。

「悠斗さん！ もういい、もういいから！」

「黙ってる！ もう少しだ！」

しかし、いつまで走っても炎は途切れなかった。

いや、正確には走っているつもりでも、途中からはほとんど前に進んでいかなかっただけだ。

「畜生・・・！」

悠斗さんは既に足を焼かれていて、立っているだけでも苦痛に違いないのに、それでも先へ進もうと足を1歩、また1歩と前に出す。

「悠斗さん……」

しかし、その頑張りも遂に終わった。

悠斗さんがあたしを庇いながらも、その場に崩れ落ちる。

「悪い、紫音。ここまでが、限界だ。あとは、お前自身で……」

炎の切れ目は既に見えていた。あたしの足はまだ動くから、ここからなら逃げ切れなくもない。

でも、あたしは首を横に振った。

「うっん、あたしもここで悠斗さんと一緒にいる」

「馬鹿、行けよ……！ 生き延びろよ……！」

それに対して、あたしはもう一度首を横に振った。

「いいんだよ。もうあたしには、生きてる意味がないから……」

「そんな、悲しいこと、言うなよ」

「だって、お姉ちゃんもお兄ちゃんも、そして悠斗さんも……、あたしの大切な人はみんな死んじゃうんだもん。あたしだけ生き残っても、つらいだけだよ」

「それでも、生きてれば、いいことがある。だから、俺の、ここで死んでいった俺たちの分まで、お前は生きるよ……！」

そしてあたしは、最後の力を振り絞った悠斗さんに前へと投げ出された。

「悠斗さん!？」

炎の壁を抜けてしまったあたしは、再び悠斗さんの方へ戻ろうとした。

「戻ってくるな！」

予想外の大きな声に、あたしの体はビクツとなって、足が止まってしまう。

「もし戻ってきたら、二度と口をきいてやらないからな」

「……死んじゃったら、どうせ話せないもん」

「……なあ、紫音。俺の、自己満足に、付き合ってくれよ」

「……なに？」

もう今すぐにでも死んじゃいそうなのに、悠斗さんは気力で喋り続けた。

「前に、お前に、話したよな。俺が、ここに、いる理由」

「うん。確かに聞いたよ」

あたしが初めてこのゲームに参加した時、悠斗さんはあたしに「自

分はある人への罪滅ぼしのためにここにいる」って言った。

「そいつの、弟がな、村崎、だった」

「え？ それって……」

「そうだ。俺は、そいつに、貰った恩を、仇で、返したんだよ」

あたしは何と言っているのかわからず、黙ってしまった。

「それでな、きつと、あの世に、行ったら、俺は、そいつに、怒られちまう。なんで、弟を、殺したんだ、ってな」

「……うん」

悠斗さんがそこから何を言いたいのかわからなかったから、あたしはとりあえず先を促した。

「だから、その時の、言い訳を、さ、俺に、くれよ」

「……言い訳？」

「ああ。俺は、お前の、弟が、他人を、傷つけるのを、見過ごせ、なかった、ただだって、言い訳を、さ。だから、俺が、そいつを、その傷つけ、られた、少女を、救ったって、証拠を、残す、ために……、お前は、生きる」

そう言い切って、悠斗さんは意識を失った。

「悠斗さん……」

おそらく、もう二度と目を開けることはないだろう。

それでも、あたしは悠斗さんに向かって呼びかけ続けた。

炎が消えてからは、その体に触れた。

そして、泣いた。

たくさん泣いた。

いよいよ泣きすぎで涙も枯れてから、あたしは、拳銃で、頭を

・ ・ ・

あたしは棘から足を抜いて、なんとか棘のないところまで移動して、
足に手当てを施した。

「さて、これからどうしようかね・・・」

コントロールルームまで行くつもりにも、この満足に歩くことさえまま
ならない足では不可能だ。

その時、あたしのPDAが鳴った。

画面を見ると、そこにはスミスが映っていた。

『やあ、優木愛莉くん！』

「・・・今は黙ってなよ」

あたしは相手をするのも面倒くさかったのでそう言った。

『つれないな。そんなこと言わずにさ、少し僕とお話しようよ』

・・・どうやら本当にコイツとは会話が可能らしい。

『実はね、キミに相談があるんだ！』

あたしが返事をしないでいると、スミスは勝手に話を進めた。

『キミさー、こっちに戻ってくる気、ない？』

戻る？ あたしが、組織に？

「そうだね・・・、それももしかもしれないね」

正直、もう外の世界にいるのは疲れた。

彰に「もっと世の中を見てきた方がいい」って言われて、あたしは組織を抜けて外に出てみたけど、結局それはあたしを余計に疲れさせただけだった。

組織内にいるうちは、ただ言われたことをこなせばいいだけだったけど、外に出るとそうはいかなかった。

何をするにも自分で判断を下さなければならぬし、それが間違っているとしても、それを教えてくれる人は誰もいない。

おまけに父さんがあたしを連れ戻そうとしているんな奴らをけしかけてくるし。

あたしの父さんは組織の関係者の1人で、組織内でそれなりの権力も持っている。

だから、その追っ手もしつこい奴ばかりで、いつも追い払うのが大変だった。

仲間を見つけてからはあまり追いかけることもなくなったけど、そこでも血なまぐさい話は行われていたため、結局組織にいた頃と大して違いはなかった。

『今なら情報提供してくれる代わりに、お仕置きはナシでオツケーだよ！』

「・・・いいよ。その話、乗ってやるうじゃないか」

『さっすが、話が早くて助かるよ！ じゃあ後はゲームが終わるまで死んじゃわなないように気を付けてね』

そして、通信が切れた。

あたしは大きいため息を吐いて、天井を見上げた。

「所詮あたし1人が頑張ったところで、大してなにもできなかったってわけだね……」

そこであたしはふと気になったことがあって、もう1つのPDAを手を取った。

それは『Tool-PlayerCounter』がインストールされているもので、誰かが死ぬ度に音が鳴って知らせてくれるはずだった。

ところが、坂井が死んでもPDAは鳴らなかった。

「ああ、そうということかい」

生存者数が表示されているはずのスタート画面には、大きく『機能停止』の文字が表示されていた。

きっと、残り人数がわかってしまったら面白くないとか、そんな理由で停止させられたんだろう。

あと何人生き残っているのか、あたしにはわからない。

ただもう、そんなことはどうでもよかった。

どうせこんな状態じゃあできることなんて知れてる。

誰かと誰かが争うのを止めることはできないし、首輪の解除に協力することも難しい。

それに、組織の一員としては、生存者は少ない方がいい。

その方が組織に関する情報が漏れる可能性は低くなるし、仮に漏れたとしても、信憑性は薄くなる。

「さて、あとはゆっくり過ごさせて貰おうかね・・・」

べつに殺されたって構わない。そんな自暴自棄にも似た気持ちで、あたしは心と体を疲れから解放するため、その場で眠りについた。

『ゲーム開始から73時間が経過しました。ゲームを終了します』

ああ、また明日からは、今日までのことなんか全部なかったことになって、いつも通りの「日常」が始まる・・・

【ループ
END】

最終話 A 繰り返される「日常」（後書き）

この話の中で、「首輪が作動したのに紫音が死んでないのはおかしい」と思っ方もいるかもしれませんが。しかし、この小説内では、都合により「首輪は一度の作動につき1つの警備システムが攻撃してくる」ものとしています。そして、着用者の生死に関係なく、その1つが攻撃を終えれば首輪の作動は止まります。原作とはそれに関するルール1の記述が若干異なっていますので、ご了承ください。

第12話B 感情論（前書き）

こちらは本ルートです。ちなみに、『subversive elements』とは『破壊分子』という意味です。まさにこの章のタイトル通りですね。

それでは

裏切り者にも慈悲を……

第12話B 感情論

タアンッ

1発の銃声が狭い部屋の中に反響する。

オレの撃った弾は千島の顔の横、肩の上の何も無い空間を通り過ぎて壁に当たった。

「・・・二度とオレに協力を求めようなんて馬鹿な真似はするな。次は容赦しない」

「ひうつ・・・ああああああ！」

千島はドアの手前に立っていた優木を押し退けて部屋を飛び出していった。

「村崎・・・」

「お前もだ。失せろ」

今度は部屋に残っている優木に銃口を向ける。

「わかったよ。でもその前に少し話がしたいから、その物騒なものを向けるのはやめてほしいんだけど」

その言葉が終わると同時に、オレは優木に向かって発砲した。

銃弾はその風圧で優木の髪をわずかに巻き上げた後、部屋を飛び出て通路の壁に当たって跳ね返った。

「次はない」

オレがそう言うと、優木は一度ため息を吐いてから無言でその場を離れて行った。

「・・・はあ」

優木が出て行ってからしばらく経って、ようやくオレは気を緩めた。

「目的を履き違えるな。オレのすべきことは兄貴の仇を討つことと組織の悪事を暴くこと、それだけでいいんだ。余計な奴らを殺す必要はない」

わざと口に出してそれらを再確認する。

もう少しで殺してしまうところだった・・・

さっき、本当は千島を打ち殺そうと思った。しかしオレの中の何かがそれを妨げ、発砲する直前で狙いを僅かに右にそらした。

一体なんだったのだろうか。落ち着いて考えてみる。

そしてオレは一つの答えにたどり着いた。

「・・・そうか、殺したくなかったんだな。一時期とは言え、こんなオレを信じてついてきてくれた奴を」

どうやら感情に流されてしまったらしい。

「・・・らしくないな」

これから人を殺そうとしているのに、殺す相手に同情してはそ
の隙を突かれて返り討ちにされる。

「・・・よし、行くか。姫宮は4階で武器を調達すると言っていた
な。ならオレは3階でできるだけ集めておくか」

それにしても、冷静になって考えた今では先程の優木の話聞いて
いればよかったと思った。

もしかしたら兄貴のことが何か聞けたかもしれないのに、惜しいこ
とをした。

「まあいい、次に会った時にでも訊けばいいか」

頭の中の整理を終え、オレは本来の目的を果たすために歩き出した。

次に入った部屋で、オレは2つのツールボックスを見つけた。

「『Tool-NetWorkPhone』・・・、電話のようなものか？」

どうやら2つでセットらしい。双方のPDAにインストールする必要があるという旨が一緒に入っていた紙に書かれていた。

「後々使えるかもしれないな。持っていくか」

オレのPDAにインストールするかどうかは置いておいて、とりあえずは2つとも持っていくことにする。

「他には・・・」

更に段ボールの中を漁ってみると、拳銃の弾が5発出てきた。オレはさっき撃った分の2発を拳銃に装填し、残り3発をポケットにしまっ。

弾の補充はできたものの、新たな武器は手に入らなかった。

オレはさらなる武器を求めて3階を歩き続けた。

しかし、武器はなかなか思っようには集まらなかった。

『地図拡張』のおかげで、闇雲に探していたところに比べると効率は

はるかに良いはずなのだが、結構な人数がもう3階まで来ているのか、既に中身のない段ボールを見つけることも度々あった。

そして、また新たな『倉庫』となっている部屋へと入って行った時、オレは人の気配を感じて咄嗟に前に進もうとしていた体を後ろに戻した。

ブウンッ

オレの目の前をナイフが通り過ぎる。

「……!?!」

襲ってきた相手はまさかオレにかわされるとは思っていなかったのか、やや動揺した様子でもたついた。

その際にオレは一気に後退してナイフを構える。

「いきなりとはご挨拶だな」

「……」

「何か喋れよ」

「……見るな」

「なに？」

「私を、見るな!」

今度はナイフを投擲してきた。

しかし大してスピードはなく、オレはそれを容易く掴み取ることができた。

「ちょうどいい、武器が欲しいと思っていたところだったんだ。これはありがたく貰っておこう」

オレはそれを空いていた方の手に持ち、構えなおす。

「このっ・・・！」

今度はクロスボウを持ち出してきた。さすがに矢を掴み取るのは無理だぞ。

距離をとられて矢を放たれては不利になるので、先程までとは打って変わり、オレは相手に一気に肉薄する。

「・・・!？」

相手は急に動いたオレに標準を合わせようと慌ててクロスボウを動かしたが、動いている標的にそうそう狙いはつけられない。

「はあっ！」

そのまま相手の元までたどり着き、オレはナイフの柄で相手のクロスボウを握っている手を強打する。

「あっ・・・！」

その手からクロスボウが弾き飛ばされる。

それを拾いに行こうとした相手を、オレは鼻先にナイフを突き付けてやることで止める。

「まあそう焦るな。抵抗しなければ殺しはしない」

「なら、私を見ないで！」

相手が怒鳴る。ナイフを突き付けられているにもかかわらず、威勢がいいな。

「理由を訊こう」

「私のPDAが7だから」

「7・・・、なるほど。60時間以上他人に姿を見られないというやつか」

相手が無言で頷く。

確かに、その解除条件ならオレがこいつを見れば見るほど寿命を縮ませているようなものだな。

「わかった。なら、このドアを隔てて喋ればいいか？」

「それでいい」

そう言って相手はオレを外に追い出そうとしたが、その前にオレはクロスボウを回収することにした。

「まあ待て。お前が抵抗できないように武器は回収させてもらう」

「う……。持っていたのはそれで全部」

「本当か？ どこかに隠し持っていたりしないか？」

オレがそう問いかけると心底嫌そうな顔をされた。この反応、オレを追いだした後にもう一度奇襲でもかけようとしていたか？

「変態……」

「……。なぜだ？」

どうやら違ったらしい。しかし、変態呼ばわりされてしまった。どういうことだ？ まるで意味がわからんぞ！

オレがいつまでもその場を退こうとしなかったら、なぜか相手が顔を赤くしながら両手を水平に上げて後ろを向いた。

「……。す、好きに調べればいい。どうせ何も出てこない」

ああ、そういうことか。

ようやく合点がいった。どうやらオレに身体検査的なものをされると思っていたようだ。

「べつにそこまでする気はない。持っていないというのならこのクロスボウを拾って出るだけだ」

そしてオレは言葉通りクロスボウを拾って部屋を出て、ドアを閉めた。

「聞こえるか？」

「ん……」

少しくぐもっているが、音量の方は通常通りでも問題なさそうだ。

「まずはお前のPDAが本当に7かどうか確かめさせてもらおう。ドアの隙間からこちらに出せ」

ドアの向こうからためらうような気配が感じられたが、このままオレにこの場に居座られてはとうしようもないと思ったのだから、しばらくするとわずかに開いた隙間からPDAが滑り出てきた。

オレはそれを拾い上げ、画面を確認する。

「確かに見た目は7だな。問題は本物かどうかだが……」

今度はオレの持っている2のPDAを近づけてみるが、やはり画面は7のままだった。

「間違いない、本物だな」

それを確認してから少しあれこれと弄った後、オレはPDAをドアの隙間からきた時と同じように滑らせて返し、ドアを閉めた。

「お前、名前は？」

「・・・九條彩菜」

「オレは村崎斎。それで、いきなり本題に入るが、お前はこのゲームで人を殺すつもりなのか？」

「・・・殺さなきゃ殺される。なら、やるしかない」

ドアを挟んだ向こう側からは、返事と共にがさごそと九條が動く音が聞こえてくる。

オレはそれに構わず話し続けた。

「お前の条件なら殺す必要はないが、それでも見つけた奴を殺すのか？」

「見つけたら、じゃない。見つかりそうになったら」

「なるほど」

そこでオレは少し考えた後、もう一つ質問をすることにした。

「今までどれくらいの時間、人に見られた？」

「・・・」

「どうした？」

「・・・さつき村崎に見られただけ。後は死人としか接触してない」

「そうか」

既に人を殺したとも、殺していないともとれる答えだった。

だが、さきほどの間から考えて殺している可能性が高そうだ。

「なるべく人殺しはしない方がいい。あまり殺し過ぎると感覚が狂うぞ」

これから人を殺そうとしている奴が何をほざいているんだと自分でも思ったが、このゲームの犠牲者は少なければ少ない方がいい。そう思ってたの忠告だった。

「どうするかは私の自由。他人にどうこう言われることじゃない」

「まあ、そうだがな。ただオレが言いたいのは、あまり組織の思い通りに動いてくれるなということだけだ」

「・・・組織？」

「このゲームの管理者どものことだ」

オレは掻い摘んで九條に組織のことを教える。

話が終わった後、九條はその内容に圧倒されていた。

「こんな馬鹿げたことをして、何が楽しいんだろう・・・」

「さあな。オレにわかるわけがないだろう」

世の中には狂った人間がいることを改めて思い知らされる。

「それで、これはただのオレの願いだが、優木愛莉という少女は殺さないでほしい。そいつには聞きたいことがあるんだ」

「・・・出会わないように努力する」

「ははっ、ありがとう」

オレはそろそろ先へ進もうと思い、一度その場を離れかけたが、その前に1つあることを思い出した。

「そっだ、九條。お前、ルールは全部知っているか？」

「いや、まだ6つだけ」

「なら残りのルールを教えてやる。知らないのは？」

「3と7と9」

九條にその3つのルールを教えた後、オレは今度こそ九條にこの場を立ち去る旨を伝えて先へ進んだ。

第13話B 一兎追うものは一兎をも得ず

斎が九條と出会っていた頃、六巳、詩織、紫音の3人は赤井と対面していた。

「よう、兄ィチャンに嬢チャンら。早速で悪いんだがよ、俺にお前らの持つてるPDAを寄越せや」

いきなり目の前に現れた男性は、そう言って俺たちの方に鉄パイプを向けてきた。

「なんでだよ？」

一応このグループの年長者且つ男ということ、俺が代表して話をすることにする。紫音さんはともかく、詩織さんなんて完全に怯えちゃってるしな。

「俺のこの首輪、どうもPDAが5台ないと解除できないらしくてなあ。そこでお前らに協力してほしいって頼んでるワケよ」

頼んでる？ 鉄パイプを向けながら言えるセリフじゃねえだろ。

「悪いけど、俺らはPDAを5台も持ってない。他を当たってくれ」

「べつに一気に5台必要ってわけじゃねえんだ。1台ずつでもいい。だから・・・さっさと寄越せつつってんだよ！」

「うわっ!」

急に振り下ろされた鉄パイプを、俺はなんとか避ける。

「まったく、これだから気の短い奴は。どうして話し合いで解決しよう
としないんだよ。」

「六巳お兄ちゃん！ その人にPDA渡しちゃ絶対にダメだからね
！」

後ろから紫音さんの声がかかる。

「なんで？」

「その人の解除条件は多分『自分のPDAの半径5メートル以内で
PDAを正確に5台破壊する』こと。だから渡したら壊されちゃう
！」

なるほど。まあ初めから渡す気なんてなかったけど。

「ちっ、解除条件を知ってやがったか。面倒くせえ、一気に潰して
やる！」

再び振り下ろされる鉄パイプ。今度は来るのが予測できていたから
さっきよりは簡単に避けられる。

「じゃあどうすれば……」

「とりあえずここは逃げよ！ 考えるのはそれから！」

「わかった！」

もちろんこのとき紫音の考えの中にこの男を救える案などなかったが、それは些末なこと。どうせ姉を傷つけようとしてくるものを救う気などないのだから。

紫音さんが詩織さんを引つ張りながら走っていくのを見て、俺も男の目の前から逃げ出した。

「待ちやがれゴラァ！」

男が三下つばいセリフを吐きながら追いかけてくる。・・・本当に三下だったらどんなに良かったことか。

しかし現実問題あの男は俺よりも強くて、足も鈍足ではないため、俺だけならともかく詩織さんや紫音さんも連れてとなるとすぐに追いつかれる。

実際に、既に鉄パイプを放れば俺にクリーンヒットさせられるくらいのところまで近付いてきている。・・・しょうがないか。

「詩織さん、紫音さん！ 先に行つててくれ！」

俺は走るのをやめて男に向き直る。

「え？ ちょっと、六巴さ」わかった！ 無事だったら絶対に合流しようね！」「紫音！？」

その場に立ち止まろうとした詩織さんを紫音さんが引つ張って先へ進むよう促す。

さすが紫音さん。一瞬での確な判断を出してくれる。・・・なんか見捨てられた感半端ないけど。最後のセリフとか『無事だったら』だぜ。『無事でいてね』じゃないんだぜ。・・・やべ、深く考える
と涙が出てきそうだ。

しかしそんなことはすぐに考えている余裕がなくなった。走っている勢いそのままに男が突撃してきたのだ。

「うおらあああ！」

待て、俺にこのタツクルを止めろってのか？

「くそっ・・・止まれ！」

俺は男に向かってナイフを突き出す。

「おらあっ！」

キイイイ・・・ン

ナイフは一瞬で鉄パイプに弾き飛ばされた。

だが俺の目的はナイフで相手を刺すことではなく、鉄パイプを横に振るったことで守りが薄くなった胸にタツクルをかますことだった。

「はあっ！」

ドスッ

「ぐ・・・」

かなりの勢いが相手側にあつたので俺の肩へのダメージは大きいが、
ほぼ同じダメージが相手の胸も与えられたはず・・・

「うらあっ!」

「ぐあっ・・・」

だが相手の回復が思ったより早く、俺が身を引く前に相手が振るつた鉄パイプが背中に直撃する。

くっそ、片手で振るっただけでこんなに威力が出るのかよ・・・

そのまま俺は肩をつかまれて壁にぶつけられ、床に転がる。

「ちっ、邪魔しやがって。ちょっと痛かったぜ」

そう言つて男は俺の脇腹に2、3発蹴りを入れる。

「ぐはっ・・・」

そこからまた攻撃がくると思つて身を縮めていたが、攻撃はそれで終わった。

「まあいい、それよりも早く逃げた嬢チャン2人を追つか。へへ、
2人ともそれなりにうまそうだしなあ」

そう言つて男は卑下た笑みを浮かべた。

「っ、てめえ・・・!」

「そう睨むなよ。追いついてこれたらお前にも見せてやるからよ。あいつらが喘ぐ姿をなあ！ ひやはははははっ！」

男は笑いながら2人が走り去っていった方向へ走って行った。

「くっそ・・・」

早く追いかけないと2人が傷つけられる。

そんなことは頭ではわかっているのだが、体は痛みで言うことをなかなか聞いてくれない。

それでも痛みを訴える体に鞭打ってなんとか立ち上がる。

「急がないと・・・」

2人を無事に逃がそうと体を張った割にはこのざまだ。まったく、我ながら情けないもんだな。

それにしてもあの男、自分の命よりも性欲をとるかよ普通。

俺のPDAは取られていなかった。ぼろ布同然の俺から奪つのは非常に容易だったにも関わらずだ。

「ぐ、う・・・」

動く度に背中や脇腹、肩などあちこちが疼くが、それらを無視して歩き出す。

「なんとか逃げ切ってくれよ……」

今の俺にできるのは、そう願うことだけだった。

・
・
・

「待ちやがれエ！」

さっきの男があたしたちを追ってくる。

六巴お兄ちゃんが体を張って男を止めようとしてくれたけど、ものの5分ともたなかつたみたい。

性格や心構えは申し分ないんだけど、せめてもう少し強ければなあ。

つと、今はそんなこと言ってる場合じゃないよね。

あたしはちょこつとだけ振り向いて相手の位置を確かめる。

後10メートルちょっと。このままじゃ、もうすぐ追いつかれる……！

「お姉ちゃん、急いで！」

「え、ええ・・・！」

とは言え、もともと運動のあまり得意じゃないお姉ちゃんは今もう疲れきてる。これ以上速くはきつと走れない。

やっぱり、お姉ちゃんを先に逃がしてあたしが足止めするしか・・・

そう思ったけど、PDAを確認したところ、このあたりには罠がないからあたしには道を塞ぐことも攻撃を仕掛けることもできない。

つまり、完全な手詰まり。それでも、諦めて降参するくらいなら最後まで悪あがきした方がまだだから、あたしはお姉ちゃんと一緒に限界まで走った。

そして、遂にその時が来た。

「きゃあー！」

男の振るった鉄パイプがお姉ちゃんを庇ったあたしに当たり、軽く吹っ飛ばされる。

「紫音！」

お姉ちゃんがあたしの方に来ようとする。

「っ、お姉ちゃん、逃げて！」

「嫌よ！ 紫音を置いてなんていけないわ！」

「いいから、はやくー！」

「まあ待てよ」

そこで男が口をはさんだ。

「もし嬢ちゃんが逃げたら、こっちの嬢ちゃんが死ぬぜ」

男はそう言って、あたしの背中をぐりぐりと踏みつける。

踏みつける力は思ったよりも強く、あたしは肺にわずかに空気を送り込むのがせいぜいだった。

「やめて！ 私は逃げないから、紫音から足を退けて！」

「なら武器を捨ててこっちに来いよ」

お姉ちゃんは指示通りに持っていたナイフを投げ捨てて、男に近寄った。

そして、その肩を男に掴まれる。

その時、男の後ろから銃声が響いた。

「ああん？」

その音に男が振り向く。あたしもなんとか首を回して後ろを見る。

でも、通路にはあたしたち以外誰もいなかった。

「んだよ、誰もいねえじゃねえか」

しかしその時、2発目の銃声が響く。

「ちっ、うぜえな。パンパン撃ちやがってよ。・・・まあいい、こっちはこっちでパンパンするか」

男が鼻息を荒くしながらお姉ちゃんを引き寄せる。

「っ、だめ！ お姉ちゃんを離せ！」

男の踏む力が弱くなったので、あたしは男に向かって叫ぶ。

「黙ってるクソガキが。お前の相手は後でしてやるからよ。まずはお前の姉から・・・」

突然男の声が止まった。

「誰だテメエ？」

「さあな。誰だろうな」

え？ この声・・・

あたしが前に目を向けると、そこには2階で別れたお兄ちゃんが立っていた。

「お兄ちゃん！」

「なんだ、お前もこいつらの兄弟かよ？」

「いや、オレは違うが。その西条妹が勝手にそう呼んでいるだけだ」

「そうかよ。まあそんなこたあどうでもいいんだがよ、お前、俺の邪魔をする気か？」

「お前がオレにどうしてもと土下座しながら言うのなら、考えてやらないこともないが？」

お兄ちゃんが男に向かって安い挑発をする。でも男はずいぶん単純だったみたいで、易々とそれに引っかかった。

「なんだと！？ テメエ！ ふざけたこと抜かしてつとぶっ殺すぞ！」

「ふん、やれるものならやってみろ」

「このクソが、もう許さねエ！」

男があたしを蹴飛ばし、お姉ちゃんを投げ飛ばしてお兄ちゃんの方へ熱^いり立って向かう。

あたしはすぐにお姉ちゃんのもとに駆け寄った。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「っ、ええ。紫音こそ、痛くない？」

「ちよつとだけ。でも、大丈夫だよ。それより……」

あたしは前を向いてお兄ちゃんに目を向けた。

男がお姉ちゃんの持っていたナイフを拾って突進していくのに対し、お兄ちゃんはその場から動かず、手はポケットに入れたままだった。それどころか薄ら笑いまで浮かべて男を挑発していた。

「待ってる！ もうすぐあの世に送ってやるぜエー！」

そこでお兄ちゃんはやっと行動を起こした。と言っても喋っただけだったけど。

「おい、あまり前ばかり気にしていると背後からズドンとやられるぞ？」

その言葉の直後、あたしたちの背後からもう一度銃声が鳴り、今度は弾も飛んできた。

その弾は誰にも当たらず壁に当たったものの、威嚇には十分だった。

「なっ……、テメエ、もう復帰しやがったのか!？」

通路の反対側にいたのは六巴お兄ちゃんだった。結構な距離走ったつもりだったんだけど、もう追いついてきたみたい。

肩で息してるし、片足を引きずってるから、ここまで来るのになり疲れたみたい。

「さて、どうする？ 前後から攻撃される状況でまだ戦うか？ おとなしく尻尾を巻いて逃げるのなら後は追わないでやるか？」

そう言ってお兄ちゃんは通路の脇に避けた。

「ぐ……、畜生！ おいテメエ、名前は何だ！」

「人に訊ねるより前に自分が名乗るのが礼儀というものじゃないか？」

さっきは九條に先に名乗らせたくせに、よくもそんなセリフをいけしゃあしゃあと……なんてツッコミはなしにしてくれよ？

「赤井だ！ テメエは！」

「村崎だ」

「村崎か……、テメエ！ 覚えてやがれ、次に会った時にはぶっ殺してやる！」

そう言い残して、赤井と名乗った男は通路を駆けてどこかへ行つた。

どうでもいいけど、名前を聞いておきながら結局最後はテメエで済ますんだね、あの人。

第14話B 束の間の休息（前書き）

前回のこちらの章の更新から3週間以上も空いてしまっ
て申し訳ないです。

A章がよつやく終わったので、こちらの更新を再開します。

第14話B 束の間の休息

「ふう、行ったか」

赤井が姿を消してもうしばらくは戻ってこないことが確認できたところで、オレは気を緩めた。

そして他の連中と話をしようと思いい、西条姉妹が座り込んでいるところまで移動する。

近付いてくるオレに気付き、2人が顔を上げた。

「お兄ちゃん、助けてくれてありがとう」

「ありがとうございます、村崎さん。おかげで助かりました」

「ああ、気にするな。それより、まだ3人で行動していたんだな」

オレはそのことに少なからず驚いていた。てっきりオレがあの場合を去った後、少なくとも西条姉妹と六巳は離れて行動するだろうとオレは思っていた。

「うん。だって、一緒にいても何の問題もないんだもん」

「私は……、紫音が六巳さんと一緒に行動しようって言ったので……」

なるほど、分解しそうになった集団を西条妹がなんとかまとめたつてところか。

そこでようやく六巳がこちらにやってきた。

「よう、六巳。頑張ったじゃないか」

「お前……、見かけによらず熱血漢なんだな」

六巳が呆れた口調でそう言う。

「そうか？　そうでもないと思うが」

「いいや、絶対そうだ！　俺の話聞いて作戦を立ててくれたところまでいいとして、肝心な部分が気合で乗り切れって……、これのどこが熱血漢じゃないんだよ!？」

「オレは別に涙脆くない」

「辞書的な意味を全部ひっくるめてんじゃねえ!」

「なんだ、オレに『よく頑張ったな!』って労いの言葉をかけてもらって、さわやかに握手でもしたいのか？」

「違えよ！　はあ……、もういい、疲れた……」

「……それで、どうして村崎さんがここにいるんですか？」

六巳の何が言いたいかよくわからなかった言いがかりが終わったと

ここで、今度は西条姉が口を開く。

「ああ、それはこれから説明する。だが、その前に……」

オレは3人を順番に見る。

「3人もかなり疲れているだろう。まずは戦闘禁止エリアに行かないか？ 話は移動しながらでも、向こうに着いてからでもできるんだ」

誰からも反対意見は出なかったので、オレたちは戦闘禁止エリアへと向かった。

そしてその道すがら、オレたちは互いのこれまでの大まかな経緯と、オレと六巳が立てた作戦について話していた。

「じゃあ、このゲームにはゲームを管理している側の人間も参加してて、そのうちの1人が千島っていう少女なんだな？」

「そして、もう1人が悠……、榊原さんって人なんだね……」

西条妹が浮かかない顔をしてそう言う。ひょっとして、榊原の知り合いか何かか？ ……いや、さすがにそれは勘ぐり過ぎだろう。ただ単にそういう組織があったことにショックを受けているだけかもしれないしな。

「ああ、そうなるな」

「でも、どうして優木さんという人はその発信機と受信機のことを知っていたんでしょうか？」

「なんでも昔はそいつも組織側の人間だったらしいんだが、今は違うそうさ」

「その話、本当なのかよ？ 嘘かもしれないんじゃないか？」

「確かにそうだが、オレ個人としてはそれなりに信用できる話だと思っっている。もしこの話が嘘なら、自分からゲームマスターだったことや発信機と受信機のことなど喋る意味がわからない。・・・まあそれは差し置くとしても、少なくとも好戦的なプレイヤーではないな」

オレの方の話はそれくらいにしておいて、今度は3人にこれまでの経緯を訊ねることにする。

「それで、そっちはオレが去った後はどうだったんだ？」

「一旦は別々になったけど、2人が戻ってきてくれたおかげでその後もずっと3人で行動してたぜ」

「うん。何事もなく順調に進んでただけど、さっきあの赤井って男の人と正面から出会っちゃって・・・」

西条妹が引き取った言葉を、再び六巳が引き取る。

「で、そこから先は俺がお前に話した通りだ」

「なるほど」

「それで、お兄ちゃんは六巳さんと一緒にどんな作戦を立てたの？」
西条妹がそう訊いてくる。

「ああ、それはな、まずはオレがお前たちの進路を予測して、そこに先回りするだろう」

「うん」

「そして、オレがああ赤井とかいう奴の気を引いている間に、六巳が後ろから拳銃で威嚇して退路を塞ぐ。ただそれだけだ」

「え？ それだけ？」

西条妹が不思議そうな顔をしてそう訊ねる。

「ああ、それだけだ。何も難しいところはないだろう？ それなのにこの男はいつたい何を言っているんだか・・・」

オレがやれやれと言った表情を浮かべると、六巳がまたかみついてきた。

「おいちょっと待て！ だからお前、肝心なところを省いてんじやねえよ！」

「肝心なところ？ 話したじゃないか。目標は2人を助けることだろっつー」

オレはやれやれといった感じでそう言う。まあ、あまり弄っていても埒が明かないので、そろそろ何がそんなに不満だったのかを聞くことにしよう。ちなみに、本当にオレには何がそんなに不満なのか、見当もつかない。

「で？ お前はこれのどこが不満なんだ？」

「どごがって……、その肝心の2人に追いつくってところがだよ！」

近い近い近い。唾が飛んできたじゃないか。もう少し離れる。

言っても聞きそうになかったので、こっちから少し離れて返答した。

「……なんだ、お前、ひよっとして、女の子が困っているのに駆けつけることもできないような軟弱者だったのか？」

「いや待て、お前こそそんなタイプじゃねえだろ」

「まったく……、これだから最近の若い奴は……」

「お前のが若いだろうが！」

「そうなのか？」

実際のところ、見ただけでは相手が自分より年上かどうかなど、男は特に判断できない。

「や、だって俺、高3だし。お前はまだ高1か、せいぜい高2だろ

「？」

意外にも2つも上だった。

「年長者ならなおのこと頑張れよ。年下なんか体力で負けている場合じゃないだろう」

「お前な・・・、俺は一戦やりあった後だつての」

「どうせばこされただけなんだろう？」

「う・・・。まあ、そうなんだけどさ・・・」

と、そこで西条妹が会話に割り込んできた。

「お兄ちゃん、あんまり六巳さんを苛めちゃ駄目だよ。せつかくあたしたちのために肉壁になってくれたんだから」

「なるほど。そう言われれば確かにそうだな。おい六巳、よかったな。木偶の坊から薄鈍^{うすのろ}程度には昇格したぞ」

「お前ら、言いたい放題だな・・・」

実際にその通りなので、六巳は強く言い返せないようだった。

そんなことを話しているうちに、オレたちは戦闘禁止エリアにたどり着いた。

で、今何をしているかというところ、ずばり見張りだ。

オレ以外は全力で持久走をした後のように疲れている様子だったので、オレが1人で見張りをしようと申し出たが、西条姉がそれでは不安だと訴えたため、現在はその当人と2人で戦闘禁止エリアのリビングのようなどころにいる。

西条妹がインストールしていた『Tool-Countdown』、今いるフロアが侵入禁止エリアになるまでのカウントダウン機能によると、3階が進入禁止エリアになるまでにはまだ6時間ほどあるようなので、まずはオレと西条姉が2時間見張りをして、その後は六巳と見張りを交代してもう2時間、合計で4時間の休憩することにした。

さて、この重苦しい沈黙があと2時間弱も続くのかとぼんやりと思っているところ、突然その沈黙が破られた。

「……村崎さん」

その言葉を発したのは西条姉だった。というか、他にこの場に人はいないので、当然なのだが。

「……なんだ？」

正直話しかけられるとは思っていなかったもので、若干返事が遅れた。

だが、西条姉はそのことを特に気にすることなく、話を続けた。

「村崎さんはこれからも私たちと一緒に行動するつもりですか？」

「さあな。行動できると思えばするし、無理だと思ったらまた1人で先に行くさ」

「……そうですか」

そこで西条姉：もう面倒くさいな、詩織は少し考えるそぶりをした後、オレに頼みごとをしてきた。

「お願いします。一緒にいる間だけでもいいので、紫音のことを守ってあげてください」

「……紫音のことを、守って？」

その頼みが予想外だったため、オレは間抜けにも紫音の言葉をおうむ返しにした。

「はい。どうしてもかはわかりませんが、あの子は村崎さんのことを信用し、頼りにしています」

確かに、紫音はオレの言葉を疑わなかったし、一緒に行動することになっても、嫌な顔をするどころか、どこか嬉しそうな表情さえ浮かべていた、気がする。そんなにじっくりは見えていなかったの、詳しくはわからないが。

「本当は私が紫音に頼られたんですが、この現状が怖くてしょうがなくて……。逆に紫音の方がしっかりしてるので、頼られようなんて到底無理な話ですよ」

そう言って、詩織は自嘲気味に笑う。

「だから、私の代わりに、村崎さんがあの子を守ってあげてほしいんです。あの子が傷ついてしまわないように、気を配ってあげてください。お願いします……！」

そして、詩織はオレに向かって頭を下げた。

そこまでされた手前、オレもおざなりに扱っわけにはいかないわけ
で。

「……まあ、できる限りのことはするさ」

一緒に行動する以上は、オレは無事なのに他の誰かが傷ついた、な
んていうのは居心地が悪い。

それが年上ならまだしも、年下の、それも女の子だったら尚更だ。

俺の返事に満足したのか、詩織はほっとした表情を浮かべて立ち上
がった。

「それじゃあ、私はこれで失礼します」

「あ？ ああ。いいのか？ オレのことを見張っていなくて」

「はい。本当はこの話がしたかったただけでしたから。それに……」

そこまで言って、詩織は欠伸をかみ殺した。

「私もかなり疲れているので、先に休憩させていただきます。それ

では、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ、詩織」

オレに名前を呼ばれたせいか、詩織は一度立ち止まったが、「はい」
とだけ返事をして、奥の部屋へと引っ込んでいった。

第15話B 闇からの呼び声（前書き）

テストが終わり、別件の仕事も終わったところで、さあ書こう！
と思ったのですが、あれ、今どんな状態だっけ…？

大筋は覚えているものの、細かい設定はメモすら取っていないため、
もしかしたら今までと設定が違う！ ということになっている可能性も…。

というわけで、一応これまでの話を軽く見直して書いたつもりですが、
矛盾点などに気付いた方がいれば、感想欄にでも書き込んでいただけるとありがたいです。

第15話B 闇からの呼び声

千島はただ1人、4階の廊下を走っていた。

「はあっ、はあっ、……っく、はあっ……！」

途中で足がもつれてこけそうになったけれど、むりやり体勢を立て直してさらに走り続ける。

ついに足がまともに動かなくなったところで、彼女はその場に座り込んだ。

「はあっ、はあっ……けほっ、こほっ……」

肺の中の酸素が足りなくて私は咳き込んだ。

怖かった……

部屋の中で村崎君に銃を向けられた時、私は自分の死を覚悟した。覚悟？ いや、違う。死ぬ覚悟なんてできるはずがない。ただ、これ以上生きていることはできないと思ったただけだ。

「だって、私には、守らなきゃいけないものがあるから。だから、こんなところで死んでる場合じゃない……」

そう、私には使命がある。家族を守るという使命が。

こんなところでへこたれてる場合じゃない。

私は壁に手をついて立ち上がった。

と、同時にPDAがポケットの中で振動した。

「……………」

黙ってそれを取り出すと、そこには今まで通り、私がすべき次の仕事の内容がメールで届いていた。

まるで私が立ち直るのを待っていたかのようなタイミング。いや、実際にそうなのかもしれない。もし私が立ち直れずにいたら、今頃は……………」

……………」起こりもしなかったことなんて、いくら考えても仕方ない。私は一度目を瞑って気持ちを落ち着けた後、メールを確認した。

『4階の戦闘禁止エリアへ』

命令はたったそれだけだった。

そこに何かがあるのか、それとも、そこに着いたらまた連絡が来るのか。そんなことは一切書かれていなかった。

とにかく、そこへ行って見ないことには何も始まらない。

私は地図で戦闘禁止エリアの位置を確認して、その途中にある倉庫もチェックしながらそこへ向かった。

戦闘禁止エリアの手前まで行くと、そこに誰かいることに気付いた。

私は通路の陰に身をひそめ、その人の様子を探った。

見た目は背の高い、私よりも年上の女の人。

その足元に目をやると、重火器がたくさん転がっていた。

そのどれもが高威力のものばかり。あんなのとまともにやりあつたら、命がいくつあつても足りない。

「でも、どうしよう。戦闘禁止エリアはあの先だし・・・」

しばらくの間、その人がそこを退いてくれないかどうか見ているうちに私はその人が誰かを待っているかのように何度か周囲をきよろきよろと見回すのを見た。

が、その待ち人はいつまで経つても来ないらしく、その人は腕を組んでしきりと足をコツコツと床に打ちつけていた。

ここで待っているあたり、中に誰かいるんだろうか？

このままずっとここに潜んでいてもしょうがない。

見たところ下にたくさん武器が置いてあるものの、今は手ぶらの

ようだったので、私は慎重に近付いて話しかけてみることにした。
わざらしくならないように気を付けながら、足音を立ててその人の
元へ向かう。

その音を聞きつけて、その人はこっちを振り向いた。

手ぶらだと思っていたけれど、どうやら私からは見えない方の手に
拳銃を持っていたようだ。

その拳銃が私の顔に向けられた。

「ひあっ！」

私は弱者のふりをして、頭を抱えてその場にしゃがみこんだ。

・・・というのはただの言い訳で、実際はまだ村崎君に拳銃を向け
られた時の感覚が抜けきっておらず、拳銃を向けられた瞬間にそれ
を思い出して恐怖しただけだった。

「っと、ごめんなさいね。脅かしたかしら？」

その人は私が怯えたのを見て、拳銃を手放しはしなかったものの、
とりあえず銃口は下げてくれた。

それを確認して、私はその場に立ち上がった。

「い、いえ、大丈夫です。それで、あの、ええと・・・」

「何？」

拳銃こそ下ろしたものの、その人は私の一挙手一投足を見逃さないように目を光らせながら、「要件があるなら早く言つてよ」といった感じで促してくる。

うつん……、やりづらい。私、こういうタイプの人、好きじゃないなあ。

「……その部屋に誰がいるんですか？」

まずは一番気になったことを訊いてみる。これから私が入っていかなければならない場所。何か危険があるのなら知っておきたい。

「そうね……、あなた、今からあそこへ向かうつもり？」

質問を質問で返された。私はちょっとムツとした。

「はい、そのつもりですけど」

質問してるのは私だと言おうとしたけれど、それでこの人の気分を害して殺されたらたまらない。私はおとなしく返事しておくことにする。

「なら、確かめてきてくれない？ あそこに誰がいるのか、それとも、誰もいないのかをね。もちろん、私に頼まれたことは内緒にしてよ」

「はあ……」

どうやらこの人も中に誰が、いや、それ以前に誰がいるかを知らな

いらしい。

しかし、ここで駄々をこねたところで、私は結局そこへ向かわなければいけない。

「わかりました。あの、私、千島泉希って言います。あなたは？」

「私は姫宮皐月。それじゃ、中にいる奴のことがわかったら、私のところに戻ってきてちょうだい」

その言葉を背に、私は戦闘禁止エリアへと向かった。

後ろから狙い打たれないか心配だったけれど、少なくとも私が中の様子を伝えるまでは殺されることはないと思う。

そして、何事も起こらないまま私は戦闘禁止エリアのドアの前にとり着いた。

手をドアノブに掛ける。

うう、緊張する。入った瞬間に中から撃たれたらどうしよう。

こういう時は・・・、無能っぷりを見せつけられれば見逃してくれるかな。

私は覚悟を決めて思い切りドアノブを回して、

「ひゃあっ！」

即座に文字通り戦闘禁止エリア内に転がり込んだ。

「いたた・・・」

勢いよく転がったら膝を思い切り床に打ち付けてしまった。いくら絨毯が敷かれているとはいえ、予期せずにはぶつかるのは痛い。

「おい、大丈夫か？」

その時、頭上から声がした。

私はその声を聞いてビクツとして、立ち上がっていつでも逃げられるようにドアノブを握る。

「あ、悪い。驚かせたか？」

だけど、そこにいたのは私の思っていた人とは違った。まだ会ったことのない人だ。

「あ、いえ。大丈夫です」

その人の首輪を確認して、私はドアノブから手を離れた。

「私、千島泉希って言います。あなたは？」

この短時間で二度目の挨拶。どうせなら2人まとまっていってくれたらよかったのに。いちいち名乗るのも面倒なんだよ。

「俺は榊原悠斗。よろしく」

「あ、はい。よろしくおねがいします・・・」

正直よろしくしたくない。こんな誰かに狙われてそんな人とは。と、そこでポケットから振動が伝わった。

またメールが来たみたいだ。でも、この場で見るわけにもいかない。

「ごめんなさい、ちょっと・・・」

私は御手洗いを探すふりをしてきよるきよるする。

「ああ、それならあっちだ」

それで伝わったのか、榊原さんは親切にも場所を教えてくれた。まあ、初めから知ってたけど。

「あ、ありがとうございます」

私はそそくさとそこへ逃げ込んだ。

ドアを閉めると、私はすぐにメールを開いた。

『誰かと行動を共にしろ』

またこれだ。誰かと一緒に行動しろシリーズ。いや、私の勝手な命名だけだ。

ただ、今回は少し違った。今まではその「誰か」を指定してきていたけれど、今回はそれを私に選ばせてくれるらしい。

とはいえ、誰か？ どちらかじゃなくて？

すぐ近くに姫宮さんと榊原さん以外にも人がいるのだろうか？

もしかしたら、この戦闘禁止エリアの中に隠れていたりして・・・

私は無駄だとわかっていながら、辺りをきよろきよろと見渡した。もちろん誰も視界に入らない。

あまりここに長くいて、大きい方をしているとでも思われるのは心外なので、私は立ち上がって部屋に戻ることにした。

部屋に戻ると、さっきまでと同じように榊原さんがロビーのソファーに腰かけていた。

特に何かをしている様子はなく、ただぼーっとしてるだけみたいだ。

私が部屋に戻ってきたのを横目でちらつと確認したものの、話しかけてくる様子はなかった。

私は榊原さんの観察も含めてどっちと行動するかを決めるため、真正面は避けつつも、榊原さんと向かい合う形でおいてあるソファーの端に腰を下ろした。

そして、正面を向いたところで目に映ったのは、反対側のソファーに置かれたいくつもの武器。

「わぁ・・・」

つい抑えきれずに声が出てしまう。まさかこんなにいっぱい武器を

持っているとは思わなかったから。

その声が驚きや恐怖よりも感嘆に近かったので、榊原さんが怪訝な顔をしてこっちを向いた。

「なんだ、千島も武器魔なのか？」

ぶきま？ ブキマ・・・、ああ、武器魔かな。

「いえ、別に、そういう訳じゃないですけど」

も、ってことは、誰か武器魔がいるんだろうか。

だけど、会話はそこで終わったため、誰が武器魔なのかは・・・あ、もしかして姫宮さんかな。足元になんかいっぱい武器置いてたし。

っと、無駄な考え事はこのくらいで終わりにして、誰（今のところどっち）と行動するか考えないと。

ここで難しいのは、やっぱり一緒に行動する相手に同行を認めてもらうこと。

今までは運よくむこうから申し出てくれたけど、今度の2人はどちらも私と一緒に行動する気なんてさらさらなさそうだ。

榊原さんは私に無関心でなんだかぼーっとしてるし、姫宮さんは私を部屋の様子を探る道具程度にしか思ってたなさそうだった。

どちらかと言えば姫宮さんの方が承諾してくれやすそうだけど、その分扱いもひどくなりそうだ。

でも、このままここで悩んでいてもしょうがない。

私はダメもとで、まずは榊原さんに頼んでみることにした。

「あの、榊原さん……」

その時、姫宮さんの怒鳴る声と共に、1発の銃声が部屋の外から聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9208x/>

シークレットゲーム ~ subversive elements ~

2011年12月27日14時49分発行